川柳塔

創刊大正十三年　通巻八四六号

日川協加盟

特集・第３回川柳塔まつり

No. 846

十一月号

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

■今年中に発表された句に限ります。

■締切　11月25日（本社事務所宛）

年賀広告募集

本誌新年号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各川柳会（句会）の誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願いいたします。

★個　人　一口　二、〇〇〇円
（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団　体　次の四種といたします。
①1/3頁　六、〇〇〇円　③2/3頁　一二、〇〇〇円
②半頁　九、〇〇〇円　④一頁　一八、〇〇〇円

▼原稿締切　11月25日

〒545　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
川柳塔社

定本　西尾栞句集

橘高薫風・東野大八序文
B6判・248頁・布装上製本
頒価　3000円（〒340円）

川柳句集『銀海』

樫谷寿馬遺句集　付・郁子抄

橘高薫風序・高杉鬼遊あとがき
B6判・154頁・上製本
頒価　1500円（送料共）

◉お申込みは川柳塔社事務所へ

発行所　川柳塔社
〒545　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
電話　〇六・六二九・六九一四番

川柳風のまち

橘高薫風

太宰治の小説「津軽」に「蟹田ってのは、風の町だね」と言うくだりがある。

太宰の気に入りの、陸奥湾を広く見渡せる観瀾山公園、彼はここで好きな酒をたのしんだ。公園の海に最も近い場所に太宰文学碑がある。

風の町蟹田は、この五年「風」の川柳を全国から募集して町起こしに資し、その秀句を句碑にして文学碑に詞華を添えるかたちに建立した。

口笛がやがて大きな風になる　高橋　真紀

寂しくて風はときどき樹をゆする　盛合　秋水

ふるさとに待たせたままの風がある　原田　都子

大声のかあちゃんがいる風の町　蔦　作太郎

茄子の馬風がふわりと来て座る　藤澤　三春

今年も一万句を越える応募句の中から長野県の藤澤三春氏の句が、書家の原田宵雪氏の筆で立派な句碑になった。

十月十二日にその除幕式と第五回風のまち川柳大会が盛大に挙行され、選者の斎藤大雄、尾藤三柳、森中恵美子、寺尾俊平諸氏と私が参加した。

除幕式の観瀾山は「ふわりと来て座る」風とは異質の「やませ」に、昨夜来の冷たい雨が降りしきる。

大会は選者五人をパネラーにした川柳フォーラムあり、金子栄風氏の書のパフォーマンスによる「印象吟」あり、一般の部、ジュニアの部の作品発表を軸に、バラエティーに富みいかにもたのしい。

一般の部「芽」の課題で私の選んだ句は次の通り斬新で充実したものだった。

(客) 大砲ひとつドスンと僕が芽生えている　佐藤　俊一

(客) 炎の芽裸身の少女みるごとし　佐藤　悠

(客) 孤立した海に芽吹いた昼の月　三浦ひとは

(客) 動脈を螺旋に登る子の芽吹き　岩崎　雪洲

(客) 芽・花・種　神は呪文をくり返す　高橋　真紀

(人) 一通の芽に火傷した郵便夫　藤澤　三春

(地) 相抱く月に濡れてる芽のように　野沢　省悟

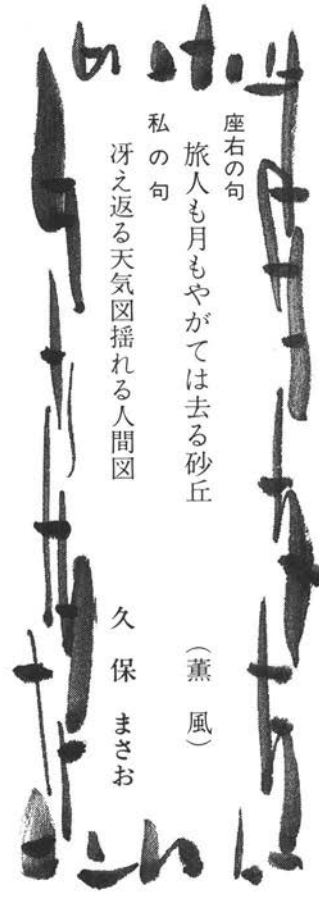
(天) 休戦へ大地が果てしなく芽吹く　松尾　喬介

懇親パーティーの蟹田風太鼓の演奏も見事だった。

翌日の奥入瀬、十和田の観光では秋色華麗な景観を満喫した。去る八月四日、弘前ねぷた祭りの帰途に接した緑翠一色の印象とは違った感動を覚えた。

それは将に中国東晋の書家王献之の言「山陰道上より行けば、山川自ら相映発し、人をして応接に暇あらざらしむ。秋冬の際の如きは、尤も懐を為し難し」を眼前に体験する思いであった。

蟹田町の主催者をはじめ、柳人仲間のご厚誼は言わずもがな、青森入りに際し工藤甲吉相談役を訪問出来たことは望外の喜びで、心から感謝申し上げる。また川柳の功徳を存分に頂いた旅であった。



座右の句

旅人も月もやがては去る砂丘　（薫風）

私の句

冴え返る天気図揺れる人間図

久保まさお

川柳塔　十一月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　風のまち川柳……橘高薫風……(1)
海外旅行と私……田中正坊……(2)
川柳塔（同人吟）……橘高薫風選……(4)
自選集……(47)
川柳の群像　岩本雀踊子……東野大八……(50)
古川柳歳時記『顔見世』……清　博美……(52)
水煙抄……西田柳宏子選……(56)
秀句鑑賞
同人吟……高杉鬼遊……(54)
水煙抄……永田俊子……(97)
大空のこころ(82)……橘高薫風……(81)
渺湖抄……八木千代選……(78)
茴香の花……宮西弥生選……(82)

海外旅行と私

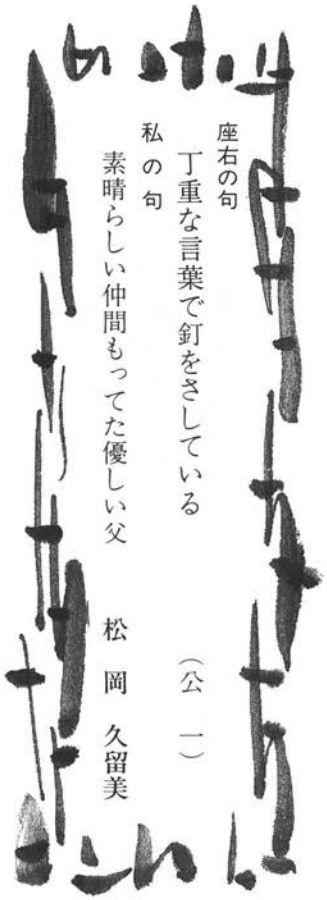
田中正坊

今でこそ毎日のように、海外旅行の案内広告が各新聞に掲載され、旅行社に電話一本かければ、世界のどの国へでも行くことができる。旅券の発行が年間五百万件、海外渡航者が千万人を越すのだから、海外旅行は少しも珍しくはない。しかし、二十年前の一九七〇年代には、こうした手軽なツアーはなく、商用や視察など、特定の目的を持つ人だけが渡航するにとどまっていた。したがって私たちには、あまり縁のないものであった。

ところが、ベトナム戦争終結三年目の一九七八年（昭和五十三年）、日本ベトナム友好協会がベトナム友好訪問団の派遣を計画し、参加を要請された。全国から募った約二百人を定期便も開かれていなかったベトナムへ、全日空の臨時直行便で送り込もうというのである。いささかの不安がなくもなかったが、せっかく訪れたチャンスだと思って参加を申し込み、七月二十二日から七日間の訪問へ旅立った。

私たちが訪れたのは、いわゆる南ベトナム

「味」……田中みね選…(84)
一路集「かなう」……岸桂子選…(84)
「気付く」……井上喜酔選…(85)
初歩教室「作る」……吐田公一…(86)
第三回 川柳塔まつり……(88)
平成九年度同人総会・各賞表彰記念句会
第三回川柳塔まつりに参加して……仁部四郎・清水潮華…(95)
新任ごあいさつ……河内天笑・宮口笛生…(96)
各地柳壇（佳句地十選／前たもつ）……(98)
エッセー 辞書いろいろ……岩津ようじ…(111)
柳界展望……(112)
十一月各地句会案内……(113)
■編集後記……(114)



座右の句
丁重な言葉で釘をさしている　（公一）
私の句
素晴らしい仲間もってた優しい父　松岡久留美

のホーチミン市（旧サイゴン市）とその周辺で、フランス統治時代の名残りをとどめる格式の高いクーロン・ホテルに宿泊した。何しろはじめての外国だけに、見るもの聞くものすべて珍しかったが、ここでそれを紹介する紙数はない。ただ、ベトナムの空が抜けるように青く、戦火の跡がない町並みは整然とし民族衣装のアオザイをまとった女性が美しかったことを書くにとどめたい。

そして翌一九七九年、続いて海外渡航の機会が訪れた。私も世話人のひとりであった国際児童年大阪懇話会が主催する「ソ連の旅」であった。ソ連船で日本海を渡り、文字どおり海・陸・空の旅を重ねて、モスクワ、レニングラード、キエフの三大都市を訪れる十二日間のツアーであった。クレムリン、ピョートル宮殿、エルミタージュ美術館からボリショイ・サーカスなど、およそロシアの見るべきものをほとんど見ることができた。

この二回の体験で、海外旅行はきちんと準備さえすれば、安全で快適なものであることがわかり、それが一九八四年、一九八六年、一九八八年の三回にわたって、上海、桂林、北京、西安、洛陽を訪れる川柳塔社主催の中国旅行を企画することにつながった。そして私自身もアジア、ヨーロッパへの旅を十数回重ねることになり、今後も健康の許すかぎり未知の国々を訪れたいと思っている。

橘高薫風選

和歌山市　牛尾緑良

卵割る命を消したとは知らず
ふんぎりがついたら影を反転す
お許しをいただきトゲを持ってます
マニュアルの通りに一日が終わる
途中下車だけど昨日には逢えぬ
妥協案誰かが持って来てくれる

鳥取県　土橋螢

これからはゆっくり走ることにするか
茶房から死ぬまでの時間をのばす
幸せのとき人形は目を閉じる
露草の花がこっちを向いている
日めくりが明日になれば逢える君
天高し鞘をはらった葱坊主

松原市　小池しげお

黙祷に始まる会に何時も居る
七夕に去年も書いておいたこと
二の腕が妻より細くなってきた
思いきり怒ってすっとした柘榴
泥舟に現金ばかり積んでいる
遮断機の向こうで亡父の声がする

広島県　藤解静風

じいちゃんのおみくじ恋は吉とでる
思い切りの悪い雫だなと思う
一瞬をためらうように自動ドア
今日よりも明日は大きな丸を描く
年寄りに席ゆずるのはお年寄り
晩学や豆球ほどの灯を点す

枚方市　前　たもつ

尊厳死貫き通し義母は逝く（義母を送る）
九十六歳　大往生のデスマスク
極楽の下見すませた義母送る
九十過ぎの挑戦なんと　一行詩
柳友を送るこの日の空晴れる
四代を生きぬき白い灰となる

京都市　山海友熙

永い旅どこまで続く女坂
女坂涙がぽとり落ちて濡れ
分れ道右も左も女坂
鳩尾に痛みが走る粟田口
旅に出る夫見送るカキツバタ
約束は二人で渡る天の川

竹原市　小島蘭幸

プチトマトこれは小さな太陽だ
海を見ている山を見ている五十歳
ポケベルに暗号があり君と僕
最後の一枚は紫　鶴を折る
古き時代の真ん中に父がいた
ホールインワンで人生終らない

黒石市　相馬一花

薄くても割引しない理髪店
早朝に起きてカボチャに浮気させ
広告のすぐに目を射る強壮剤
来賓の祝辞が終る頃に行く
シャガールが風邪を引きそう北の国
蝶も蛾も差別しないでアリは引く

横浜市　菱田満秋

幸せに見られ幸せぶっておく
電話ない一日無言独り住む
暑すぎて団扇も邪魔にされはじめ
老人も病んでおれない保険料
仏さんにお尻を向けた花を活け
恋人の猫にも媚を売っておく

守口市　森川まさお

なんとなく所在なさそう赤まんま
寺詣り回り道でも古い道
お人好しのおばはんと行く閻魔堂
盆休み隠者を気取る一週間
八月が過ぎ線香の箱どこへ置く
鰯雲さよなら地下のビヤホール

和歌山市　木本朱夏

青銅の壺の口より秋の息
片翼は夏の陽ざしに傷ついて
生き恥の赤を曝して柘榴の実

風狂の果ての貌して野の一樹
ふるふると野末をわたる虫の笛
夢を食べ尽くして獏は不眠症

米子市　林　瑞枝

祭り神輿の笛の音がする盆の窪
ラベンダーの海を泳いできた二人
未来いっぱい詰めた気球に乗ってみる
薔薇抱いて頬のあたりが紅くなる
椰子の葉のゆれる想い出の帽子
珈琲うまし庭の小鳥の名は知らぬ

富田林市　池　森子

新しい鱗で泳ぎたい金魚
秋風に朱色溶かせば流される
末席に異彩を放つのがひとり
やがてわたしに終りを告げる渡し守
美しい髪を恋して亡母の盆
空腹を満たしてそれからの一歩

西宮市　西口　いわる

満月がきびしい顔で切ってくる
忍耐の極みのように蟻の列
満天の星辛抱の拠りどころ
演技してはる後ろめたさのせいやろか
マイナスを承知で黙秘続けてる
天の川美しきひと渡らせ給え

吹田市　山本　希久子

母卒寿今日の汚れは今日落とす
幸せで何かが足りぬ神無月
すり鉢の深さは母の愛だろう
お互いの代りはいない影ふたつ
ひたむきに生きふと立ち止まる秋の中
お辞儀する癖永年の宮仕え

寝屋川市　森　茜

しかられて叱られ茶髪見習い中
ふんころがしの母に脱帽してしまう
ため息がこもる年金おりてくる
見逃しはしない冷蔵庫のキャビア
ざりがにに夜が待ち遠しいのなり
ゆく末を案じる駅の伝言板

富山県　増田　紗弓

許そうよ天井をみる星をみる
海を背に歩く稲穂が招くから
ハンドルの余裕へすすき猫じゃらし
本心を整理しすぎて出ぬ涙
マンボウの自由　自由にみえるだけ
波に向かって生きようなんて弱虫が

米子市　中井　ゆき

咲き出して金木犀は母になる
乗りついでまた乗りついで旅の夢

かがり火に鮎も悲しく鵜も哀し
花粉症のせいにしているなまけぐせ
ここ掘れワン青いとかげが走り出る
あの爪で好きと言われて逃げ出した

海南市　三宅保州

ゆっくりもしたし現役続けたし
辞める日も希望と書いてある社訓
群れていなければ不安なだけのこと
知らないと不安知ったらなお不安
本人は気づいていないしあわせ度
新薬の記事が父には間に合わぬ

出雲市　富田蘭水

初孫を待つ紋風呂敷が温かい
うぐいすを一羽心に飼っている
神社の入り口に立つ托鉢僧
握る手をトイレマークが引きはなす
清貧を知ってか猫も素通りす
甘エビが胃にとけぬ間の寺参観

倉敷市　田辺灸六

上向いて歩けませんよ丸木橋
先細る夜道を転ばないように
呆けたとは言わない人が呆けている
生き延びて身体にメスの跡をつけ
我慢する水をたっぷり飲んでみる
押し込まれ窮地で残す徳俵

大阪府　八十田洞庵

縁を切る男へ胸のすく啖呵
口裏を合わそう鬼が耳を寄せ
やがて咲く蕾小さな息づかい
群集の熱気のなかにさめた人
足元をすくう笑顔へ近寄らぬ
美しい的だねらいが定まらぬ

岸和田市　田中文時

トビがタカ産んだ気になる七五三
浮世とは言えど浮かれる世でもなく
婆さんと呼んで爺さん叱られる
遺産なし借金なしを可とする
百歳の浮世離れをした返事
冷夏でもビール仰山飲みました

大阪市　大塚節子

きぬかつぎ口へつるりと温め酒
することがあるから目覚め楽しくて
しんどいなァ寝ころぶ母にいけずする
待ち時間自分をだます薄荷菓子
何遍もさがした場所にありました
この笑顔あるから明日へ生きられる

砂川市　大橋政良

磨いても出世を見ない靴である
しらじらし言葉戻らぬ距離となる
定年の日から帽子が脱げやすい
自画像に立派な裏口があった
冬の章　絵本の蟻ときりぎりす

弘前市　今生恵子

凌霄花ねぷたの灯よう揺れる
花野行く六十路の女咲きみだれ
こぼれ咲く宮城野萩の真っ只中
百日草はは恋しさがこみあげる
もの想いキャベツの芯まで刻んでる

弘前市　相馬銀波

菊日和ああ駆け足に陽が落ちる
様々な風と会話の秋仕舞
量質と収支を括る農日記
香煙のぐらり心もぐらり通夜
忌明けまで行きつ戻りつ走馬灯

弘前市　須郷井蛙

不渡りの日から尺取り虫になる
チャイルドシート二つになって里帰り
定年後犬を子分に散歩する
ファックスで督促状が来てしまい
貿易の黒字ワインで攻めてくる

弘前市　蒔苗果林

孫子等のためを一途にぽっくりこ
思い出を追えば夢よりはかなくて
ごうを通し相手のいない宵っぱり
般若心経過去も未来も夢も空
とめどないはなしたのしいおともだち

弘前市　斉藤劦

作業着が似合う農教師で好かれ
末っ娘が眩しく見える母子手帳
フライパン丸くまあるく洗うなり
行く先は牡丹寺ともいうところ
すくすくと伸びて盆栽落着かぬ

弘前市　佐治千加子

会いたきよ萩ひとかかえゆする風
ふり返るときは菩薩の顔をして
いさぎよく無視されている池の亀
小さい嘘重ねてロングヘアさらさら
自信過剰のひとが真っ赤な花を見る

弘前市　高橋岳水

見返りの坂で禁句を口ずさむ
生と死の方程式が見直され
病む側に決定権がある医療
盲導犬の瞳の中にある真善美
自己暗示視線はいつも山頂に

弘前市　一戸ツネ

性善説友達は皆羅漢さま
好奇心くるりくるりと砂時計
凸凹の道に落ちてる猜疑心
現役に別れの椅子は拭いておく
ガタガタの命も明日の目安書く

弘前市　櫻庭順三

八月の分水嶺に廃校か
廃校で火のついた子のエネルギー
りんご袋へ存続の指折り込める
にわとりへ存続の指えさをやる
情念を燃やす油を校風に

弘前市　岡本花匠

懺悔懺悔お山参詣親と子と
弥陀の浜亡父亡母に似た石拾う
蒼い海優しさ拾う旅ひとり
納豆汁旅情噛みしめ朝の膳
残菊の無常なげかずあるがまま

弘前市　中山雅城

みんな還せと「ぴかどん」の詩叫ぶ
北限の猿は温泉持っている
嫁姑好きも嫌いも思いやり
いい子に掬われたいと願う金魚
山ぶどう盗られた熊はりんご盗る

弘前市　高瀬霜石

空腹のしばし詩人になれる時
哀しいが今日も日銭を追いかける
一杯が二杯わたしの錆おとし
傷ついた時も元気な時も飯
どの道を行こうがみんな墓にでる

弘前市　小寺花峯

手も足も出ないダルマに八つ当たり
酒を絶ち風邪を引いてる玉子酒
未練とはひとりの酒に月明かり
酒という字が書いてある俺の顔
再婚の話がポロリ三回忌

青森県　諏訪柳々

みみずでも背腹のけじめつけている
大川の水の流れに嘘はなし
『旅人』も破けてきました書写はじめ
還暦の一歩手前で助走つけ
正直っておろかしくって淋しくて

仙台市　川村映輝

老い二人今日は血圧如何です
雀百まで町内会の盆おどり
古文書に夢中外国語に無関心
過半数越えると揉め事多くなり
野馬追が終われば退屈するお馬

町田市　竹内紫錆

温暖化　年々炎える百日紅
球児らのメガネむかしの社長用
清原の顔あり古き少年誌
一度見たいポストの中の溜まりよう
分析に製図に青春立ちどおし

横浜市　清水潮華

きっと来る明日にしっかり食べておく
税務署にかけ合う眉は太く描き
出来すぎの配慮に心重くなる
行商の八百屋でふかし芋を買う
秋風にのど飴欲しい冷房車

静岡市　安本晃授

逆転を夢みて麦飯三度食う
無為無策老人保険老いの敵
玄関に二の矢つがえる妻が佇つ
帆走は父の得意な処世術
ケロイドの疼きは残る茸雲

富士宮市　渥美弧秀

野草活け祝誕生日共白髪
千羽鶴病院の窓想わせる
ライバルも味方と思う日の誤算
逃げ道を残して叱れと子に苦言
ニラの花揺れて午睡の夢去りぬ

静岡県　薗田獏沓

面接はそれぞれ違う物指しで
葉桜闇女がぐっと寄って来る
学校帰り鳴子の紐を引いて行く
傷心を緑深さに癒やされる
いい夢が見られる予感早く寝る

富山市　島ひかる

助産婦の両手に生きている手足（孫誕生　三句）
空つかむ未来を掴む新生児
幸せを他人に分けたい祖母となる
喜び二倍　悲しさ消してくれる波
さりげなく差し伸べられた手に縋る

富山市　酒井輝

禁煙と書いて地球と果てぬ旅
蠟燭のむかしが欲しい温暖化
ポケットに自分で買ったベルの罠
何時か出す詫びの言葉を溜めておく
レジの籠きょうのドラマを語り出す

富山市　舟渡杏花

そこはかとなくおかしみの電話口
散るときも一途を思う花に佇つ
蘇るチャンス他人のにぎりめし
萩の道残る月日が惜しくなる
陣笠の紐解けたまんまのお国入り

寝転べば流れの早い秋の雲
一筋を歩いた道にある不覚
誰が損誰が得したあぶく銭
中心の狂った独楽は揺れに揺れ
人もまた自然のままに春落葉

大阪市　北　勝美

澄んだ目で難民の子等何を見る
立ち枯れのアジサイ渋くセピア色
麦わらで指輪作った遠い恋
また一枚賀状の出せる友が増え
五階ですエレベーターのない我が家

大阪市　松永会美

流れながら桃は行く先決めている
五十年前の写真が笑うてる
おばあちゃんの好きだった秋今そこに
飽食の鳥も残す木守柿
遍路笠一息入れる萩の道

大阪市　川原章久

遺伝です息子やさしくしてくれる
春孫に連珠おしえて夏は負け
川の字が減ってベッドに孫はねる
ねころべば畳の上は涼し風
当分は薬味は好きな茗荷だけ

大阪市　玉置英子

芸術の秋です絶筆に日を当てる
同行の話が粋な小旅行
古寺の庭ひんやり抜ける風は秋
曼珠沙華ことしも祖先の便り待つ
習性が喧噪の街でほっとする

大阪市　町田達子

わが祈り我に念じること多く
玄冬のエンジン急にはかからない
あじさい寺の冬思わずにはいられない
これしきと小錦関に励まされ
金の鈴からたちの道友想う

前月号分

大阪市　本間満津子

麗人の過去知りたがる隣組
過去知らず過去語らずで気がおうて
ケーキには目がないくせにやせたいと
恋をしてやせて結婚してこえる
仲人役つづき礼服身になじむ

大阪市　中田あい子

クルーズへ能登大橋が朱に染まる
羨望の的独り身の御し難し
人情に熱い和倉のお湯めぐり
実りある秋ぎっしりのプログラム
虫の声師走へつづく蜘蛛の糸

大阪市　津守柳伸

正直に生き逆境に耐えている
出遅れた一歩が未だ縮まらず
方円の器に馴染む老いの日々
頑張れと声は掛けるが手は出さず
助太刀に抜いた刀が錆びている

大阪市　井上白峰

すいれんの絵はがき友のこころかも
探しもの祖母は手品のように出し
師を想う季の移ろいに風は秋
絵日記の口が大きいママの顔
大和路を歩けば遺跡語り出す

大阪市　辻川慶子

被災地で悲しい母の地蔵盆
古陶展磨かれてきた時間です
女房のハミングいつも草津節
仏具屋も感謝セールをやっている
寺の屋根なぜかふんぞりかえってる

大阪市　桝本蕗児

天高く馬肥えすぎて走れない
朝市の漬物うましフルムーン
敬老会昔憶えた唄踊り
満月に百舌鳥八幡の太鼓の音
松茸が盛んに客を呼んでいる

大阪市　清水利武

大文字心の中で君と遇う
今少し若ければなど恋を恋う
人生は思い出つなぐ旅と観る
高原のロッジの極み涼一字
イエスマンの軽さ二次会三次会

大阪市　田中節子

深爪をきる敗北感にさいなまれ
悪人は怖い偽善者はなおこわい
プライドがあるからあなたの嘘ゆるす
チンをして召し上がれとの置手紙
もののけの姫はダイアナ妃かも知れず

大阪市　板東倫子

エンピツの2B好きで楷書の字
古書市で積んどく本を買うも秋
こおろぎが夏バテのこと聞いてくれ
恐妻家と亭主関白の二面相
名人が約の目になる手には香

大阪市　川端一歩

切り方がどうあれ嫁のお漬物
切りつめて孫に会う日のフルコース
入道雲ファイト　ファイトの声がする
雲行きを眺めて座る端の席
母と姑昼のワインも寡婦同士

大阪市　清水絹子

大阪市　福岡雅楓

関わりがなければニュース軽く聞き
喜びを軽く話せる友がいる
墓石を洗う子孫がまだいます
行間に揺れる心を秘めながら
濡れながらテルテル坊主明日の夢

大阪市　小林周信

手持ち無沙汰伸ばしてみるか無精髭
目を入れた達磨の後日物語
一言居士　耳順に遠く古稀迎え
リップサービス過ぎて届かぬ思いやり
ハムレット台詞諳んじ酔う教師

大阪市　稲本凡子

今年また夏のいじめに会うている
入院をしてから歳に負けている
金貯めて寿命がほしくなった兄
余生とは古希喜寿傘寿どのあたり
空しくて公園へ行く回り道

大阪市　渡部さと美

マザーテレサ神の化身で来たこの世
庶民愛しダイアナ愛に飢えしまま
がんばらんでいいよ残暑のひまわりよ
揃わない髷の元気で綱倒し
白壁にオレンジいろの陽が吸われ

大阪市　奥田良子

二三人信じる友を持っている
黄泉へと旅立つ人の眼鏡ふく
人生の終りもかくや夕日落つ
日に何度心の母に助けられ
ああ女懺悔してから秘密もつ

堺市　柿花紀美女

香煙の中で先祖と盆休み
試験管ベビーも聞いてる子守唄
国平和記念硬貨へ列作り
古日記遠い日の夢読返し
一日中動いています悲しい日

堺市　近藤豊子

台風接近てるてる坊主一列に
池の辺のつり竿ごとに子の頭
指をさす子らにあわてる池の亀
亀しずみ鏡のように暮れる池
池の亀　丹後の海へつづく空

堺市　山本半銭

穂が実り藷も太って夏終る
祭太鼓帰省せぬ子を待つ法被
たんと食べふっくらしてる古稀の秋
詰めてくれた席で他人のぬくい膝
ふるさとの原風景にいろがない

堺市　河内月子

買物の上手い男の子が増えた
飲む水をぎょうさん買うてラッタッタ
リハビリに家事をすこうし手伝わせ
半額の鉢植えたんと花をつけ
父ちゃんの枕は借りぬことにする

堺市　志田千代

駅前のソーダ水で終った恋
さようなら愛よりパンを選びます
おまけの人生好きな人に出逢う
現役であったら今日はボーナス日
猫の鼻もぬれて我が家はつつがなし

堺市　桑原道夫

知恵かなし　熟睡の子の額
鶏抱きし少年永遠に飛べず
せつなくて砂丘の砂にくちづけす
ビー玉を口に含んで知らんぷり
屋上に人居て人無きがごとし

高石市　浅野房子

流れ弾のこないところで日向ぼこ
波乱万丈ひとごとなので面白い
ダイアナ妃の葬儀馬車と花束と
狼の雄叫び少女聞きのがす
ひとときを乙女に還るクラス会

豊中市　安藤寿美子

岩また岩　観音に見え虎に見え
石畳すり減る李白も通ったか
軍歌という悲しいものをくちずさむ
北京小雨ああマオタイの酔心地
大雁塔　登りはよいよい降りはこわい

豊中市　湯浅馬洗

ああ命微笑と愛憎巴里に死す（ダイアナ元妃を追悼）
彰ぼんの指先包む母の息（U氏の少年の頃　三句）
氏名欄楷書の文字は父に似る
笑い声温い灯の下犬も起き
補聴器に噂の感度鈍くなり

豊中市　井上直次

先生はよく知っている但し書き
評論家御高説には汗が無い
同じメニュー太る人あり細る人
時経てど恨みいや増す原爆忌
大過なく過ぎて花束受ける朝

豊中市　田中正坊

ミステリー読み惚けてる秋夜長
図書館で内田康夫をまた借りる
一日一善　梅干しを食べている
怠けるとひしひし迫る締切日
世界地図まだ見ぬ国の多いこと

豊中市　江口明光

ワンテンポずらして送る車椅子
ガラクタの中から未来が甦る
脈を打つ音が昼寝の邪魔をする
千円の寄付で自分の位置を知る
ヒマの無い母出し雑魚の首を取る

豊中市　吉田あずき

気象庁の訂正したる残暑かな
秋の孤独かみしめている吾亦紅
天才の一オクターブ高い声
盗難届　花色木綿とでも言うか
おさな児の顔で組閣を待つ候補

池田市　藤井計光

学者には女は唯の伴走者
古希すぎて下天の夢が追ってくる
初老とは花ならつぼみ老けこむな
ブーゲンビリア夏の日差しに燃え盛る
愛さめて路傍の人となり果てる

箕面市　椎江清芳

消えかけて消えぬ明かりに似た余生
連れ添って歩けば妻の広い顔
産声のこの子と飲める齢を繰る
北浜は身ぶり手ぶりの泣き笑い
孫の夢祖母がつぎ足す貯金箱

箕面市　岩津ようじ

ケ セラセラ じゃあねと入る手術室（膀胱癌手術　五句）
見ようではビキニに見える丁字帯
点滴の窓の外では鳩の恋
大部屋へはしゃぐ子つれて来る見舞い
容赦ない残暑も嬉し退院日

吹田市　栗谷春子

ぼちぼちと夏訣別の暑さかな
この夏も半病人でやっと過ぎ
私にもけむたい人がいてくれる
待ちわびたきすげのお初ほとけ様
むらさきの桔梗に映えて染五郎

吹田市　茂見よ志子

寒菊にそれぞれ名あり苗に立て
よりどころないコスモスの揺れをみる
気がかりな友の身辺秋深む
市の公報金婚祝詞受けに行く
屈託のない顔こごと引っ込める

吹田市　古川喜美子

ああ昭和貴様と俺の青春よ
千の目の開き濡れてる魚市場
命軽し人を柱と数えた日
力一杯の結び目　力では解けぬ
線香花火ぽとりと落ちた後の闇

吹田市　瀬戸まさよ

文句ある日本だけれどよいお国
動と静ねぶたとねぷた切り結ぶ
奥入瀬の春夏秋冬神の水
さんま豊漁大根おろしたっぷりと
まんじゅしゃげ毒も薬も美の中に

茨木市　藤井正雄

究極の濡れ場セリフの無い舞台
女教師が校長を抜く運動会
先生の素顔にお会いする夜店
盆帰省今年は反故にするバイト
父さんは時代遅れと子に味方

茨木市　井上森生

九万の湖水と森とトナカイと（スウェーデンの旅）
にしん漬けあり鮒ずしに迫る味
大聖堂ウップサラ神の愛無限
ノーベル賞レンガ造りがよく似合う
城塞に戦火は知らぬ鳩の群

茨木市　堀良江

円卓に座席指定の小さい札
キッチンがそのまま母の読書室
安全神話遠い日のこととなり
思い出の深夜映画を一人見る
ぜいたくはわざわざ買って飲むお水

高槻市　芦田静江

猿石に逢う約束の秋ひとり
蔵の奥　備長炭を恋う火鉢
今一度華さかせようまむし酒
まだ女残しブランド漁ってる
相田みつを信じもがかずおかげさん

高槻市　川島諷云児

平和だな人の噂に明け暮れる
七人の敵がまだいるありがたさ
舌の根が乾かぬ嘘がまたも出る
正論と思ってたのは自分だけ
いい齢と笑われてよしペアルック

高槻市　井上照子

チチチ草有り虫の音と街角の灯
さんま焼く一匹連れなく淋しかろ
方丈さん入院お盆わからぬ経あげる
白桃の好きなあなた剝きましょう
二学期を迎え想い出胸の中

守口市　結城君子

夕立のない国となり住みにくし
あかりみな消してテレビの風の盆
新涼を待って乗りますモノレール
悪玉の細菌の名をすぐ忘れ
コスモスが花屋になくてもの足りず

寝屋川市　北岡波留吉

先ず御先祖拝み寿ぐ金婚日
改めて妻に礼言う金婚日
愛してると言ったかいなと金婚日
金婚のメニューに映える明石鯛
孫達の万歳嬉し金婚日

寝屋川市　後藤黎之助

宿題はまだかまだかと蟬の声
帰省した孫風鈴の音を消し
見て見ない振りが出来ないから困る
古希過ぎて砂場に穴を掘る時も
生きるべし梨にぶどうに生サンマ

寝屋川市　柴田英壬子

秋の陽を浴びて石庭辞す無口
長い髪の孫と絆の握手する
表現が下手でライターまたカチリ
花冷えの街でただ逢うだけの恋
ダイアナの柩の百合がいじらしい

寝屋川市　岸野あやめ

照りつけて松葉ボタンと蟻の列
桃のような少女が秘める師への思慕
五臓六腑弱らせてするダイエット
駅高架成って始発に起こされる
雨漏りを直して家を売りに出す

寝屋川市　平松かすみ

耳の穴全開させて森の中
敬老日おかきの好きな姑だった
幸 不幸 一線引くのどの当り
苦労したんだ六十五歳腰曲り（姉）
暢気だな途中下車して旨い寿司

寝屋川市　酒井勇太朗

無駄骨と知りつつ百キロレース出る
謙遜をまともに取って修羅を見る
逆転を信じて妻がついて来る
葬儀の日霧のロンドン晴れわたる
ハンディで貰ったカップ軽いこと

寝屋川市　堀江光子

病院のバラ満開の柵となり
食卓の顔変りない今日の幸
カルテ書く医師冷静な横顔で
越えてきた波音遠く聞く日記
野次馬の中の自分の顔探す

寝屋川市　坂上高栄

歩く日のこんなうれしい試歩の杖
ばあちゃんも教えてもらうたまごっち
自慢する心はきっと寒いのだろ
指の節越せぬ指輪に笑われる
七五三母の人形が出来ました

寝屋川市　籠島恵子

カタログ一枚こぬ日わが家に風がない
止まる風しばらく羽を休めよう
離婚再婚風のたよりに乗りやすい
無風地帯疑問がわいてきます幸
やりすごす風になってる下り坂

枚方市　八田敏

鰯雲　故郷の遠い秋を呼ぶ
亡母の忌の読経に負けぬ蟬しぐれ
缶ビール一本で済む誕生日
敬老の年齢が進んで追いつけず
年金と医療と平和老いの幸

枚方市　森本節子

避難用のリュックから少しお金出す
ランタナについて部屋までバッタの子
秋の西日鏡のよごれとがめてる
パパラッチなんてこわい言葉だろ
お彼岸に求めた鈴(りん)の余韻きく

枚方市　海老池洋

一望千里心も秋に観覧車
故郷の観光バスに乗ってみる
妻にない魅力へとまる男の目
先生も人で生徒の合う合わぬ
自分史に書けぬ悪女の二三人

東大阪市　森下愛論

風鈴がビールのお代わり急き立てる
三味線の音に密談ちと途切れ
踏んまえた仁王の足の下の俺
山登りリュックにビールお供する
ヤッホーの若さで山頂老い忘れ

東大阪市　西村哲夫

有るはずの今日という日が無い日記
稲の穂もやっとゴールと息きらし
生きてます癌であろうとなかろうと
どの人も時のせつなさ言うて逝き
このボクもやっぱり仁義礼智信

松原市　玉置重人

ワンカップ佗しい影がつきまとい
日々好日ペンがすこしも捗らぬ
フルセット残暑きびしいものと知る
年金で暮らしてますと逃げている
皆さまのおかげと思う数え唄

藤井寺市　中島志洋

元就が見得を切ってる菊小袖
披露宴スター気取りの色直し
エリートにない下積みの底力
幸せなガムは美人の歯でかまれ
ニュールック大根足が恨めしい

藤井寺市　吉岡美房

老人の日だけ労る長寿国
にこにこと妻が離婚にあこがれる
妻にもう効かぬ誓いをくりかえす
俺に似た孫がはらはらさせてくれ
深呼吸するため秋の天がある

藤井寺市　高田美代子

定年のない主婦だ主婦だといい聞かす
ふところの深さへ泳ぐ小魚たち
ライトアップの森でスズメが眠れない
斬り役にペン一本があればいい
ありがとうが口癖になり齢を積む

藤井寺市　鴨谷瑠美子

さよならを書くほど軽いペンでなし
羊雲果てなく思い湧くところ
恥ずかしいことを先ず知る愛となり
より遠く見たく梢にいる小鳥
ひとりなら軽い食事のオムライス

藤井寺市　福元みのる

思いやり受ける気のない自画自賛
よくもまあ似た事件事故続くもの
長生きも良し悪し動転するニュース
会計と日記妻には嘘つけぬ
手短に川柳一句わが日記

羽曳野市　吉川寿美

それぞれの駅に憶いが立ちどまる
それなりに幸せでしたパンの耳
失いしものを数えて旅なかば
思慕恋慕乾かぬ傘を身の裡に
何事もなかった今日の靴を脱ぐ

羽曳野市　福田満州

敗戦日ドライアイにも涙湧き
「宿題塾行こ」と聞こえるこおろぎ
雑草の津波のような休耕田
サングラス部屋の中でもお許しを
本テレビ避けよと医師の事も無げ

八尾市　内海幸生

楽園はかくばかりかやバリの朝
大阪の味は楽園よりうまし
故障したカメラを提げて旅にいる
水槽のダンス見ている料理屋で
伸べた手を払ってシャッター押し続け

八尾市　宮西弥生

秋の雲見る近道のある古都の庭
実る日の案山子もそれから白昼夢
冷や奴三日つづいて夏に慣れ
鬼も蛇もプライベートがある昼寝
風追うて峠の茶屋の汗といる

八尾市　吉村一風

もう百円ふんばっておくお賽銭
墓に酒かける言葉が芝居じみ
千枚田手伝う人の皆若し
すんなりと来た訳でない今の椅子
花屋から秋と笑顔と買うてくる

八尾市　宮崎シマ子

発表会一番好きな靴でゆく
この秋も松茸一度も食べなんだ
うちは全快次には友の夫が病む
曽孫の名はアイコにあらずアイナちゃん
彼岸花戦死の兄の忌も近し

八尾市　高橋夕花

すっきりと秋を迎えたわけでない
すれちがう心の奥に渦が巻く
りんどうを手向けた部屋は亡母のいろ
秋の雨夫婦になが い無言劇
墓地買って儚い夢をみています

八尾市　高杉千歩

忌がめぐる母の歳まであと五年
母の忌やよう遊ぶねと笑み給う
二十三回忌修業たりぬと亡母の声
亡母の名で肩叩かれた萩の寺
長生きをしたいと思う秋日和

富田林市　片岡智恵子

友達が闊歩している負けられぬ
くすぐったく暖かい席ゆずられる
墓のうしろに回れば父がよく見える
そよ風を入れて夫婦の程のよさ
睡眠薬どうしてみんな白だろう

富田林市　松本今日子

雲隠れするによさそう峰の雲（穂高にて）
足元に虹を見ました黒部ダム
本だなは破れた夢もそのままで
遠い日や近い日やあり六十路
娘が二人姑にならぬ気楽さよ

岸和田市　高須賀金太

池売って立派な町会館が建ち
葬式が柿落としの町会館
梨の名はどうする二十一世紀
ホテルではコーヒー飲まぬことにする
だんじり囃子聞こえて秋の雲となり

岸和田市　古野ひで

世の乱れどうあれ笑い忘れまい
だんじりに息吹き返す風が吹く
美しく老いたく亡母の姿追う
師の言葉今も心に生きている
鰯雲孫不思議がる美しさ

岸和田市　寺田甚一

祭一色提灯つけて夜優雅
帰る古里なくて盆正楽ができ
流暢で歯切れがよくてなじめない
ハンサムな医師に通院派手を着る
一銭と十円玉の価値比べ

岸和田市　井齋一齋

ボーナスに億の夢見るジャンボくじ
お転婆を着物に包む見合席
ばれた嘘眼鏡を拭いて知らん顔
合いの手に詫びる民謡鐘一つ
課長の唄お世辞の拍手とも知らず

岸和田市　長谷川呂万

説得はコンピューターの答です
流行と縁なく暮らし小市民
ライバルのミスを愉快と思う悔い
予感だけよくて買ってる宝くじ
秋深く初恋胸に去来する

岸和田市　原さよ子

免許とる孫へ心配一つ増え
午前四時弾む祭りへ行く用意
いつのまに他人事でない古稀と喜寿
類が類呼んで愉快な川柳会
へそくりは特権ですと妻笑う

岸和田市　岩佐ダン吉

ひとことが重い言葉だありがとう
宿敵の笑顔に負けたなと思う
とめどなく列島軽くなる命
下駄ばきで歩くと風までも温い
反対の手は高だかと僕ひとり

和泉市　西岡洛酔

母の手の温みひたすら平和乞う
七十の坂苦労性を背に隠し
一合の米に夫婦の輪が温い
自転する地球で生命の唄を恋い
一病息災雑兵の職を生き

和泉市　岡井やすお

日本列島どこを掘っても皆遺跡
退場でプロの監督らしくなる
球児まで球打っつけて知らん顔
傘寿過ぎて喪服着ること多くなり
手助けは無用と健気車椅子

神戸市　中村ゆきを

リストラへうらみを込めて放尿す
明日は明日いま幸せの心太
サイン　コサイン僕も茶髪にしようかな
ケータイがまた鳴り教授おこり出し
ブンガワンソロ歌った下宿のあの窓よ

神戸市　山口美穂

大あくびして事無く今日の仕舞風呂
堪忍袋を今朝はしっかり締めておく
老母も犬も軽い寝息で今日も無事
消費税　医療費　暮しに困らぬ人が決め
仏壇へお墓へ庭から秋の花

尼崎市　春城武庫坊

雲の峰の父に誓いし和と絆（父五十回忌に三句）
五十回忌に知らぬがはしゃぐ孫曽孫
父のこと語る兄弟灯が消せぬ
星見えぬ街でロマンが見付からぬ
風が吹いてもなびかぬ旗が一つある

尼崎市　春城年代

秋蝶のおとずれ花の息づかい
人恋しい風の匂いとゆく九月
とてもまともな神経でない言いがかり
トラブルに強い女医さん見てしまう
連敗をものともしない好きな顔

尼崎市　長浜澄子

爪先で立てど昨日と同じ視野
まさかまさか泪が海を見ただけで
淋しさが嫌い道化を繰り返す
はかりごとあり曇天もまた楽し
耐えた日を口に出したら負けになる

伊丹市　山崎君子

夏惜しむ一つ残ったイヤリング
ひまわりを耳に咲かせた夏終る
赤　藍　青　花ものがたり憶うひと
のれん替えあさがお終るひとり言
欲張った祈りのせてる赤トンボ

西宮市　門谷たず子

時どきは座り心地の悪い椅子
手術する決意手鏡がくもる
血の絆　義理の絆をシーソーに
少年の乾きを癒やす井戸がない
故里の星屑拾う亡母ひろう

西宮市　奥田みつ子

傷心にあじさい寺へ足が向く
言葉にはならず祈りの手を重ね
立ち向かう勇気ください雲の峰
限りない欲に生かされ生きている
情念の火の粉も舞うや薪能

西宮市　秋元てる

足どりを軽くしたのに母見抜く
阪神へ応援それはボク自身
待合室年齢問われ故郷問われ
売り上手ひそかな誇りくすぐられ
馬が合う回り道した者同士

西宮市　山本義子

秋の雫ぽとりと落ちて山染まる
ななかまど葉も燃える頃また来ます
洋菓子屋も店先飾る秋桜
うとましき世相に何も出来ぬまま
燃えて死ぬ生きざまをまだ見いだせぬ

西宮市　亀岡哲子

目の裏にナイアガラ落ち遠花火
いけずばかりして恋だとは気付かない
新妻へ令夫人とて佳き招き
夫の味方する振り実は子も味方
もめている土地だが花は咲き乱れ

西宮市　菊池トミヱ

話し合う重い心でめがね置く
発車ベル重い口から出る本音
夏が逝くときめく事もないままに
渡り鳥干潟の叫び届かない
もう決めていても相談すると言う

西宮市　久保まさお

復興を祈る半月虫時雨
楕円球蹴られて転ぶ秋さなか
病床の五体静かに秋の風
夢つなぎ明石海峡渡る虹
秋風の内緒気になるイヤリング

西宮市　牧渕富喜子

紬着て女は芯を秘めている
扇風機のほこりに残る夏の日日
扇風機拭えば少し秋になる
子や孫にいい顔出来ぬほど暑い
未来はいつも神の手にあるシャボン玉

川西市　松本ただし

分別で割り切れないのが流行りだす
忘却の流れ河幅広くなる
髭剃ってともかく朝がひとつ済む
気が長くなったか欲が減ったのか
誘われて誘うて落ちる銀杏の実

川西市　氏林洋敏

曼珠沙華どどと秋が押し寄せる
庖丁がどれもきれなくなっている
病名に心当りがある不安
環状線僕は一日家出する
怒る前急にやさしくなる言葉

宝塚市　吉田笑女

いい話また聞きもらす老いの耳
時々は居留守を使う一人者
始めての同居も終る十ヶ月
来なければと泣いた日もあり数多く
老いてなお一人暮しもなれました

宝塚市　嵯峨根保子

ダイアナショック気づけば空にいわし雲
百済さんはパリ泣きに行く膝がない
ひや酒はきりきりしゃんと江戸切子
結び目がすこしゆるんで珊瑚婚
人影がチラリ地下三階の駐車場

宝塚市　上田佳秋

煮え詰まる男と女秋深む
この歳になっても疼く秋競馬
妻の遺影この頃そっぽ向いたまま
どたんばの嘘へハンカチ出す女
あと何年生き恥さらすのかピエロ

相生市　中塚礎石

ボランティア毎日鶴を一羽折る
追い越しの車へ無事を祈願する
二枚舌ときに賛否がからみ合う
喜びの一滴となる茶をすする
ふんぎりへいささか酔うた縄のれん

加古川市　吐田公一

初盆の回り灯籠に亡母の影
草餅を弁当に亡母の黄泉旅
パントマイムの上手な妻に操られ
月を賞ずゆとりができてきた余生
正直の頭も時に見放され

京都市　都倉求芽

春風の桶屋といかぬエルニーニョ
価値観を切り取り線に読まれてる
黙って見ているが応援はしてる
言葉は銛だ突き刺さったら抜けぬ
その時はその時返事だけしとく

京都市　大河未佐子

大文字見えるおまけの部屋に住む
地蔵盆胸おどらせる　ふごおろし
夏休み電車の中は玩具箱
飼い主が妬くほど私もてます
ひとり生き心安まるさだめかな

京都府　稲葉冬葉

知らぬ間に咲いてしまった月下美人
のど元を過ぎれば笑みも零れよう
丸い字が逆撫でをする萩の道
炎えて炎えて炎えこがれて吉祥寺
現実の中に遺品となった時計

奈良市　宮口笛生

秋や秋　夏ばても無くうまい酒
野の空気雲の配置も秋となる
香りない松茸御飯出来上がり
日本の松茸口にしたことがない
贅沢に育ててしまう好き嫌い

奈良市　米田恭昌

事後承諾息子嫁連れ孫を連れ
天下りまだ甘い汁吸う輩
センセイの辞めれば済むと言うけじめ
座禅組み瞑想しても色と欲
逆縁のアルバム哀し子の笑顔

奈良市　天正千梢

露天風呂しばし時計をとめておき
影法師吾に反省促して
一人旅忘れてならぬ時刻表
ない鐘の音まで聞きたい道成寺
思案にくれ深爪を切っている

生駒市　麻生アート

ドクターストップ酒のない飯モゾモゾと
行楽日和こちゃらは医者の梯子なり
今様の蜩ビルの壁で鳴く
生涯学習　知恵熱が出そうなり
冬眠夏眠どっちも欲しい老いの坂

生駒市　北山悟郎

障害者不可能を可能に燃えている
英霊の無縁仏の虚しさよ
鍛えた魂虚し医者通い
説法に皆が善人顔となる
盆踊り済んで浴衣の役終る

大和高田市　岸本豊平次

二病息災妻と一病ずつ分けて
ハイチーズで撮った笑顔はまがい物
取られた息子とあげた娘の披露宴
我が儘とも言われる老いの趣味多彩
孝行はしてないが夢に出てくれる

大和郡山市　坊農柳弘

銀婚式付かず離れず夫婦独楽
銀婚式愛の指輪をもう一つ
秋散策箕面の珍味もみじ揚げ
晩秋のみちのくゆっくり夫婦旅
人肌も熱燗もよし妻の酌

大和郡山市　榊原彗心

留守電に時刻ばかりが入ってる
繁栄の生きた足跡社史がある
公園にネクタイ族の昼下がり
ひび割れた急須の似合う二人きり
借りものの知識は後が続かない

和歌山市　福本英子

阪神が勝ったらコーヒー二百円
糠床をまぜているのにチャイム鳴る
シャネル買ったと贋物を見せられる
クーラーに冷麺きっちり付けがくる
棚経の僧ブルマンを召し上がる

和歌山市　堀端三男

快感より空しさ残る勝ち喧嘩
朴訥だが彼の意見に芯がある
反対意見がカンフル剤になる会議
饒舌がぴたりと止んだ蟹が出る
花道を踏まず人生黄昏れる

和歌山市　垂井千寿子

画用紙の白は無限の夢を抱く
ライバルの背に滲んでる老い哀し
廃線の雑草にある郷愁よ
年流る不協和音のクラス会
別姓になっても妻の枠の中

和歌山市　川上富湖

綿棒の丸さぐらいの情はある
憑依霊亡父のものなら軽かろう
目減りする私の中の母親度
友達が増える楕円のいい形
妻という字がバラバラになりたがる

和歌山市　川上大輪

輪廻転生　人間だってリサイクル
切り札がまだかまだかと喧しい
ユートピアとはお風呂屋さんの事だった
天敵に妻という字を加えとく
携帯電話へ条件反射してしまう

和歌山市　桜井千秀

あなただけよと打ち明けたのは三人目
死にものぐるい他人に言わぬことにする
原因は明瞭自分可愛さで
逃げおおせたら蒔こうと思う花の種
大見得を切っても所詮斬られ役

和歌山市　青枝鉄治

世の裏を少し見てきた子のバイト
嘘言えぬ身には政治家ムリらしい
関空へ来てもやっぱりうどん食べ
貧乏神だけは律義に従いてくる
不況の世雑兵ならば生き抜ける

和歌山市　山田高夫

フィナーレ飾る富豪の喪の花輪
指切りの小指にバンドエイド貼る
花言葉知らぬ花屋で花を買う
栄転の席へ左遷が来て座り
勝敗の鍵握ってるのは女神

和歌山市　宮口克子

アクションを起こす興味のあるうちに
手を横にとんでもないという笑顔
男にはそれが我慢の出来んこと
注目の的で自由を奪われる
生き方も軽くギャルにはギャルの道

和歌山市　細川稚代

呱々の声九月の空が澄んでいる
手も口も出して自立の出来ない子
ことさらに言う事もなし二人の膳
ターゲットしぼれば影が浮いてきた
幸せの限界知らず甘えっ子

和歌山市　福井桂香

火曜日は絵本の森を彷徨うて
縄文の穴に座ってみる野心
野良犬の街でもののけ姫となる
魂をゆすると銀の星が降る
生は歓び死もまた歓喜顔上げよ

和歌山市　岩本美智子

夕茜女の駅に立ち止まる
亡母の声して目覚めれば秋に遇う
飾らない母の手紙を抱いて秋
キャンバスの窓へ秋色ぬっていく
二つの死マザーテレサとダイアナさん

和歌山市　堀畑靖子

私も姑と呼ばれるようになる
五十代終の別れが多くなる
おめでたい気性のままで五十代
人なみという幸せなカレンダー
奥さまの今日の予定はと夫

和歌山市　山口三千子

柳歴より肩書き楯に和を乱す
好きで入った道にでこぼこ多すぎる
公私混同人間性を垣間見る
メルヘンの森は心の散歩道
こぼれ種自分の居場所考える

鳥取市　西村黙光

さすが酒練れた糸も世話はない
音立ててふくらむ孫の知恵袋
呆け止めに酒や煙草も止めはせぬ
天高く加速度ついた火の車
晴天へ汗がなんだか酒臭い

鳥取市　武田帆雀

穴の貉に酒を呑ませて聴いてみる
鞘の中に涼しい風を入れ替える
想像も的中悪い奴が居る
若い女医さんへ上半身開ける
菊百鉢本日摂氏35度

鳥取市　両川洋々

許せない過去ピカドンにたどり着く
善人の地図に抜け道などはない
離農した日から農夫の爪が割れ
手の平で男転がすのにも慣れ
祈りの文字は愛のしずくを溜めて書く

鳥取市　春木圭一郎

パンの耳揚げてビールの友とする
耳だけは達者な姑が聞かぬふり
聞く耳を持つふりをする永田町
老夫婦隣の壁へ耳すます
早耳が自慢の男飛ばされる

鳥取市　杉本孝男

楢山の麓でしおり子へ渡す
冗談もうっかり言えぬほど真面目
ひっそりと咲いた野菊も見て欲しい
これ以上引き算できぬダイエット
擬餌針を見抜かれたのか振り向かぬ

鳥取市　美田旋風

ひと雨がわが家を雑草園にする
沈思黙考泥舟だけが待っている
神々の機嫌損ねた土石流
老夫婦達者で子らが寄りつかぬ
知られたくない仮面をひとつ持っている

鳥取市　倉益一瑤

燃焼時間惜しむか蟬の一気鳴き
押し花は過去の色など語らない
姑の味やっと花丸つきました
アンバランスなおしゃれわたしに主義がない
ぬるま湯に慣れたか毬が弾まない

鳥取市　岩原喬水

あの世からそろそろ迎え来る気配
これも愛叱る子が泣き親も泣く
人が猿嚙んで大変ニュース種
散々に叱られたうえ税取られ
やっと得た椅子を汚職でフイにする

鳥取市　坂田和歌子

南南西かぜの向こうにある牛舎
ランプの宿喜劇役者の隠れ宿
あおられて哀しいまでのクーデター
レモンより薄く松茸切る女房
秋深しそろそろ薄い味になる

倉吉市　野中御前

コスモスが休耕田で真っ盛り
灯を消せば女ひとりの肩が冷え
うちの子もとなりのペットも肥満症
ポケベルでいつも夫を繋いでる
人のため世のためでなく生きている

倉吉市　松本よしえ

夕顔が夜更けの月をひとり占め
マジシャンのサービスちらと種あかし
生きる気を一ぱい貯めてこぼれ種子
また列に戻れば元の場所が無い
夕陽より赤いトマトを摘みに行く

倉吉市　山本玲子

トンネルで綴る陸路の日本国
立ち枯れの松荒涼と山は泣く
漁火の下は烏賊との狂騒曲
もう一度だけのお願い絵馬にかけ
逃げ道を考えている懐手

米子市　政岡日枝子

大豚子豚急にどたどた騒ぎだす
満身創痍に神は明るい声だった
身に過ぎるものを噛みしめている独り
浮かれてはならぬ暫くしゃがんでる
恩かえす扉を叩こうぞ何時か

米子市　林荒介

明日がある暮らしの中の日記帳
自分史を書けば他人が血を流す
トラブルを見ているだけの猫だった
無雑作に積まれて山のゴミ袋
重宝なおとこで杭を持たされる

米子市　鷲見正子

折々に松茸が来る蟹が来る
お互いを映して暮らす飯茶碗
姥ざかりなのにみんなが振り向かぬ
五歳からずーっと女の子と遊ぶ
どんぐりがみんな輝く秋の天

米子市　石垣花子

同じ町に住み裏表知りすぎた
抜けて出たくにのくらしは口にせぬ
上の空で飛ぶから溝も越えられぬ
鉢植の花も見頃は振り向かせ
気の多い男ですぐに旗を振る

米子市　青戸田鶴

さるすべり夏の終りもはなやいで
一人だけ光っていたな猿芝居
水中でなにかあるらし水の面揺れ
亡き歌手が出て来て歌う夏の宴
シルバーの腕を笑っている植木

米子市　野坂なみ

網を取っても揺れつづけてる人と海（水俣湾）
亡母に似た人の隣にかけている
初恋の人がえらくて近寄れぬ
餓鬼大将と今も続けるプラトニックラブ
日めくりにお礼を言って破りましょう

米子市　茂理高代

溜息は夏の終りに吐いておく
秋風が吹くと逢いたい道祖神
背負うてる荷物の捨て場掘っている
許す心を覚えて部屋の花匂う
秋風は時効にさせぬ傷おぼえ

米子市　白根ふみ

萩ほろり露をくぐってはぎの精
芒野に亡母たおやかな影をおく
赤とんぼまでとどきたい葛のはし
女郎花邪念も微量ちょぼちょぼと
紺青の雫を抱いて藤袴

米子市　光井玲子

飽食の世でも卵は王様だ
疑わしくて呑めないな生たまご
孫たちと同じ目線にもう立てぬ
折々の風が勇気をくれている
鬼どもが手ぐすねを引く塀の外

米子市　木村富美子

お隣のプライドもまた視野に置く
露ほどの情けを友が忘れない
色々な友と色々回り道
突然に明日が見えなくなる不安
残る日を暖め合って夫婦碗

鳥取県　新家完司

樵が入ったと嶺から嶺へ木霊
何回も歩くと道になってくる
小さな神社には小さ目の願いごと
包丁をみごとに研いで遊び人
この街にもそろそろ飽きた鰯雲

鳥取県　石尾かつ乃

一泊の旅に台風まで誘い
検診の結果ショッピングが弾む
偶然の出逢い心境聞き役に
少年の夢は広がる空の旅
目が覚めて今日の予定をバラ色に

鳥取県　津村八重子

正体を見せたくなった老い心
おとなりと温い交流窓越しに
いい心抱けば味方も多くなり
おく病で決断力がまだにぶる
童心にかえるひと時港博

鳥取県　土橋はるお

道楽に穴をこつこつ掘っている
消費税五パーセントに早慣れた
一気のみ種も仕掛けもありません
他人ばかり撮ったカメラを提げている
故郷のすすきが招く急がねば

鳥取県　上田俊路

でもしかの先生だって恩がある
咲き誇る姿で花が枯れている
人の波泳ぎ夢博時間切れ
玄関にひとり芝居の下駄を置く
台風一過親子で食べるにぎり飯

鳥取県　林　露杖

新涼の風が散歩の背を摩る
孫からの電話とび込む鬼ヤンマ
姑にもなれず老斑妻の頸
組閣ニュース相撲放送中断し
殺人が茶飯事となる世の怖さ

鳥取県　鈴木公弘

ふたり居て人間ひとり居てけもの
気をつけよ頭も口もつるつるだ
時計屋の背戸を開けたら見える墓
スクラムを組む真ん中に放火する
裏口にテトラポットを積んで寝る

鳥取県　谷口次男

ほどほどにしないと地球黒焦げに
視聴率高いＴＶは見るものか
人間を冷凍すると空は澄む
札束の心変わりが恨めしい
近所にも００７がいて困る

鳥取県　土橋睦子

恵信尼さまの足跡たどるバスツアー
添い寝した絆は遠く過疎に住む
お経のように説得力のない男
峠から帰依のこころが迷いだす
寿という大学の群にいる

鳥取県　岩崎みさ江

透明な愛がもの足りないときも
どんな夢盛ろうか白い皿がある
仮面など被っておれぬ登り坂
あなたより先に逝けない薬包紙
いわし雲母を濡してくれますか

鳥取県　乾　隆風

酒が飲めるうちに香典くれまいか
葬式の写真を決めて燗をする
馬糞紙の鯛釣りに出て賞もらう
阿弥陀さんに尾行をされているようだ
世渡りへ弥陀のともしび借りようか

鳥取県　西原艶子

巻きずしとケーキ厚目の方がいい
日めくりの厚い間は夢がある
励ましをもらう形見の縫いぐるみ
愛される人になろうと爪を切る
美しい人が化粧をしていない

鳥取県　石谷美恵子

任すには少し器が頼りない
ドジ踏んだ策を肴に呑んでいる
毛穴から逃げる若さを止められぬ
おどけてもピエロのメーク悲しいね
糊で固めた堪忍袋抱いている

鳥取県　橋本多哥由

師の恩に報いるために師になった
生涯にどれだけ買うか読まぬ本
甘言に乗って浮くのも余裕なり
嫁ぐ娘が他人となって礼をいう
ビヤガーデン飲んでは食べて月をみる

鳥取県　太田幸枝

山賊の仲間入りして酌みかわす
青春のトゲを夜空の星が抜く
鉢植にすると雑草気品持つ
露の間の命楽しい方を向く
凄惨な事になれすぎ恐ろしい

松江市　舟木与根一

酷暑　残暑　日照りで晴耕惚けになる
軒下も平和慣れして鳩の糞
流れ弾のほうの傷が深すぎる
夏の忌も明け山脈のちぎれ雲
七十の汗は瑞穂の国育ち

出雲市　園山多賀子

曖昧模糊世相に妥協出来かねる
喝采を遠くに聞いた合歓の花
ささやかな襟度を保つ水引草
誤植だけ拾い愚かな人嫌い
蟬時雨されど私の黙秘権

出雲市　吉岡きみえ

生き残りミイミイ蟬が弱音吐く
灯を消すとまばたく星と通じ合う
こぼれ萩女のささやききいていた
手こぼれのバトンわたしの驕りかも
ブランコに万策つきた身を委ね

出雲市　竹治ちかし

言いあってみても空には陽は一つ
酒少し過ぎた貴方は寝てもらい
陽に祈る姿で浮かぶしじみ舟
反省をしながら同じ日の長さ
それなりの道具を持っている餅屋

出雲市　久谷まこと

人間の奢りに軋む収集車
言い訳ももう通らないそら涙
ダイエットなどと出来ない無理をする
三日坊主エサもやらないたまごっち
秋風に空蟬未練しがみつく

出雲市　石倉芙佐子

笛蕭々と稲佐の浜の神迎え
竜蛇神うち上げられて渦を巻き
空青く神代神楽の笛太鼓
のんべいの神様も居てちゃんちきつん
天も地も荒れて神様お立ち酒

出雲市　岸　桂子

いろはから写経へ着いた硯箱
想い出一ぱい優しく老いてゆくつもり
人生はドラマ演技は下手でいい
秋の月冴えて昔が通過する
意地通す男の眉に白いもの

島根県　堀江正朗

八十路過ぎ闇の深さに負けまいと
台風のもやもや消えていい秋だ
湯上りのビールほろほろ愉快だな
ぶつかった壁も不満を持っていた
わが道は夢かこだわる事はない

島根県　堀江芳子

思い出の中の嬉しいこと数え
弱音吐けば生命の軋む音がする
笑ってばかり居れず困った顔出来ず
数珠繰って安らぐ日々も歳かいな
喜寿祝い　わが身に受けて慌てさす

島根県　小砂白汀

美しく老いて死ぬ日を考えぬ
年寄りは死んでください金が無い
まだ脈があるかもピーポーピー
ダイアナさん花火のように散りぬるを
いま刈ったばかりへひょっこり彼岸花

島根県　西村早苗

約束の場所は和服がよく似合う
秋は夜長だボクの童話を聞かせよう
雨過天青虹をつかむはいまどきだ
仏の忌きゅうりの牛と茄子の馬
別れ言葉は素敵な甘い字で書こう

島根県　松本文子

しっかりと口を結んで橋渡る
幸せな話を一寸覗きこむ
孫負うたわたしを月が見ています
秋草を摘んで仏を慰める
玩具箱の中で生活しています

島根県　伊藤寿美

トドワラを遙か丹頂鶴見つけ　（北海道の旅）
さい果てのオシンコシンの滝は雨（〃）
光太郎の手の前に立ちたちつくす
子のシャツのお下がりを着たループタイ
信玄袋の背なにリュックも似合い出し

島根県　佐々木鳳笙

孫の背にホースの水を加減する
姿見へ一回転がしたくなり
俎の傷跡母も老い給う
肩車から二十一世紀が見える
梵鐘の余韻の中の法師蟬

岡山市　井上柳五郎

ど忘れの名クイズ解くよう老い二人
老けてゆく見込み違いの迷路かも
ブレーキの利き過ぎ下り坂つづき
極貧は知らずすくすく伸びた脚
神秘めく月下美人の美と香り

岡山市　花田たけ志

平凡な老後を地味な趣味で生き
年金はクーラーよりも扇風機
強がりの自信過剰が自滅する
大自然に順応すれば笑む大地
新聞とテレビが無職の話しねた

倉敷市　井上富子

素麺を茹で戦後を啜り上げ
早起きでエプロンをしたこまねずみ
計画が天気予報に曲げられる
好奇心鋭い耳を持っている
ちょっとだけ個性が強いだけのこと

岡山県　小林妻子

農林大臣のひと言今日は稲刈りだ
お祭りの稽古川向いの太鼓
台風を知ってる蜂の巣が低い
山栗の充実小さき身にあふれ
案山子にも無理ばっかりを言うて来た

岡山県　山本玉恵

天と地のはざまでひとりと言うドラマ
目を閉じて未来未来へ泳ぎけり
心の鍵しめて遠のく子供部屋
追いつめて追いつめられた背がうずく
心の迷いそっとなだめるぶらんこゆれる

岡山県　大石あすなろ

歩の意地を父の背中に教えられ
思い出を積んでわたしの塔にする
血圧にイエローカードひょいと出る
無為無策　爪ばっかりが伸びてくる
そこそこに見通しついて眠くなる

岡山県　江口有一朗

水加減稲田見回る車椅子
仏前で貰った心の処方箋
制服が好きで選んだ受験校
列島を浄めてほしい盆の風
なるようになるとどうにもならぬとき

岡山県　荻野鮫虎狼

大会の大きな声は後に居る
監査員認印は薄い方がいい
人間も真っ赤に染まり京の秋
昼寝する孫は成程俺に似る
冗談が言える主治医になり楽し

海鳴りのかなたの戦われも古稀
金婚の鉢に溢れる愛がある
幸せの遠い時間を掃き寄せる
子を裁く拳に親も裁かれる
終章は夫と眠る穴でよい

岡山県　福原悦子

この年で太公望の仲間入り
押し寄せる波に主役の顔がある
釣り船へ手を振り返す茶髪の子
もう釣りは止めるさかなが泣いたから
充分に海とはなして去り難し

広島市　森田文

お早うさんと日めくりを今日にする
父と契った指輪が亡母の指にある
朗らかな妻太陽を独り占め
静かですねああ平和だね海が凪ぐ
新米の歯医者に両眼閉じてあげ

呉市　槇田英詩

幻想の中でふるさと黄昏れる
晩年になりふるさとが光りだす
夢よもう一度都会が捨て切れぬ
新天地求めて修羅の旅つづく
健康セミナー健康な内に聴く

竹原市　森井菁居

風船の逃げた空から黄昏れる
平凡でよろし一歳上の彼
親だけが心配をして手術室
草枕雲も娘も遠くいる
通りゃんせ夫婦二人きりの橋

竹原市　岩本笑子

頭の中に父に貰った辞書がある
二度目には間違いだとも言わず切れ
生き甲斐は何だろうかな秋の蠅
浮き雲の一つと話す万歩計
まだ元気奉仕の汗を流す幸

竹原市　時広一路

自分史の昭和時代がまだ未完
自画像がトツトツ語る少年期
故郷に国を愛した父眠る
ふるさとに僕を育てた獣みち
タンポポに乗ってふるさと帰りたい

竹原市　古谷節夫

メランコリー風も木の葉も透きとおり
大根の白さ太さに恋をする
充電においで紅葉も彩づいた
大地から生気をもらう朝歩き
嵐にもコスモスの愛自然体

竹原市　石原淑子

広島県　森川抜智

バイオリン私が弾けば歯が軋み
生かじりの英語で通訳困らせる
八十五わたしに何か出来ますか
梅雨明けは雨が来ぬ間に過ぎ去った
テレビ料理見ながら晩めし食っている

宇部市　平田実男

点滴がカウントダウンのように落ち
喧嘩してた頃の絆は太かった
派閥内閣で仕事が出来ますか
六十五まだまだ助走してる僕
共白髪今日は私が杖になる

柳井市　弘津柳慶

みんな背が丸くにぎやか老人会
じいちゃんはテレビ無視してラジオ聴き
六根清浄心の垢を流し去り
男女同権女するどく斬りつける
多数決で国民不平押し切られ

下関市　石川侃流洞

黒字国台風までが攻め寄せる
郵貯民営過疎は切捨てなんですか
一任勘定妻を疑うことはない
バンザイの音頭長老の使い道
仲よきことは美しきもの茶の香り

香川県　木村あきら

薩摩路の噴煙　地球のノロシかも
長老と祭り上げられ蚊帳の外
入港の号笛母港の灯はぬくい
靴紐を結び直して米寿まで
頂点で下山の道を見失う

香川県　工藤吟笑

ドラの音に港の朝がやってくる
不況風舟は母港で欠伸する
空港で花嫁の父もう泣かず
七十年の付き合い煙草止められず
濃紅色に染めた米寿の記念帽

香川県　池内かおり

丙午これもイジメだなと思う
髭剃りも化粧に負けぬ根気だな
血税を手玉に取って裁かれる
ほどほどの酒で天下を取った顔
酒抜きの話が明日へ持越され

香川県　川崎ひかり

病床から夫が洗濯干すを見る
バラの中主張持ってるかすみ草
病床で齢とったなと我が手見る
人情も一緒に売ってる小商い
スーパーに入ると主婦の顔になる

築港の波止場に並ぶ太公望
一杯の酒が本音をしぼり出し
宝クジ一番違いでホゾを噛む
一杯の酒で身動き取れぬ人
歓びも悲しみもまた酒が友

香川県　成重放任

ワイン買う一人暮しが淋しくて
持ちなおす命へ愁眉開く妻
思いきり酔えば未練が消せますか
名物の瓦せんべい来るお盆
隔世遺伝酒も生姜も好きな孫

香川県　山地マツヱ

西日本型で蕎麦よりうどん好き
生き方は下手だが光るものを持ち
ハッピーエンドになると分ってよく泣ける
くたびれたようにハンサム老けていた
リカちゃん人形二代並べてママと子と

松山市　宮尾みのり

乗ってもいいよと亀の背中はあけてある
寄り添うていて手も足も出ぬこけし
退いた浪新手になって押し寄せる
野良犬のプライドお手々などしない
同業の店のあくびを見て戻り

今治市　矢野佳雲

転んだらさてどう起きるかが勝負
源氏読むわたしだったらどんな恋
七転びだんだん慣れてくる傷み
ハイハイと聞けば歯車合ってくる
一つの嘘カバーする二つめの嘘

今治市　野村京子

一卵性母娘に男の影がない
恋人が出来そう朝の散歩道
流される世だぞ自分を失わず
庶民には金を持たせぬ民営化
長生きを喜べる世に変えようよ

今治市　越智一水

一本の鎖へ牛の従順さ
泣き虫小僧あっと言う就任状
去年から来る行商が来なくなり
予定表はみだす秋も今さかり
「生老病死」なんと寂しい言葉だろ

西条市　片上明水

終の日をぽちぽち溜める糸瓜水
竿で打ち今年の栗の取り終い
里菜園つくつくぼうしと別れする
年追って細りましたよ主計会
緑陰の涼しお旅所郷一目

高知市　北川竹萌

高知県　赤川菊野

土佐の夏サンバのリズムに鳴子の音
出生地土佐の高知と筆太に
パスポート一期一会の酒を酌む
秋風へきびの葉ずれが故郷を恋う
昭和史の思い出みんな哀しすぎ

北九州市　梅田宣司

豊かなのか病んでいるのかゴミの山
紙オムツ無関係だと思いたい
足元を掬う笑顔と気づかない
禁酒まではせぬが自販機多過ぎる
三連水車働き過ぎといわれそう

唐津市　田口虹汀

よう来たと肩に手をやる百日紅
あじさいへ男々の向日葵よ
戦以外に離れたことのない夫婦
湿原に鷺草浄くきよく咲き
慕われて慕われて川柳塔の有る限り（智子先生偲び）

唐津市　仁部四郎

補助線を引くと弔辞がよく判る
ふるさとへ着けば無粋なハイウエー
友人の訃報に追われ医者へ行く
被害者に国が時効を押し付ける
パートですアルバイトです隙間です

唐津市　久保正剣

ジンベイは年寄り臭いと古希が言う
指笛を上品だとは思わない
善良な医者とは知らぬ流れ弾
個性美がしこめを死語にしてしまう
王室の伝統守る犠打ひとつ

唐津市　山門幸夫

敗戦忌僕は素直に泣きました
打ち直し効かぬ傘寿の錆びた釘
ああ人生悲喜交々の敬老金
処暑も過ぎ大きくなった庭の蛇
無造作に美味しいミソ汁お母さん

唐津市　山門タミ

夏冬が一度に来たと羽づくろい
歩調とれ長い人生ずれたまま
一寝入り向かいの席はニュールック
父の背を見て育ったが胡瓜茄子
地球上ＳＯＳが乱れ飛び

唐津市　浜本ちよ

ちぐはぐの奇抜な服で得意げに
ほら吹いて心の淋しさかくしてる
実り見て枯葉役目の終り知る
目を入れたダルマはやがて捨てられる
足のうら土を踏まぬとすねている

唐津市　市丸晴翠

軋轢を避けた私は溶けて行く
心の眼育たぬうちに白内障
自転車に孫振り分けて祖母元気
溜飲が下がらぬ細い喉仏
ジョギングで始まる今日にVサイン

熊本市　永田俊子

真実一路ひまわり夕日を放さない
ばらの花弁が反ってる美しい背信
少年の心病む世よ青葡萄
敗戦の償いいつまでつくつくし
広辞苑も一字も重い好奇心

熊本県　高野宵草

公園で腕回したくなる散歩
胸襟を開きかけたら酔いつぶれ
最高のしあわせ安心して眠れ
自転車も乗れるローカル電車です
一斉に時刻うつ家の几帳面

熊本県　岩切康子

鯛にゆとりの散歩急がされ
亡父母は今年白寿に米寿なり
肩書をおろした帰り眠くなる
花火見る闇の端にも遠花火
ばらの芯へへばりついてるこがね虫

十和田市　阿部進

助け合うことを忘れた現代っ子
叱られて老いの人相変り出し
憎しみが強く結んだ親子の絆
落ちアユを肴に友と酌み交わし

弘前市　肥後和香子

前衛書ゆらゆら笑っている余白
キャビアほどの称賛弱い女とは
胸つっついているのはずるい金魚
宿題のようにワインを飲む奥さん

八戸市　島田昭治

信仰もガンには勝てず死んでいく
想い出はにっこり笑ってまたあした
天国で妻に逢ったら右手挙げ
チョコくれた訳聞かぬ中に旅立った

大阪市　河井庸佑

決断が遅れたばかり大魚逃げ
大言壮語今頃になり残る悔い
団栗を拾った山へ孫を連れ
丹精に答える菊の花見事

大阪市　神夏磯典子

嫌な記事よそに紅葉　菊花展
時どきはカンフルを打つつっかい棒
よく笑う私見つけた孫と居て
毎日が祈り余生に無駄はなし

遠い日の思い出子守唄となる
また咲いたブーゲンビリア強い花
葡萄重くたわわ艶やか大家族
香り無き松茸ですが主賓です

大阪市　小糸昭子

やってきた老人の日は自分の日
秋めいて朝のコーヒー香り立つ
サルビアに青春の日の一頁
つり竿を二組揃え親子釣り

大阪市　黒崎恭子

振り塩に焼き鯛ピンと生きている
厨房に塩絶やさぬと家訓です
賞味期限無い手職なの夢ばかり
鬼の留守あれこれプランでも独り

大阪市　松尾柳右子

趣味続けボケの防止に勤めてる
鑑定書なくても結婚続いてる
心から世界平和を祈るだけ
命拾った事故の教訓身に沁みる

大阪市　寺井東雲

煩悩を呼びさまさせて居る座禅
五時からは仕事の鬼も好々爺
お互いにやまいですなとコレクション
くつろいで居ても今夜は何食べよ

大阪市　藤田頂留子

業績を自慢せぬ社長する専務
ひと夜ねて子のわがままをゆるす気に
老齢化すすみ福祉の頭うち
杖つく身むかでの足がうらやまし

大阪市　中田あい子

太平の世に逆らった事件増え
愛情のダシが効いてる母の味
いつぞやの固い契りは風化した
世論無視　大臣の席順送り

大阪市　川内叭笑

癌だったとは知らず知らせず妹逝く
同室の人皆退院月見草
初秋の風さやかに背を押し退院す
孫と手をつなぎ遊園地のかき氷

堺市　黒田真砂

頼られて可愛い妻になりそびれ
元宿場行き交う人も見当らず
奥様が安達瞳子に似て見とれ
赤トンボ閉会式へ参加する

堺市　吉本菁風

秋風に旅の穴場を探そうか
ひと呼吸おいて立場を語り合う
こおろぎが蟬に代ってひとりの夜
悪友に誘われて行く軽い足

貝塚市　池田寿美子

寡婦さんが明るい顔で訪ねくる
風邪引きも太鼓の音に治しておく
動燃の処理保存室写す傷
保健室心の避難する生徒

岸和田市　藪野けい子

海戦を三度生き延びはや喜寿
亡き父の傘寿に挑むいま喜寿
看板に昔の誇りもつ宿場
仏にも鬼にも見える妻の顔

岸和田市　芳地狸村

きっぱりノーと言える人だから太る
老人の敵だよ転ぶ風邪をひく
踊ったらまだしなやかな古希の妻
老人もスリルの多い旅が好き

豊中市　滝北博史

父母が居る腰弁さげて職探し
嫁ぐ娘に篤と聞かせる親心
危険です言葉たくみに誘う罠
顔のきく友の助けで身を起す

豊中市　松岡久留美

イタリア語一つおぼえたパパラッチ
バラ一輪活け鎮魂の時が過ぎ
カンナ燃え夕陽を背負い訃報来る
にぎやかな中の孤独に身を沈め

池田市　栗田久子

笑えないニュースばかりで株下がる
生涯を五分の魂で乗り切りぬ
ふところが深く中々読めぬ人
良い笑顔残して逝きしダイアナ妃

池田市　岡本吉太郎

病む妻にかわり少しの米をとぐ
ピアノひいて聞かせてくれる愛しい手
ビーバーのように唐黍食べてる子
リハビリの母に添うてる妻も老い

八尾市　生嶋ますみ

プライドがつっかい棒になる背筋
オーイ雲ぼくのときめき聞こえるか
あたたかい彩はたやさぬ絵の具皿
萩の花ポロリこぼれる手をつなぐ

八尾市　大内朝子

この橋を渡りきったら振り向こう
積る話がたんとある庭の石
階段を降りたところで待っている
そして秋逢いたくなった遠い人

羽曳野市　田中透太

首つりの柱の下で寝かされる
幽霊も夏は涼みに出るらしい
ヨウカンを切るに苦心の目分量
説教は早めに切って一つほめ

羽曳野市　酒井一壺

河内長野市　井上喜酔

一日のリズム崩さず万歩計
老人会スターにされて役が付き
決めたこと曲げぬ態度へ負けておく
よく見れば観音さまにも色気ある

河内長野市　植村喜代

柳誌から消えて淋しい智子様
良いことの真似はせんけど悪い真似
熱いお茶飲んでお腹の消毒す
幸せの羽根を広げて飛んでる娘

寝屋川市　江口度

店員がついてくるので買うの止め
出かける妻三度は帰る忘れ物
洗濯機祖母に信用されてない
今食べて来たとも言えず箸をとる

寝屋川市　冨山ルイ子

葛藤に平常心は程遠い
献身的な介護に友の身を案じ
会者定離覚悟を少しずつせねば
愛別離苦涙を消してくれぬ日々

寝屋川市　太田とし子

送り火の母のダンゴは甘くする
ひとり酒さんま一匹もて余す
淋しさは息子が老いたなと思う
人形が笑った顔で泣いている

枚方市　二宮山久

子も孫も集まる里は過疎でなし
里帰り父母も達者な笑の膳
名水百選我がふる里の空の青
くいのない我が人生に妻がいる

茨木市　島元ふみ

ジェット機のトイレに慣れた二度の旅
チャンネルの何処回しても美女ばかり
奥手を笑う父と安心する母と
負け惜しみ男の自負と思いやり

交野市　福崎しげお

モノレール回り道する好奇心
見る角度変えて思案のピカソの絵
健康の余裕で望む尊厳死
クラス会無料相談医者がもて

東大阪市　安永暁子

偲ぶ師はカサブランカをおもわせる
年の数只に採らぬと言うものの
カレンダーなんと速歩で秋気配
エネルギー伝わってくる鬼太鼓

摂津市　井上源一

禁酒した親父にチョコは似合わない
老人の海に竜宮城がある
太り過ぎてませんですかとポチのこと
若年非行までも政治のせいにする

ながれ雲恩師の孫と紅葉狩り
秋冷にのこりの老いを引き締める
雑学の泉に雑誌読んでいる
こつこつと足音せまる新世紀

大阪府　籾山隆盛

冬瓜のあんかけ熱し夏料理
捕虫網一本の夏子に終る
片陰を選び盲導犬と人
風鈴の音色己に余白あり

奈良県　長谷川春蘭

電子音に振り回される朝が来る
秋茄子より灰汁の強いのはわたし
何色が本音ないろ唐辛子
喫茶店でひとり時間を持て余す

和歌山市　玉置当代

村中が満開になる秋まつり
おしゃべりの好きな椙に来る小鳥
瀬戸物市　目利きのできる顔をする
無人駅風も乾いて舞っている

和歌山市　古久保和子

足音が本社句会へにぶくなる（智子さん追悼）
先生の渾名をつけたのは僕よ
ひと回り大きい茶碗で食っている
手摑みの茶碗へ椰子の葉がゆれる

和歌山市　玉井豊太

名優は舞台裏でも名演技
風雪にも孤独にも耐え白灯台
朝市はみずみずしさと国訛り
日常のお茶と茶の湯の違いかも

和歌山市　池永正匍

八十路過ぎ胃を切る義父を皆祈る
手術後はチューブチューブで生きている
一番電車昨日の疲れも乗せている
うつろうて気づかいあって四十年

神戸市　池田善守

引き受けた荷物だんだん重くなる
横一列に並ぶとなぜかほっとする
心地よく座れる椅子をひとつ持つ
見えなくていいのによく見える眼鏡

芦屋市　黒田能子

週休二日もう半どんは死語になり
連休に子はそれぞれの旅仕度
思いやり持ち合えば来る青い鳥
思いやり代わりばんこに米を研ぐ

西宮市　刈田泰司

愚図だけどそのうちきっと辿りつく
折角の月見団子に月は出ず
毒舌を忘れた朋友が心配だ
負けて勝つそう割りきれば円満だ

宝塚市　黒台伊佐武

家中が笑い転げる孫の芸
傷だらけの月日砕いて生き延びる
芽をふかぬ種を女のポケットに
美しい花で飾った落し穴

倉敷市　小野克枝

辞書めくる磨き足りないことばかり
戻り橋悲しいことが多すぎる
サルビアの朱に八月の天地炎え
七転び八ころび軌道修正出来ぬまま

岡山県　矢内寿恵子

チボリ出来駅のイメージまで変り
わが町の図書館歩いて二三分
息吸うて止めて終りの検診車
早朝のジョギング連れる犬の魂

岡山県　二宗吟平

お隣の方へと花は向きたがり
後半は穴埋めばかりして暮らし
見栄というつっかい棒で立っている
あの世まで浮世の義理が追ってくる

鳥取市　植田一京

狙われたねずみが猫を追っかける
美しいバラにも刺の花言葉
あほらしや我が家の犬にほえられる
何もかも忘れ死ぬ事までも忘れそう

鳥取市　前田一枝

別人のようだと写真褒められる
人間を大きく見せる帽子選る
口ぐちにテレビの知恵をふり回す
颯爽と口笛吹いて祖父が来る

倉吉市　野口節子

父ちゃんと母ちゃんが居る過疎が好き
ぽかぽかと心温もる母の詩
日本晴れ洗濯物も踊り出す
疾走を続けた貨車が眠りこけ

倉吉市　米田幸子

飽食の奢るこころに杭を打つ
ひとり身の夕餉の友に冷や奴
冷蔵庫少し呼吸が楽になる
赤トンボお前も秋が大好きか

倉吉市　淡路ゆり子

万策は尽きて恐れるものがない
生きている証爪切るひげも剃る
南海で台風の目が爪を研ぐ
爪を噛み噛み晩の献立考える

倉吉市　最上和子

棘をみなおとし小径の薔薇が咲く
くにの小径　椅子がぽつんとおいてある
太陽のファイトをもらい生きている
振り向けばもう寝なさいと亡母の声

米子市　澤田千春

米子市　永井三津子

これも愛　割れた茶碗が捨てられぬ
しあわせが体をダブル幅にする
死は必然　生は偶然　ああ命
シャボン玉弱虫の愚痴抱いて飛ぶ

鳥取県　乾喜与治

何が不足で胡瓜つむじを曲げたやら
蜘蛛が巣を張ってくれてる防空壕
秋風に乗ってトンボの大空襲
策のないままに晩酒を利いている

鳥取県　西川和子

一言が胸にささってから無口
ばあさんの喩え話に芯がある
憶病で枠の一つが外せない
仕種までそっくり家の三代目

鳥取県　羽津川公乃

パン食に慣れて同居も二ヶ月余
自転車を十分漕げば病院だ
病んでまだ気配り見せる人の良さ
病人の午睡につられこっくりこ

鳥取県　田村きみ子

傘になる男へ貸した白いハンケチ
人情にとっても弱い土踏まず
毎日の笑顔を娘から貰う
プランターに百合植えました春待とう

鳥取県　黒田くに子

落ちてる財布　神の策略かも知れぬ
不自由な手にもきっちり爪は伸び
穴うめの嘘を重ねてどうしよう
子だくさん糊の利くのときかぬのと

鳥取県　幸家単車

すぐそこが何時まで続く田舎道
合言葉うっかり敵に悟られる
逞しい想像でかい夢を追う
功績も汚職帳消しされている

出雲市　小玉満江

庭先で焼肉パーティー夏は行く
どこにでも居るシルバー会の彦左衛門
秋風が少し立ちそめ港博
秋日和心分け合う人と居る

出雲市　小白金房子

スランプを抜けて大きな陽を拝む
農談義集う若さで筋通す
赤トンボ追うた細道ブルが消す
鍬ふるう汗は真珠となっておち

出雲市　板垣夢酔

出発のゼロから生れ出る記録
手に持てず数字にするは億の金
四捨地獄　五入天国生き別れ
歌えない音痴に好きな流行歌

健康へ目刺しの匂う朝の膳
寝たふりをしても気になる満員車
無駄遣いお国がやれば違う桁
死の行軍蘇る日の敗戦忌

島根県　森　茂美

ひたひたと幸せ満ちてくる海よ
一息に駈け抜け汗のさわやかさ
可愛さにストレス消えた曽孫の守り
どうしてもかなわぬ嫁は現代っ子

島根県　藤原鈴江

謀叛かも知れぬナイフが置いてある
沈黙の中で女のすすり泣き
行く当てはないが定年ひげが伸び
群集になるとみんなの顔が消え

美禰市　安平次弘道

結局は他人に仕えた連休日
リストラにされ働き蟻の声消える
PHSの向こうで息子泣いている
消せぬ負(ふ)におびえつづけて逝くのかも

高知県　小澤幸泉

担当が居ないと電話そっけない
まだ卵らしいと患者声ひそめ
凶作が来ても困らぬ米離れ
衝立ての向こうも声が太くなり

唐津市　山口高明

第 43 回
大阪川柳の会

と　き　**12月2日**（火）午後5時開場
ところ　サンケイビル本館3階322号室
（桜橋交差点西400メートル）
お　話　塚本修三氏
宿　題
「顔」　森中恵美子選
「胸」　泉　比呂史選
「父」　橘高薫風選
「人気」　礒野いさむ選
各題2句・席題なし
会　費　500円
締　切　午後6時
賞　各題秀句に産経新聞社賞

産経新聞社後援

第 2 回
泉佐野市民川柳大会

と　き　**11月9日**（日）　正午開場
ところ　泉佐野センタービル内
ウエルカムホール
（南海泉佐野駅東出口から歩3分）
お　話　片岡つとむ氏
宿　題
「惚れる」　野村太茂津選
「姿」　塩谷幸子選
「トップ」　山本翠公選
「はらはら」　中尾飛鳥選
「問う」　梶川雄次郎選
「ひとり」　西田柳宏子選
「迫る」　橘高薫風選
締　切　午後1時・各題2句・席題なし
会　費　1000円（作品集・参加賞呈）
○昼食は済ませて御出席ください。
主　催　佐野川柳会
後　援　泉佐野市・泉佐野文化協会

自選集

ひと言の助言が嬉し上司から
ひとり旅風のお喋り聞きながら
待ち呆けの駅で新聞買うただけ
生きていてよかった賞を知事の手で（知事賞貰う　2句）
平成九年九月九日よき日なり

黒川紫香

言い訳が下手で万障くりあわす
満員へ女の髪が長過ぎる
君が代へ思えば長きいのちかな
祭り太鼓聞けば駆けだすくせがある
大阪の蟬やかましく暑いだけ

遠山可住

欲張ってみてもたかだか持てるだけ
喜寿超えてまだ色気あり野心あり
自分史に減点箇所が多すぎる
行き過ぎは許さぬ姑にしつけられ
少数派火種になって叩かれる

西田柳宏子

今日も一日無事心経を念唱す
豊作型へ農家バランスがくずれ
豊作へともかく感謝秋祭り
生かされて気力さわやか朝の庭
卒寿への欲ほとけ様苦笑い

藤井明朗

水呑んで夜明けに近い雨をきく
寝ころんで天井へ自分の本音ぶっつける
夕闇にきえてゆくとは自分に似合わない
手作りの夕食で古い友達と
お喋りがしたくて雨の電話口

正本水客

塗下駄にきびすが白い蛇の目傘
追伸になると個性のあからさま
お天気の次は暮しと齢になる
表面張力サッと上戸の口がゆく
よしと辞書畳んでまてともう一度

月原宵明

プランターのこんな処でこおろぎが
眼も耳も足までやっぱり傘寿です
播り粉木がまだあるうちの台所
カレンダー通院だけの〇印
未だ生きてますのと現況届出す

松川杜的

お隣の穴にときどき電話する
寝るほどの穴を掘るのは大仕事
隧道が歪になって掘り直す
抜け殻と間違えないで穴のなか
横穴をひそかに掘っている途中

八木千代

思い出と別れて船が岸を出る
暇潰しのように石鹸もてあそぶ
顕彰碑由来読ませて拝ませる
網を干す浜で長閑な左遷の地
この土地に老いて余生に悔いがない

辻白渓子

口も手も八丁使いの役どころ
世渡りのコツを川柳から学び
矢面に立つとオッチョコチョイにされ
政治家に本音吐かすに骨がおれ
登山ではスリルをこのむ山男

奥谷弘朗

席譲ってほしい顔せぬ老いの意地
〇157以来わたしはアライグマ
忘れたを老いたるせいにする甘え
幸せはまだまだ邪魔にされてない
老いの疲れへ風邪が追い打ちかけてくる

金井文秋

妻籠宿木曽路の女という銘酒
子規芭蕉わたしも木曽に句をとどめ
中山道殿の行列には逢えず
峠茶屋信州そばのわさび効く
民宿のもてなしいなご蜂の子も

小林由多香

合掌の指から洩れる嗚咽かな
苛立ちの一人芝居がせつなすぎ
蛇口から離婚の音がほとばしる
受胎告知夕日に涙してしまう
時間下さいれんげの花に逢えるまで

波多野五楽庵

八月の雲潑剌とキャミソール
猪突猛進肩凝りが治らない
納得が出来ぬ枕を裏返す
いつからかほっとけ主義の缶ビール
幸せに老い目も耳も手も足も

恒松叮紅

白い時間は乱歩を読んでから眠る
切取り線に迷い眠りに入れない
オクターブいっぱい上げて翔び歩く
爪研いで白旗振ったことがない
ワイパーでたくさん消した古い傷

小西雄々

動燃に妻の財布がかたくなり
カラオケを柿たべながらうまいなあ
下町の勝手しったる路地を抜け
しゃんとせいせめておんなの前だけは
こおろぎよ鳴くだけ鳴いて雪の下

高杉鬼遊

株高値売るには亡父の許可がいる
お隣に見なれぬ肌着干してある
それぞれの姿で昼寝してる孫
寝てくれてテレビ座敷で相撲見る
待たされて思いますますつのる宵

野田素身郎

実にならぬ紫陽花何故に彩変わる
無意識界を歩いて影を見失う
お世辞でも悦し老耄乗せられる
鬼に金棒妻が言い訳してくれる
筆先割れて遺書滲みだす夜深く

野村太茂津

縁とや情けに出合う赤とんぼ
赤とんぼ静かな秋を我におく
平凡と言える幸せ秋刀魚焼く
娘のメモ通り留守の食事する
秋夜長こだわり捨てて便り書く

藤村〆女

とことん信じてこっちを向かせよう
衛星の目にも地球は重症だ
ローンみな妻の魔法で消えました
一日に一回歩くテリトリー
宿酔の回復力が落ちてきた

河内天笑

山海友昭さんの夫君を悼む
昼の闇青蓮院も知恩院も
捕らないでくださいと言う蛍狩り
戎橋恋も朝飯前のよう
夏に来て今秋に来て滝の白（奥入瀬渓谷）
秋なれば酒買い仏パリーまで（百済観音）

橘高薫風

路郎語録「没になった句は潔く捨てよ」

今その一句を捨てたところで、その詩想がその作家から霧の如く消えてなくなるものではない。必ず他の素材を籍って更に新しい句として生れて来るものである。

川柳太平記（234）

川柳の群像

岩本雀踊子

東野大八

川柳塔の雀踊子さんといえば、川雑時代からの古参同人たちにとっては、最も愛すべきアイドルであったらしい。

「わての川柳なんていい加減なもんや。大好物の酒をひっかけてはヒョイヒョイ十七字で片づけまんねん。あんたとちごうて、わては無学で何も知りまへん」とむかし、筆者と顔を合わせてのバカ話の中で、よくこんなことを口にした。

見るからに自称ニコニコバカのこの人らしく、いつも微笑をたやさずに、好人物の生地丸出し、「あんたはいつも好きな酒をひっかけては歩いてんのかいな」ともいったことがよくある。

明治43年4月23日の奈良県生れで、本名政雄。仕事は材木屋さんの勤め人で、立ち入ったくわしい話は何も聞いていない。万事、それでコト足りているようなお人柄で、四月生れのせいかサクラが好きで、雀踊子は酔余のさりげない柳号のようだ。サクラとスズメ、この人のあたりはみんな酒の香りがしていた。

平成5年11月20日、桜井市済生会病院で死去、享年83歳。

「戒名も句集も要らんで。死んだらしまいで、万事チョンや」の口癖どおりの天国行きだった。川柳塔社参与で、『川柳塔』八百号記念特集号に、仲良しの西尾栞・黒川紫香の両大先輩や、飲み友達の宮口笛生らの悼文で飾られる身となった。

「私の大好きな雀踊子さん。どうしてそんなに死出の旅路を急ぐのだ。『川柳塔』九月号の自選句に、あなたは、

これからが余生死んでたまるかい

という句を発表している。それを読んで、独り暮しになってもさすが雀踊子さんだと感心したばかりだったのに。

今年の二月（平成五年）に、最愛の奥さんを長い看護のあと、泪のうちにあの世へ見送られた。その時、

二女二男育てた妻の過労死だ

悲しみに耐えてるうちのマリアさま

三途の川無事に渡った夢だより

という句を奥さんに捧げられた。

あなたはお酒が大変好きだった。川柳大会で他府県へ出られる時は、きっとワンカップを沢山仕入れてきて、車中や昼弁当の時にニコニコして飲んでいた。そして私達同行の者にふるまっていられた。少しも崩れない、良いお酒だった。時々大きな声で『大和の雀や』と言うて、みんなを笑いの渦にまきこんだ。

妻逝った男に一升提げてくる

雨の日は雨の思い出あるお酒

とあなたは詠んでおられる。今度の死は、委しいことは知らないが、お酒がわざわいしたのではなかろうか。大好きなお酒と心中した

のなら致し方ないとしても、突然の訃報に言うべき言葉もない。（略）」（西尾栞悼文）

「…今年二月、最愛の奥様を病気で亡くされるまで、その看護に尽された有様は、本人は何も語られなかったが、人伝てにきいても涙の出る話でした。その奥様を

お多福の妻だが私の勲章だ

苦労ばかりそれでも妻の急ぎ足

というように慕い、偲ぶ句を発表されています。その苦しくて悲しい中にも、川柳から離れず、家庭を守りながら、柳誌、句会に投句し、佳句を発表されていました。

材木を扱われていた関係もあって、大きくて頑丈な体に似合わぬ、優しさと愛嬌があって人をそらさず憎まず、酒豪というより酒好きで、一緒に旅すると、自分の飲み代以上にパックを提げてふるまうので、雀さんと一緒だと聞くと、飲みながらの楽しい旅を思った。

私より古い柳歴で、鬼丸と号した昔から柳友も多く、なぜか日本海に面した遠いところの人が多かった。

地下足袋の似合う貫罰ない私

と自分を評価し、

このままで終らぬ男の絵双六

と決意を示されながら逝かれる無念さは想像できます。愛しい奥さんと極楽とやらで楽しい話に川柳を混じえて…」（黒川紫香悼文）

「…十一月八日の本社句会の帰途、近鉄鶴橋駅ガード下の焼とり屋で、一杯つきあって別れたのが最後でした。

翌九日午前七時に病院へ診察の順番とりに行き、一度家へ帰り入浴していて、洗い場で倒れたようで、午後四時すぎ、近所の方が訪ねてうめき声をきかれて、すぐ救急車で運ばれたらしく半分冷たくなっていられたとか。

今年二月、最愛の奥さんを亡くされて以来独り住いで『娘が来いというのだが、まだまだ元気やさかい…一人暮しは楽や』とちょっとがんこなところもありました。こんな時、誰か家の方がおられたらと、一人住いのかなしみをつくづく思い知らされました。

こうして意識不明のまま病院に運ばれ、二十日に他界されたのでした。

あの好人物で好作家の雀踊子さん…奈良県下でも数少ない川柳塔の大先輩を失い、ほんとうに残念です。拙宅で毎年開く平城の会の芋煮川柳の会にも、毎回出席されたが、酒に崩れることもなく、実に楽しく飲み食いされたものです。もう一緒に飲めないと思えば、寂しい限りです。

『最近耳が遠くなったが、これは長生きの前兆だから長生きしようね。人間死んだらしまいや』とあるお葬式の時、話しておられたのを忘れない。長い間奥さんの看病をされ、亡くされてがっかりした反面、やせ我慢だったのでしょうが、『もう妻も手がかからなくなったし、これからは川柳一筋にがんばるよ』と言うておられたのに、きっと奥さんが迎えに来られ、あの世で再会しておられることと思います。奥さん思いだった句。

どちらかが病めば夫婦という絆

やせ我慢している笑いにふと気付く

花好きな遺影に花屋で花を買う」

（宮口笛生悼文）

「酒は瓶詰めの酒がやっぱり美味い。紙函の酒は舌ざわりが悪い。最近の川柳でも理屈の多い、難解な句は川柳は伸びない。何よりも奥の深い句が一番、瓶詰の酒みたいな」

古い句評リレーでの彼の発言。

「禁酒したら句集がいくらもできる」の当方便に、「酒代を節約して句集を出すほどバカではないつもり」のハガキがきた。

▼次号は「**久家代仕男**」

古川柳歳時記 11

『顔見世』

清博美

「顔見世」というのは、顔見世狂言、顔見世芝居の略称である。江戸時代の極く初期のころからはじまった歌舞伎年中行事の一つでもあった。江戸時代の各座は、一年契約で役者などの入れ替えを行い、十一月から新体勢による一座総出演での興行を行った。これを「顔見世」というのである。

江戸時代、下女・下男などの奉公人は一年単位で雇主と契約し、その期限は毎年三月四日となっていた。この日、旧奉公人は雇主の所を辞し、替って新しい奉公人が入って来るのである。これを出替りという。中には雇主に気にいられ、二年目もその雇主の所で働く場合もあるが、これを重年と言った。

役者の場合も、この奉公人達と同様、座元と一年単位で契約を取りかわし、役者として働くのである。ただし、こちらは三月四日ではなく、十月である。一座の新しい顔ぶれは十月半ばごろまでには判明する。人気のある役者を抱えることは、その一座の収入に大きく影響するから、どの座元も人気役者を抱えようとする。そこで、役者によっては、くじ引きで決めたりもした。一般の役者の割り振りは、三座の太夫元・金主らが列席しての談合で割取りされたという。

十月十七日の夜には「寄初め」と弥して、楽屋の三階または茶屋の二階で開かれる。これに送迎される役者を見ようとして群集が押し寄せ、芝居町はにわかに賑いを見せたものであった。

また、上方からも「下り役者」が来る。これを迎える「乗込み」の式も月の終わりごろには行われる。

さて、十月下旬ともなると、十一月朔日からの顔見世興行のための支度で、関係者は大変な騒ぎとなる。その模様は『劇場新話』に詳細に記されているが、今全文を引用する暇もないので、一部を紹介することにする。

「十月廿日比、顔見世狂言番附を出す。……同廿五日頃、大名題看板を出す、但、顔見世の看板には、作りものなど花やかにする事也、追々櫓看板残らず出る、……廿日比よりは殊の外いそがしく、大道具方は舞台にかゝりて、大道具立をこしらへ、看板方は絵師へ走り、小道具方は、夜を日に継て小細工する。衣装方は染もの、誂へ、幕廻り、子役の衣装、加役の聞合せ、色々日限に間なき故、中々少しのひまもなき事共也、……程なく十月晦日になれば、芝居、其外、茶屋、役者の家々挑灯を出す、其外、表通、新道迄、茶屋〳〵の軒にかざりものあり、或は若衆より、積物、樽、蒸籠、引幕等、甚はなやかなる事筆に尽しがたし、役者の家々には、今度の狂言に着る衣装を残らず座敷へかざり、燭台をつらね、神酒、鏡餅を備へ、酒肴を設けて客人を饗応す、翌朝は芝居掛りのもの、家不残、雑煮餅を祝ふ事、元日の如し、此夜、若衆、中役者の門々に来りて、手を打也、是を

手打連中といふ、口論など防ぐため、留場のもの銘々かゝりにて、役者の門口に待請る、此手打連中、夜更けて皆々芝居切落へ込入、声色を遣ふ、木戸前には、群集の人々山の如く押合、昼七ツ時比より、木戸前にて言立の声を上げ、狂言の名題、役人替名を読立、終て声色を遣ふ、仕切場には、青簾を掛渡し、台の物の花時ならぬ春色をあらはし、楽屋は稽古、鳴もの入の大ざらひ、江戸ものが胆をつぶすも、誠に顔見世の賑ひなるべし」とあり、まだまだ詳細に続くのであるが、ここらあたりまでの文章を読むだけでも、狂気じみた雰囲気は伝わるであろう。

また、『絵本風俗往来』を開くと、「例年十一月朔日は猿若町壱丁目中村座、同二丁目市村座、同三丁目守田屋の三芝居顔見世興行なり。顔見世は年一度役者の等級及び給料の上下を定め、彼の出世相撲の番附の如く、顔見世番附の定まるより当月の興行故に総役者等級上下ありて初めての事とて見物極めて多く大当りをなす。顔見世とは総役者を畫にかきたる番附にて顔の多く現れしをよしとす。去れば市川団十郎、尾上梅幸、瀬川菊の丞の如きは顔斗でなく全体を此番附の中央に書きたり。それより技倆の劣れるに随ひて紙面の片端に僅かに顔の畫き出せる様、芝居に心ある人、気を用ゐて見る時は畫よく物をいひて面白かりし。扨此顔見世狂言随一たるは市川十八番の暫くなりとや。実は天保以後は顔見世の繁昌更に絶へて只かたのみを残したり、此暫くといふ狂言を始め其他の家のものも海老蔵没後演ずるものなし。漸く近年に及びて平生の狂言に十八番の出づるもの一ツ二ツありしのみ、然れば芝居も昔時に及ぶ繁昌は絶へたりける」ともある。さすがに狂気の沙汰の顔見世興行も天保年代から衰微の方向に向かったという。

木村錦花氏の『三角の雪』には、「後年京阪では何かの都合で、十一月の『顔見世』が十二月に成つてしまひ、又江戸でも座元に金がなくて、初日が延びたり、全然『顔見世』の出来ない年などがあつて、漸次に古格を失ひ、式例が崩れてしまひました。夫には嘉永二年十一月、四世中村歌右衛門が、市村座の不入続きに同情して、帳元沢田屋和助の困難を救ふ為に、他の両座へ俳優交代の延期を頼み、十一月にお名残興行をして、『顔見世』を来春に延ばしたと云ふ事が、破格なので、夫が『顔見世』廃める原因に成つたとも言ひます」と、衰微の原因が、より具体的に説明されている。それにしても、江戸時代の人々の芝居好きにはあきれるばかりである。

*

顔見せの咄シのおくに春があり　明八智4
—春は間もなくである。
顔見せのむすめは曽我に嫁て来る　二〇36
—顔見世で見合い、春狂言には嫁になって芝居見物。
顔見世を嫁にかづけて気の若さ　明六満1
—嫁の付添とは言っているが、姑も結構気が若い。
顔見世の御供はとれもくしつよし　明二礼2
—腰元あたりであろう。顔見世のお供を閨で決める。
顔見世に下女泣キ出シて供に行　明七義5
—こちらは泣き落とし。
顔見世にお供の下女も蔵衣裳　六一30
—下女も一張羅を着て。
顔見せの留守居は下女の役不足　一〇七13
—留守居は手持ち無沙汰。芝居の役不足に掛ける。
顔見せにみかんの的になる役者　宝七・九・25
—芝居小屋では、客が蜜柑などを投げる。
顔見世ハ仕立おろし馬に乗り　六四15
—舞台に出て来る馬も新品。
顔見せに顔を見せぬハ馬の足　四二19
—顔見世とは言っても、馬の足の役者は顔を見せることがない。

秀句鑑賞

同人吟 高杉鬼遊

―10月号から

これからの新しい川柳とは何か、そんなことを漠然と考えてみる。しかし毎日々々同じような生活の中で、そんな発想自体、奇想天外である。ある女性に「川柳はむつかしい、鬼遊さんできますか」と訊かれた。「恋をしていないのでできません」と答えた。

脳細胞は常に刺激をしないと退化してしまう。どうやら川柳との恋の季節が終局に近くなったのかも知れない。

「川柳を作る」とか「川柳を書く」とか、また「川柳を創る」と人はいろいろに言うがそれは作者それぞれの思想の表現であって、わたしの場合は「作る」と「創る」である。「書いたからよい」「創ったからよい」と言うものでない。評価は人がしてくれる。川柳を文学だと言う構え方を私は好まない。よい作品は口誦伝承され、文学にも哲学にもなる。

智を誇るものは智に破れ、策を弄するものは策に溺れる。人は人によってはぐくまれてきた。愛に生きる姿が川柳になっていたらそれでよいではないか。

ゴキブリは一体何をしたのだろ

池内かおり

理不尽な死を強いられたのはゴキブリに限らない。ムツゴロウもそうである。虫だけでない、人が人に殺められる場合もある。生物はすべてより大きな力によって支配される。長編小説「死霊」を書いた埴谷雄高は、それを知って生涯、子を成さなかった。

また明日なんて約束できぬ年

木村富美子

人それぞれによって個人差があるので年齢を明示することはできないが、長く生きていると明日に不安を感じるものである。二十一世紀がどうのと気の長いことを言っていられない。人が人に会う切実な思いには明日をも約束できない。

さだかならず老いとは不意のものならん

春城年代

老いに向かって生きるのが人生である。あっけらかんとしているのはひとつの見栄で虚しさがつきまとう。ありのままの方がよい。

終戦のあの日歩哨に立っていた

山田高夫

ここに一人の兵士がいる。八月十五日は彼にとって永遠の画像である。ほっとする反面じわじわと屈辱が湧いて来る。そして年と共に悔恨と反省が訪れる。戦争を体験した一人として正義のからくりを実感として学ぶことができた。

敗戦忌輝きすぎるひまわりよ

ムンクと叫ぶ八月十五日

岩本美智子

敗れたとはいえ解放された自由をひまわりの輝きでうまく表現している。つづく一句も破調ながら得難い。ノルウェーの画家、エドワルト・ムンクの名作「叫び」が、八月十五日の敗戦の不安を見事に喚起している。これは作者の精進にほかならない。

老人の一揆　長生きしてやるぞ

岩津　ようじ

覚悟のほどやよし、温順が美徳の時代はもはや過ぎた。邪魔にされればされるほど邪魔になってやる。暴対法で一揆は出来ない。医療費負担金増、消費税五パーセント、預金利息の低迷の中、長生きするのも大変だが、お互い健康で頑張ろう。再び戦争に巻き込まれない平和の戦士になろう。

絞ってもしぼりきっても灰汁がでる

内海幸生

叩けばほこりの出るたぐいながら、麻生路郎著『川柳とは何か』の序文を引用して参考に供したい。〝私は川柳を人間陶冶の詩であるといっている。人間へ締め木をあてて絞ると、いろんな悪汁が流れ出て、そのあとには朗らかな脱俗した人間が残るのではないかと思う。その締め木の役を川柳が果してくれているように思えてならない。句はその人の心であり、十七音字はその人の姿であり、リズムはその人の呼吸であるからである。〟

嘘でしょうでしょうと女嬉しそう

海老池洋

嘘を言ってこれほど嬉しがってもらえるなら私も大いに嘘を言ってみたい。女性の姿態と感情がこれほど再現される句も珍しい。「でしょう」のリフレインが情感を一層盛り上げる。

かしら右に目刺しが並ぶ終戦忌

永田俊子

正に目刺しであった号令一下硬直した兵士の緊張は干乾しの肉体と精神にほかならなかった。終戦を境に弛緩した精神は時に、忌まわしかった時代の緊迫感をいとおしく思う。女性にまで反映していたことを驚く。

消耗品だった生命に喜寿がくる

森茂美

大日本帝国が華やかだった時代、庶民は従順だった。昭和十七年補充兵として中支へ派遣されお国のために随分とこき使われた。先輩の古参兵は「お前達は一銭五厘で徴集できるが、馬は百円懸るのだ」と砲馬の取扱いには厳しかった。戦火を潜って三年無事に復員できた。毎年護国神社で亡き戦友の慰霊祭を執り行うが、生き残りの消耗品は喜寿前後の老兵ばかりだ。

供応の膳に豆腐が白すぎる

大橋政良

新聞紙面を賑わす贈収賄事件は後を断たない。誰もが口にするのも忌わしい事件をさりげなく「供応の膳」とはうまくいったものだ。それ以上に取り合わせの豆腐の白が効いている。悪いことをするのは社会的には立派な人たちだが、彼らに豆腐の白が見えないのか。

来るはずの催促状に見捨てられ

仁部四郎

飲み屋のつけか税務署か、この句はそんなことを言ってない。来るべきものが来ない変に落ちつかない不安から下句「見捨てられ」の疎外感へと落ち込んでゆく。前掲句の白い豆腐を白く見える正常な御仁である。

豆腐崩す殺意ではない愛である

野村京子

結句「愛である」に自信の程が窺える。殺意と怖い言葉があるが愛憎の二面性である。豆腐を崩してくれるやさしさは時に殺意に変わる凄さでもある。

古書の山妻は文化を捨てたがり

川端一歩

本を買わない決心をして久しい。文化に遠くなったわけでない。それは置き場がないだけのことで、数多くない本棚のどれもが満杯である。見たら欲しくなり買って来る。床には平積みで何が何処にあるか分らない。売ることをよしとしないので死ぬまで増えつづけるだろう。古書の山を文化とはよく言った。

片肌をすぐ脱ぐ金もないくせに

椎江清芳

お金持はこんな馬鹿をしない。金がないからやってみたくなる。遠山の金さんなら桜吹雪が見事で格好もよいが、私なら想像しただけで寒気がする。

国会の椅子で眠っているオブジェ

川上富湖

大した度胸だ。パートの店員さんでもできないことを公的助成金まで戴いた議員さんが平気でやって下さる。さすが平和国家である。

西田柳宏子選

今ノーと言わねば走る導火線
綾部市　藤田芳郎

正座した妻に魔法をかけられる
美辞麗句並べて輪抜けする準備
芸のない犬にちんちんして見せる
何でやろ育児書どおり児が泣かぬ
鳥取市　西村半畳

炎天に干した布団で仲たがい
ジーパンをはいたら暑さぶり返す
敬老へ出席いやで無視四年
一揆した血筋を胸に秘めて出る
地蔵さん車道の邪魔と引越され
三重県　佐々木森哉

さんま焼き秋に溶け込む旨い酒
ビール片手に妻が巨人を叱咤する
一升壜提げて隣家へ垣根越す
髭剃って鬼は本性ひた隠す
ひまわりを風葬にして夏終る
横浜市　豊田羊子

残り火へ防火シャッター下ろされる
エンドレス長寿の先の夢を見る
くどくなる言葉が呆けを覚らせる
信じよう信じて足も軽くなる
踏み切りの警報ほっと息をつく
益田市　岡田たけお

贅沢を言わねば明日も生きられる
一か八か乗ったレールへ運託す
上ばかり見て歩くから蹴躓く
病院で元気かと肩叩き合う
赤い糸に結ばれ影が動かない
八王子市　播本充子

第二子の積極性にうろたえる
年金にいよいよ女若返り
孫を抱く夫の顔がだらしない
不本意に弾むボールに鍛えられ
コスモスが肩の力をぬけと揺れ

秋色の服身につけて恋予感
休息日いつか時計に管理され
落葉浮くプールも夏の疲れ見せ
天高く馬も私を太りそう
議題だけ一人歩きの座談会

横浜市　岡田芳江

はみ出しを傘に入れたい母心
些細でも相手にとれば大やけど
連敗に耐えて明日の風仰ぐ
昂りをあらい流したカレンダー
柳友と通じる愛が有難い

倉吉市　山中康子

遠き日の後ろ姿に似てる人
髪染めて久しい人に逢いに行く
何事もなかったように米洗う
賑やかに他人の家が建って行く
新築中雨が滴り落ちている

大阪市　小泉久子

立ち話　時計など気にしていない
不意つかれぽろりところげ出た本音
徹くさい土蔵覗くと亡父の影
積み重ねた苦労の芸に陽が当る
長いものに巻かれ個性を失せている

尼崎市　森安夢之助

新聞で見たと祝電打ってくる
一病をもって世間がひろくなり
運強い男はうしろ振り向かぬ
開運は妻にまかせて稼ぐ汗
長い橋夫婦喧嘩もして渡る

尼崎市　的場十四郎

降りる時いつもさがしている切符
茶髪の子　黒に戻して夏終る
出来のいい子が煙たいと母の言う
目の隅で笑われている気がします
一歩下がれば笑うてすんでしまうこと

大阪市　中澤孝子

急がないやがて私の番が来る
広告の裏で生れる一行詩
虹色で極楽鳥を折っている
プライドという名の駒を持っている
寛ぎの匂い夫婦で貼り薬

富田林市　藤田泰子

風の盆浅い慕情とすれ違う
生かされて月下美人の季がめぐる
そうめんがあればと夏を痩せている
酷評に隠れた愛の鞭がある
本流を出てから狂いだした雑魚

大阪市　一本勇太

エルニーニョ夏をすっかり狂わせる
すげ笠がみんな美人に見せてくれ
二度の職　確かな腕を見込まれる
貧乏をしても本家は譲れない
賽銭に見合う柏手打ってくる

鳥取市　岸本宏章

いなないて人の言葉の判る馬
身の上を春には喋る黒い種
夫婦箸言いたいことは言わぬよう
湯気たてて本気で怒るのは味方
半分嘘のみやげ話がおもしろい

豊中市　石川勝

あす嫁ぐ裸身を月に覗かれる
退屈を知ってるように誘われる
競走馬のように改札機を抜ける
只今の声はりあげて一人住む
万馬券食べてしまった洗濯機

大阪府　澤田和重

投げつけた言葉　後悔するこころ
あたらないように茶碗を投げつける
苦しみを越え本物の夫婦です
子の寝顔尚更いとし叱った夜
どこまでも空が青くてつい遠出

東大阪市　北村賢子

泳がせておこうとことん懲りるまで
空腹でいつも心が飢えている
突っ込んで聞いて境界線を越す
ノーメークわたしはいつも自然体
ひたむきに歩いた父のちびた靴

和歌山市　森口美羽

ブランコの足は綿雲蹴りあげる
予定には災害病気ありません
口裏を上手に合わす飲み仲間
聴いてやるただそれだけを喜ばれ
追伸に本音を書いて封をする

横浜市　秋元和可

本物の青を見つけた秋の空
油臭い海が取り巻く造船所
亡くなった父へ叙勲の伝達書
帰省した孫へ握らす裸銭
小屋の灯を見付けてほっとする登山

愛媛県　安野案山子

うれしくて淋し夏休みが終わる
一心同体夫唱婦随の大欠伸
マイペース亀あせらない休まない
辛抱のピーク一気に土石流
高望みすると足元からくずれ

今治市　渡辺南奉

高槻市　傍島克治

窓際で椅子取りゲームあざ笑う
激安もしっかりもとはとっており
同姓同名まさかと友に電話する
試飲会下戸にも届く招待状
酒豪ともしらず隣に座る下戸

米子市　大野蒼流

歳月に息切れのする古時計
ははの絵とちちの絵があるいろりの火
人間に明日を待たせて陽が沈む
合鍵は一つ夫婦に距離はない
残ってる余白ブランコ揺れたまま

今治市　野村清美

一病と薬を友に旅へ出る
ストレスを鳴戸の渦へ吸い込ます
伝統の藍染め心染まりそう
旅の宿自己紹介の膳につく
観光の疲れを癒やす湯が溢れ

秋田県　湊修水

お伽噺に悲しいピリオド　ダイアナ妃
ふる里も唄と踊りの風の盆
提灯も老いも揺れてる盆おどり
過疎の宿囲むいろりに唄が湧く
逢えばまたもっと長生きしたくなり

京都市　勝山美千代

孫の笑み軽い財布を空にする
土用干し亡母の苦労の匂いする
茶髪でも心優しい普通の子
鈴なりの柿に気付かぬ現代っ子
病む膝に目ざめの機嫌聞いてみる

河内長野市　大西文次

居心地が満更でない皮下脂肪
掬われて仲間外れになる金魚
母さんのかの字も言わぬ親離れ
ゲートボールで青春してる顔の皺
パソコンに年功序列袖にされ

今治市　越智青園

若さだネ娘の肌は湯をはじく
雑草の花も未来を夢見てる
仏の花こまめに替えて夏終る
ふんぎりが付いて迷ったのがおかし
選りぬいた種に期待をかけて蒔く

兵庫県　円増純子

満月の夜は何かがおこりそう
お月さま道連れにした塾帰り
もっと声出して良い町よい村へ
ひと声がこんなに温い老いの背な
根昆布だきな粉だ長寿へ食べきれぬ

横浜市　生坂サト子

抜き足がびっくりさせる音をたて
サンダルを揃えて誘う秋祭り
平熱になり口達者よみがえる
朝刊にパンくず残し靴を履く

池田市　木村一笛

狐目で眼鏡を掛けた才女型
月射して窓の明りのワンルーム
出尽した愚痴はまだまだ出る年だ
姑をあごで使った夢を見た

高槻市　左右田泰雄

眼帯がとれて世間が広く見え
朝露のズックが弾む山の道
涼風を袂に入れた下駄の音
郭公も里に来て鳴く夏祭り

横浜市　菊地政勝

盆栽にやさしく話し慈しむ
廃田のくぼみに泪見てしまう
ほめるのがうまく母さん好かれてる
肩パッド外した妻が偉く見え

鳥取市　藤ふうこ

まだ明日があるから夢の種をまく
金婚へいい夢だけを道づれに
豆ごはんこれが母だという子たち
生きざまを全部話せる歳となり

尼崎市　小川富江

掌を合わす蟬何匹も葬る日
宝石を買うとき別の貌となり
紅少しつけて医者に逢うわたし
石頭されど情けは持っている

兵庫県　北川とみ子

少年の門出ネクタイ結べない
玄関を七人の敵覗いてる
たわいなく昔を語る里帰り
きっちりと義理返してる温かさ

吹田市　野下之男

ずぶ濡れの熱戦ソファーで横に見る
通り雨　洗濯物を探してる
一日を楽しませて軽い魚籠
美しい花惜しまれてパリに散る

和歌山市　吉村さち子

かもめーる期間ぎりぎり書く便り
三文の得を朝寝で取り逃がす
しっかりと筋を通した孫の愚痴
貸す耳があるから長い立ばなし

富田林市　大橋鐘造

金がいる話になれば皆無口
絶望を希望に変えていく若さ
置き物になっても父が居る安堵
手抜きして褒められている冷奴

鳥取市　福田登美

干した傘　蝶がドラマを聞きたがる
恋の糸胸にたぐれば悔いもある
枯れ落ち葉身辺整理は出来ている
居酒屋は顔で呑んでる空財布

大阪市　榎本日出子

叱り下手後でホメたりあやしたり
脳の中どう変るのかもの忘れ
言ってから後悔します無駄口を
グルメ猫死んだ振りしてシッポふる

東大阪市　今岡貞人

少年の夢ははるかに虹を越え
汚されたまんまで街は病んでいる
腕一本で築いた城を子は継がず
あるがまま生きる楽しみ老いの知恵

枚方市　大昇隆広

祖父の木で食って孫の木今育て
毛埃に留守した時間教えられ
帰り着き茶漬けで閉じる旅日記
ファミコンも塾もない地の子の笑顔

八尾市　井尻民子

うらやまし十三億のカバの家
六根清浄ざんげの空にいわし雲
贅沢で役に立たない家の猫
場所取りのほうが忙しい運動会

和歌山市　木村親踏

そっくりな顔が乗ってる肩車
妻の手にバカバカバカと書いてある
遺伝子が煙草を吸いたがっている
助手席はマナー忘れた高いびき

今治市　塩路よしみ

リカバリー出てそれからの正念場
生きるとは涙に酒に笑いあり
明日と言う逃げ道があり面白い
すがりつく愛しか知らぬ豆のつる

大阪市　中井正秀

晩酌は神に供えた後にする
山陰へ傘も入れとく旅鞄
汗かきの妻がそうめんゆがいてる
豆狸切らした一升買うてくる

福岡県　本田忠男

俎板の鯉の目玉に脅される
西風にふくらむ稲がいとおしい
子の帰省　妻の財布は開いたまま
策を練る監督腕組みまだ解かぬ

高知市　細木子龍

絶え絶えのハリマヤ橋を軽く撫で
ザアマスと仮面で通る御堂筋
一本の釘で波紋を残す人
四万十の川面に独り船大工

初対面らしくなくなる趣味にあう
朝顔へ貴重な水を分けてやる
生き様を立派に見せて鮭上る
ふる里が呼んでくれたよ笛太鼓

鳴門市　八木芳水

定年後やっとおぼえた変化球
人生に二度目の正札つけてみる
夫の靴拭いて明日へ向けておく
頷いたばかりに貧乏くじを引き

唐津市　樋口輝夫

八つ当り蹴られた石も痛かろう
見る夢が年々地味になる余生
好き嫌いがないというのも困りもの
この冬をどう生きるかで妻と揉め

尼崎市　田辺鹿太

赴任先家族写真が笑ってる
いい仕事している顔は上に向く
まだ母に追いつけないでいる五十路
咳してる隣の席が空いている

横浜市　川島良子

あぶら蟬三十五度を滾らせる
ギヤチェンジ出来ぬあなたと登る坂
美術展読めぬ文化の秋盛り
話すでもなく青葉の中に透けている

鳥取県　塔寛子

絵の具皿まっ白にして恋を盛る
少年の一直線に及ばない
ライバルが輝いていて頑張れる
平等に育て偏差値つけられる

富田林市　中井アキ

要領も金運も無い夫の掌よ
鉄橋を渡ると染みる秋の彩
シチューことことゆっくり愛を煮溶かそう
忘れない病魔に勝った日の汗は

和歌山県　杉山精子

無理をせぬ事を信条として余生
心急くばかりで足がついて来ぬ
癖字だが情けがこもる良い便り
好奇心まだあり葉笛挑戦す

高槻市　乙倉武史

ふんぎりをつけた夫の高鼾
一生を通して亡母はおじぎ草
風車ほど良い風に妥協する
緊張がゆるみ方言丸出しに

島根県　武島ちよえ

星流れ二人より添う山の宿
未来都市　里の香りが消えてゆく
待つ人もないがふる里なつかしく
人生譜明るい音符を書き入れる

尼崎市　内田美也子

横浜市　伊藤ふみ

ナイヤガラのしぶきいただくフルムーン
ナイヤガラの下流を飾る鯉のぼり
フルムーン氷河の上は手をつなぐ
氷河踏み地球の音を確かめる

和歌山県　中後清史

陽の当たる方へ傾く人の性
目をかけてやるとは旨い誘い水
風雪に耐えて陽の目を見た遺跡
そつのない笑顔が武器の小商い

泉佐野市　稲葉洋

子の不出来　訳は世間のせいであり
老いの派手いいではないかご褒美だ
叔母の背に亡母を映して秋彼岸
お陰さん今日も一幕劇終る

北九州市　岡田幸生

気むずかしくなったと妻の愚痴を聞く
義理という祝儀袋が顔揃え
子を庇う翼はいまも持っている
身に覚えあるから黙って引き下がる

犬山市　早川盛夫

クラス会みんな薬を持っている
使わないものが我が家に多過ぎる
ちょうど良い所で会った金返せ
ラーメンを山ほど買って独り者

松江市　川本畔

信心深くなった夫に気づく朝
胸襟をひらく九月の風と逢う
公園の鳩へやさしくなれる朝
ライバルがわたしと同じ場所を掘る

香川県　神保坊太郎

老人負担じりりと真綿効いて来る
保育器に大物になる面構え
年金が細ぼそ上げている煙
百年の家風を変える嫁が来た

堺市　上野楽生

三拍子揃い婚期が遅れてる
触角を立ててと金が攻めてくる
グループになると規則をつくりだす
下駄箱に昨日の迷い残ってる

和歌山市　山根めぐみ

色即是空だから何にも想わない
目のくぼみ実に見事な暑気あたり
生きのびてやっと気付いた丸い月
辻つまが合うまで息をひそませる

出雲市　岡あきら

借金とゴミの山なる国に住む
咳払い一つで足止めをさせられる
辛酸を舐めたつもりの半白髪
これからが青春という粗大ゴミ

決断を迫る豪雨が降りしきる
下手に嘘ついて気になる世間の目
屋根瓦葺替えてから雨ばかり
愚痴きいてもらうつもりが聞かされる

八尾市　村上剛治

虫かごの蟬の命を児と語り
秋深しぽとり熟柿の落ちる音
年金のおかげでどうやらもてます
口惜しいが予定になかった義歯の数

島根県　菅田かつ子

一枚の辞令に何時も踊らされ
化粧した男に力こぶが無い
また嘘を重ねて化粧厚くなる
太陽がゆっくり回る停年後

愛媛県　中居善信

炎天下サンマ　マツタケ　店は秋
緊急の連絡先は太く書き
正装をすると言葉も改まり
ありがとうその一言で疲れとれ

横浜市　山梨雅子

ロッキー山脈神の創造美に触れる
日付変更線　合点いかぬという時計
時差時差時差　人も時計も呆けてくる
どのペアも妻が采配振っている

高知県　桑名孝雄

深海魚住めば都の面構え
満期日にお駄賃ほどの利子もらう
夜毎する金勘定も趣味のうち
程々が好きで今まで生きてきた

横浜市　北沢街湖

直らない癖持味にして走る
アルコール切れて頭は回れ右
百までも生きる意欲の金勘定
ふっと心を覗いていった秋の風

高槻市　江原秀夫

もやもやの心が晴れる青い空
不用意な口が貴方を傷つける
下り坂でどうにか歩幅合ってきた
農作業　風が美味しいひと休み

高知県　百田幸

詩画展の梅田で夏を締めくくる
炎天に汗を知らない子のゲーム
波風を立てぬ母さん太っ腹
秋本番すずめ脅しが告げている

和歌山県　中村君枝

熱闘の球児に希望見つけたり
盆踊り気ばかり走る歳悟り
娘と孫が元気の素をもって来る
改革は老人福祉狙いうち

河内長野市　木太久正一

和歌山市　武本碧

無器用に生きてもわたしだけの自負
一日を燃やし真っ赤に陽が落ちる
親の汗知らない子らの無鉄砲
良心の呵責に揺れる月明かり

和歌山市　木村初子

輪に入りて世辞言うことも覚えたり
清掃奉仕すませ昼餉のにぎり飯
そんな顔すんなお日様笑ってる
明日の幸祈るムンクの絵が叫ぶ

兵庫県　西川一粲

土臭い男でいいさ夏帽子
土と陽の温みを胸に農に生く
もう一枚入れよかよそかのし袋
このままで逝くには未練多すぎる

横浜市　丹下智洋子

内容の無い分目立つ表紙つけ
心より身体が走る若い恋
肩書きを取った名刺を出す自信
クローン花高値の花の座を揺する

横浜市　田中笑子

一粒に心の詰まる手弁当
老人がリハビリに効く童歌
豆しぼりおでこに粋を呼んでいる
日めくりをめくりたくない夏休み

兵庫県　高見末野

生き場所が一つだけある離れ部屋
道草を少ししながら老いの道
精一杯生きて悔いなき蟬しぐれ
若死にの母の想い出彼岸花

今治市　村上久美子

煩わしい方へ方へと足が向く
松茸と句を競うてみるさんま
札束は摑んだことのない手だな
よそゆきの顔して遺影撮っておく

横浜市　鈴江純子

快復の声で見舞いの礼を言う
記念日を一つ作って娘が嫁ぎ
本心を隠す厚目の化粧して
老い二人風を入れよと孫が来る

和歌山市　水田秀男

原発を不安げにみる原爆忌
人類の汚点となろう原子力
死んでから世話になったと言う他人
しがらみが重くて飛べぬブーメラン

大阪府　奥野義夫

愚痴言うて笑い合う仲柿をむく
父の暇指一本のピアノ鳴る
愚痴を聞くスペースあけて生きている
墓石の朱生きていたいのもう少し

富田林市　山原昭水

二上山借景にして秋を呑む
うまいものいっぱい食べて文化の日
夫婦だな茶漬け食べたいまで一緒

松江市　松浦登志子

目標がだんだん遠くなって秋
納得はしたけど金はださんとこ
新米が手の平の上とびはねる

鳥取県　高尾京

漬物の良さとうまさが判りかけ
この水で炊事が出来る有難さ
忙しくもないのに豆腐でのどを詰め

横浜市　近藤道子

意地をはる芝居はよそう肩がこる
まさかとは思うまさかが多すぎる
郷愁を辿ればそこに月見草

高槻市　執行稲子

首垂れてこっそりポチの朝帰り
そわそわと帰省へ母の新メニュー
足の爪までカラフル茶髪負けそうだ

和歌山市　楠見章子

マザーテレサ　夕鶴のよう帰る空
改装したトイレまことに落ちつかぬ
フルネーム機械のように呼ぶ役所

唐津市　宗弘

ダイアナとテレサこころは置いて逝き
医療費が上がりサロンは空いている
漬物の味で良妻賢母なり

兵庫県　徳平毬子

診断書肌身につけてヨーロッパ
暫くは日本人忘れたヨーロッパ
アルバムが一年の老い語りかけ

大阪市　平井露芳

病気増え石切さんにまた頼り
バラ一輪落ちて世界が涙する
ささやかにあいりん地区にある祈り

兵庫県　大谷幸次郎

逃げ水を追うているよう我が暮し
様ざまな齢の中で夜が更ける
自慢するほどの家系も蔵もない

大阪狭山市　伊藤尚子

折り紙で器用無器用試される
老いてなお求人欄に目を通し
公平に切れず喧嘩の種つくり

吹田市　石原靖巳

やれ一句浮かんだとこへ電話ベル
以心伝心　赤提灯に足が向く
どん底へ男の器量試される

パチンコ屋出れば静寂別天地
白髪だけやけに伸びます秋の空
コスモスが首振るたびに秋深む

宝塚市　飯西ミサヲ

星も消え夢に亡夫も訪れず
捕虜でよし生きる勇気が欲しかった
カッとなる癖がトレードマークとは

尾張旭市　三浦きぬ

日曜をもたぬカラスが空をゆく
一日をたしかめ合いて老夫婦
気をつけて別れの言葉へ発車ベル

唐津市　岩崎實

野の花を摘んで花瓶が小さすぎ
たてまえと本音を盃行き来する
並ぶほどおいしいのかと回り道

和泉市　横山捷也

一日を華やいできた夏帽子
木曽路は秋　下戸も地酒を買ってみる
さすが老舗いち番うまいのは素うどん

西宮市　古谷ひろ子

冷戦の今日も黙って飯を食う
孫と電話出来て夫婦の仲直り
パチンコに勝った話を聞いてやる

新潟県　高野不二

伝言板近代詩文のように書き
ドレスアップ框で随分待たされる
若者が席をゆずって面はゆい

島根県　福間博利

病む夫に庭の一輪見せてやり
七十の耳へ終日虫が鳴く
病床の夫がいるので元気です

島根県　松本聖子

感嘆符だけで眺める富士の山
くそ真面目一方通行まっしぐら
ますかけの運を信じて古希生きる

八尾市　山本宏

底辺で悪事も出来ずそっと生き
耳よりな話へ補聴器かけなおす
笑う日も必ずあると今日を耐え

岡山市　清水金太郎

手のかかる松の木だけを自慢する
こおろぎの一声秋を引き寄せる
趣味談義二人のお茶を甘くする

兵庫県　安達厚

新盆にあなた恋しい蟬しぐれ
老いひとり妥協しなけりゃ背かれる
窓楽し夢をひろげるキャンバスよ

伊丹市　樫谷郁子

許せなかった事が許せる齢になる
愛媛県　黒田茂代

母の居ぬ里への道を忘れかけ
子から手紙どうした風の吹きまわし
西宮市　井上俊二

老いたとて負けず嫌いは人の倍
ひまわりが太陽に胸張っている
古希の坂二人で登る高くても
大阪市　三浦千津子

口下手の誠意が伸ばす棒グラフ
心から笑うと迷いから覚める
振り出しに戻り夫婦の応援歌
大阪市　杉澤汀

石碑に出撃とあり足凍る
だれの碑か一合ビンに葉鶏頭
干し鰈犬とわけ合い独り酌む
羽曳野市　西村りつえ

ワンルームでプランはでかい脛かじり
振り向けばいつも拗ねてた曼珠沙華
母に似た後ろ姿をすこし追い
豊中市　岸田知香子

五十年体重増えも減りもせず
不器用と要領悪さ同居する
草むらの虫の合唱秋を告げ

免許証写真の顔が気にいらぬ
あまちゃづる垣根の隅で覗いてる
リストラに敗れた青い柿の実か
横浜市　金森徳三

鈴虫に出合った場所が百貨店
ぎこちなく値札と動く兜虫
道問えば素知らぬ顔の都市砂漠
伊丹市　延寿庵野鶴

気付いたら夫婦の疏水詰りかけ
万歩計日陰の秋を拾いつつ
味昆布淋しい口を慰める
八尾市　神原まさと

帰省して訛りが出ずに小さく居る
病床に祭りばやしが秋をつげ
ななかまど色づく秋を歩いてみ
北海道　中里つね一

成田から飛ぶ前子らに電話する
太平洋真ん中あたりで飲むワイン
負けたはずステーキほどのハムエッグ
枚方市　寺川弘一

自署する土地代金の字がふるえ
ダイアナの死で王室の民主化
忍び寄る秋ひぐらしの声にのり
熊本県　増田一乗

素顔から心の本音透けて見え
太い根で梢は天と向き合った
岬の灯ひとりぼっちで月をよぶ

米子市　門脇晶子

別々の道も夫婦の思いやり
軽口に別れの思いなおしめり
ひとり居で傘持ち歩くくせついて

兵庫県　緒方美津子

人たえる頃が佳境の風の盆
八尾夜半胡弓三味舞哀しいまで
九十四歳スーパー行くに背広着て

横浜市　結城明玄

日焼けした農夫の額に玉の汗
追憶に頬杖ついて遠い日々
朝露に濃むらさきに光る茄子

出雲市　川島和歌子

父が掃きよせているのは乱である
知名度に傾きはせぬ花の首
ルンルンと高原にミルク色の朝

鳥取市　森明美

誤解とくはずの話にまた誤解
歯の悲鳴研磨の音にかき消され
物忘れ貸したお金は忘れない

八尾市　與田明

政争があって政治のない日本
全体の和を考える老いの知恵
ボケ封じ仕事をせよと言う息子

海南市　谷口義男

ほいほいと遊ぶ話はすぐきまる
訓導の時代はいじめなかったよ
スーパーへ日課となった運搬夫

吹田市　西岡豊

叩いても逆立ちしても何もない
下駄の音カランコロンと元気出る
仇討ちは離れ小島で水鉄砲

千葉県　大川晩翠

目配せが口より先に指図する
貧しさで学んだ知恵が今も生き
老農の鍬はいつでも光ってる

静岡市　増田扶美

夕方のブランコ母を待っている
逝く時は感謝の言葉言うつもり
若き日の思い出の夢年とらず

横浜市　明渡トヨ子

敬老のその月からの医者値上げ
有料となって薬が苦くなり
目出たさも影の差しくる敬老日

尼崎市　軸丸勝巳

飯となる無口が急に話し出す
八尾市　鷲見章

サキソフォン淋しい時は胸にしむ
老いの背を丸めて病室静かなり
河内長野市　妹背尽呂久

暗算の上手な妻に縛られる
幾星霜振り子時計が生き通す
俄か雨にも平然と露天風呂
岸和田市　亀井皎月

肩書きがとれて爽やか初夏の風
即答を迫られ心凍らせる
年金の暮らし忘れて大それた
鳥取県　藤山弘子

町おこしやる気地蔵を祭ろうか
初盆の客に疲れた嫁姑
地ビールから話が弾むいろり端
寝屋川市　角野仁清

諦めることを知らないコンパクト
三十を大人と思う子と思う
躓いた石も痛さを耐えている
鳥取県　橋谷静江

歳とって来たのか妻に耳をかす
花の色きれいに見える墓参り
趣味も気も良く合う嫁で味も合う
鳥取県　原みさを

一策が汗ばんでいるふところ手
生きてゆく家の中にも車間距離
日本海の荒れた素顔に逢いに行く
兵庫県　仲井素水

別れぎわ肝心のこと言い忘れ
鈴振って神を起して欲並べ
何時からが余生か九十に足をかけ
交野市　山川日出子

命名のダイアナ広場花の山
そっとして最後の言葉ダイアナさん
ダイアナの事故で憶えたパパラッチ
鳥取市　宮脇道子

毎日が浮草の露ころげそう
生と死の狭間に生きて紅をさす
二つ三つ若く見せたく紅をさす
鳥取県　近藤春恵

約束はせずとも花はきっと咲く
あの山に明日もきっと陽が昇る
決断はやっぱり父がしてくれる
横浜市　平達也

ひぐらしが教える生命ある限り
きつい坂喘ぎ喘ぎの老いの意地
ひんしゅくを買ってもしたい妻自慢

和歌山市　松本　良

喜怒哀楽踏み越えてきた足の裏
いつからか妻に風格見え始め
大げさな宣伝文句飲んでます

羽曳野市　山本たけし

朝六時ちょっと秋告げ鰯雲
今宵また奏でる虫に秋を聴く
野に咲いて野心も持たず秋桜

羽曳野市　芦田絢子

可能性ためす小さな水たまり
菜園の異端者まっすぐなきゅうり
生活のリズムに朝の般若経

横浜市　後藤早智

むせ返る緑に生命取り戻す
阿寒湖のアイヌのリズム胸を突く
浜辺打つ波の行方はオホーツク

羽曳野市　安芸田泰子

秋宵や気障なセリフが欲しくなる
草原に寝ころべば空一人占め
鉢植えに水たっぷりと旅仕度

東京都　清原悦子

残り物食べて一キロ増となり
外の事きいてくれるはいつも母
番犬もちょっとお昼寝しています

島根県　谷岡婦美

米が出来うれし収入減となる
秋まつりひ孫も客となる予定
誘われて趣味ありがたく喜寿の道

今治市　渡邊伊津志

本格的スタイル真行草の筆
月面の捜査に励むアメンボウ
見くびった雑魚の擬態に欺かれ

松江市　安食友子

モンスーン砂の紋様いたぶるな
名物が取り留めのないらっぱ吹く
鈴虫の食いかじるさま見る日課

尼崎市　古川正子

近江路の白鷺あそぶ休耕田
こおろぎの声きく夜は人恋し
朝日うけ柘榴輝く散歩道

鳥取市　山本崇

秋の味噛みしめ映える梨畑
老いてなお暇がつくれぬ多忙性
後ろから押すな押すなと押すラッシュ

出雲市　栂ミツエ

赤とんぼいつ生れたか飛んでるよ
天の川北斗七星笹につる
原爆でじいさん千羽の鶴を見る

尼崎市　野瀬昌子

一人身の軽さに慣れて出ていかぬ
風邪ひいて友の安否もたしかめる
盆三日普段みかけぬ人にあう

倉敷市　家守政子

弱虫が父の背越して見栄を張る
かすがいの子がいてまるくなる夫婦
和やかな朝の挨拶今日も晴れ

岸和田市　不破仁緑

薬より医師の笑顔に救われる
冷やかしの心算がたんと買わされる
正論をその他大勢冷たい眼

河内長野市　水谷笙子

舟渡御を遺影に見せる母ごころ
口出しは出来ぬが孫は太り過ぎ
長電話話が逸れて戻らない

和歌山県　村中悦男

消しゴムが私の心を整理する
何げない情け言葉に希望湧く
作業メモ去年のとおり種を播く

枚方市　二宮紫鳳

初盆の母の残り香着るユカタ
ふるさとで充電をして走り出す
夏の恋まるで花火のように散り

姫路市　服部一典

ただ長生きだけに秘訣を訊ねられ
本棚へいつか読もうと並べ置く
共稼ぎ稼ぎの多寡が家事を決め

鳥取市　福永ひかり

悪口を言ってしまった自己嫌悪
訃報聞くその日の蠅が殺せない
若いというだけで優位に立っている

札幌市　三浦強一

アルバムにある父はモボ母はモガ
喜寿傘寿米寿卒寿と欲が出る
家風など気にせぬ嫁で女子大出

京都市　高島啓子

お手も出来お座りもして野良にされ
針仕事良くした母の着物解く
肩パッド入れて今日から自立する

横浜市　保田絹子

留守電にお門違いの甘い声
雨宿りする軒が無い新開地
否定した亡母の足跡意識する

大阪市　亀井円女

今日もまた行司の要らぬ小競合い
いい笑顔きっとあなたは善人だ
子らはいつ親を越えたか広い背な

島根県　槻谷仲子

夕顔をほめて集いの友が出来
孫達が来ると長生きしたくなる
プライバシー満面得意にしゃべってる

大阪市　尾崎黄紅

包丁で男の嘘を切り刻む
幸せという嘘を故郷に置いてくる
治外法権妻も年金貰ろたはる

羽曳野市　三好専平

ぶっちゃけた話に嘘も混じってる
生きるなら笑顔が良いに決まってる
がんばれと言うなストレスたまるだけ

松江市　浦辺静江

一杯機嫌おしゃべり好きの舌もつれ
腰痛を治す一心良く動く
亡母に似て縁起をかつぐ年になり

羽曳野市　徳山みつこ

物騒で監視カメラは息抜けず
愚痴こぼす口へわが手がふたをする
今もまだうぬぼれ鏡拭いている

八尾市　篠原いつふみ

辛抱もお互い様で四十年
若作りして見て来たの失楽園
追い越せずパトカーの後付いて行く

兵庫県　植村雄太郎

ガス点火今日一日が回り出す
エレベーター一人で乗ってるのがこわい
来てますと隅っこでする小さい咳

松江市　佐野木みえ

港博わくわくしながら子に戻る
心ならず失楽園を見る深夜
一日延ばしにして病院の門くぐる

高知市　桑名知華子

蟬時雨呼ばれたようで立ち止まる
膝関節入れ替え母の日々確か
同じ場所同じ音色が引き継がれ

鳥取市　山本益子

定年へゆっくり先の策を練る
アルバムにライバルの顔威張ってる
不揃いの好きな小鉢を今日も買う

松江市　山根邦代

古代展　学者のような顔で見る
魅せられた太古の世界足止まる
近く住む古墳の姿変えて秋

横浜市　荒井広和

一生の不作と言いつ助け合い
恰幅を褒めるしかない肥満体
頷いたばかりに首謀者とされる

橿原市　西本保夫

口出すと引っぱりだこの施主にされ
雨降れば休み日曜また休み

倉吉市　田中八太朗

放屁した彼に垣根が取れました
良く言えば死なずに済んだ重傷だ

大阪市　川久保睦子

落葉の私語聞き耳たてて掃き寄せる
〃か〃と言うて誰が付けるの猫の鈴

八尾市　村上ミツ子

ほんとうのことが私を傷つける
鬼の居ぬ間の洗濯がうまくなり

堺市　梶本哲平

よってたかって国潰したがる民衆
己が住む国悪しざまに言う教師

徳島県　安宅美代子

精薄のこんなうれしい力こぶ
税務署から戻って熱い茶すする

川西市　田中喜俊

若いねと言われて年を考える
老いたれど日々美しく友とあう

大阪市　立蔵信子

いつだってにが手なことは後まわし
肉じゃがはやっぱり母の味になる

静岡市　大村正雄

やさしくて本筋通す人がすき
帰りみちみんな寝ているバス旅行

静岡市　中西雅

道草が楽しい春のランドセル
影法師私の期待裏切らぬ

鳥取県　山本正光

イギリスのバラに世界は花ぐもり
酒臭い男の顔は隙だらけ

兵庫県　谷田多美子

可愛らしいばあちゃんになるむずかしさ
へそくりの貯金が旅になって零

愛媛県　宮本末子

本当の馬鹿になり切る利口者
うしろにも目鼻ありそな妻の勘

米子市　小塩智加恵

呆け自覚ないが話は進まない
約束の日まで指切り洗うまい

羽曳野市　川田晋

一滴もいけない口は親ゆずり
聞き飽きた母の愚痴聞く親孝行

米子市　猪森スミヱ

秋冷えに毛糸ころころ忙しい
夕焼けに明日のプランの鎌を研ぐ

東大阪市　松山　隆

タウンページ過去の屋号が哀しそう
尺取虫　余生ゆっくり計るらし

寝屋川市　井上すみれ

また同じ昔話をしに行こう
余生とや気にしてないは嘘になる

鳥取県　権代康女

泣き言は言うまい水の澄むを待つ
無になれば仏の声が聞こえ出す

横浜市　上野天々

リハビリ器ならべ鍼灸師はいない
ナースとの逢瀬オンオフ瞬く間

鳥取県　山内芳江

うっかりと摘んでしまった咲く花芽
お隣と肩の凝らないお付き合い

沖縄県　杉谷一栄

しゃっくりにわるいと思うけど笑う
見送って帰りはひとりエアポート

兵庫県　中野とよ子

屑かごの中で一人の私語に会う
ひる寝です蟬もひる寝をしませんか

横浜市　山下省子

へそくりを数えなおしてまた隠す
意地悪をもう止めますと夫に言い

羽曳野市　森田四三郎

シルバーシート孫もどうぞと席譲り
呆けたのかサツキが咲いたこの時季に

松江市　松本知恵子

玉の汗拭き山頂の風にあう
風鈴がチリン寂しくなって秋

鳥取市　冨山雄幸

英国のバラ心に映えるドラマ観せ
腕っ節強さ自慢も円く老い

鳥取県　国森武子

背のびしてせり合う友がほしいもの
牛やめた畜舎に今日も風入れる

和歌山市　和田美寿子

靴音の軽いリズムで夏になり
年金で孫の喜ぶ顔たのし

唐津市　林公一朗

人間の進化只今赤信号
人道の通行止が多くなり

川崎市　和泉見早子

金魚盗った猫に電話が隣から
観賞用トマトこっそり食べてみる

鳥取市　石上悦子

ドクターのメモは日本語だが読めぬ
商売気ないドクターだ薬出ぬ

羽曳野市　内田さとみ

綻びてぼろりと落ちた花の嘘
気くばりのキャッチボールで旅弾む

唐津市　井上勝視

ついて来る妻が手綱を握ってる
目や耳に汚れが溜まる長寿国

尼崎市　尾宮弘治

麻痺の身に妻と言う字の強い杖
聴くだけの友情だけどポンと肩

和歌山市　福重美子

一日の汗をほり込む洗濯機
皺伸びたような気にする旅の宿

岡山県　富坂志重

皿割れてそれから嘘を考える
たえてゆく涙枕がすってくれ

尼崎市　長谷川佳山

恋の海残した貝もうす紅か
何を鳴くかもめの描く平和な海み

泉佐野市　大工静子

祝われてこれが仕合せ敬老日
バルサンを焚いて雀蜂退治

倉吉市　大下智子

五分前ルンルンな子が泣いている
帰りぎわ妻のルンルン確かめる

大阪府　井上千代子

赤とんぼどんなもんじゃと宙がえり
うるさいと思った母が今恋し

大阪市　鈴木トヨ子

朝顔が人許すよう目覚めてる
あの頃を晴着と話す土用干し

東京都　井上つよし

今朝もまた生きて拝める日の光
落書きに親の欲目で光るもの

大阪府　団野恒

さわやかに老いたし朝の茶をすする
聞くほどに温かみある国訛り

兵庫県　井上信子

入院の彼女に渡すテレカード
露に濡れ真っ赤なトマト丸かじり

今治市　中村好恵

口実を探して手抜きばかりする
失って大事な人と今気付く

寝屋川市　瀧本八十八

雑兵の苦難を偲ぶ深き皺
丹精の菊咲く暮らしわが至福

横浜市　長島亜希子

教えずも手を抜くことは知っている
寝静まる頃に始まる子の電話

明日のため緑いっぱい植えておく
米子市　池尾保子

原っぱで遊ぶ子供がなくなった
鳥取市　近藤秋星

旅行の日雨もその日を待っていた
恋知ってから曼珠沙華好きになり
島根県　岩田三和

北側を舟底にするアイヌ知恵
老いてなお走ったらいかん下り坂
横浜市　宮村ちよ路

ハガキ絵もうまくなる頃終る夏
幸せなカメラで飛んだナイヤガラ
鳥取市　岸本孝子

長生きがいやになるほど世が荒れる
三回忌やっと夢から母が消え
八尾市　田中トシエ

みやげには物よりお金ほしい孫
敬老日長寿枕の宅配便
滋賀県　中宗明

共白髪誓った妻よなぜ逝った
古希迎え夫婦茶碗で祝われる
尼崎市　河津正治

努力には触れず運だと他人は言う
客待ちの顔で咲いてる胡蝶蘭
出雲市　加藤スズコ

農に生き汗にまみれた亡父の顔
一駅もおしゃべり止まぬイヤリング
日立市　加藤権悟

夕陽背に離農大地に詫びながら
連休の狭間に父の忙中閑
大阪市　箕浦瑛子

夫出張月に一度の連休です
新設の地下の乗り降り疲れます
鳥取県　吉田孔美子

あげますよ目でも骨でも好きなよに
ダイアナに流す涙は美しい

川柳塔鹿野みか月川柳大会

と　き　**11月16日**（日）午前９時開場
ところ　鹿野町営国民宿舎「山紫苑」
（ＪＲ浜村駅下車バス15分）
講　演　「川柳と笑い」　大西　泰世氏
第１部（出席者のみ）出句締切11時30分
「　楽　」　橘高薫風選
「　箱　」　金築雨学選
「　胆　」　寺尾百合子選
「　傘　」　八木千代選
「　株　」　竹治ちかし選
「　線　」　高田羅奈選
第２部（出席・欠席投句者）10月25日締切
「季　節」　森中恵美子選
「つくる」　小林由多香選
「雑詠」(1句のみ)　中原諷人選
○雑詠を除き１部２部とも各題２句
会　費　出席者2000円・投句料1000円
投句先　689-04　鳥取県気高郡鹿野町
鹿野1279　中原諷人方

渺渺抄

八木千代選

寂しさは袋に入れて談笑す　鳥取県　谷口　次男
つたえたいことがこんなにこぼれ萩　寝屋川市　森　茜
脚本はぼくがころんだ筋にする　鳥取県　鈴木　公弘
雨戸開け虹のひとつを掴みけり　和歌山市　野々　圭子
走馬灯に哀しみひとつ残されて　同　川上　富湖
水平線の縫い目で水が洩れている　和歌山市　牧渕富喜子
むず痒い顔から秋となる気配　西宮市　林　荒介
行間を走って偶像とり落とす　米子市　一戸　ツネ
人間が透けて見えます秋彼岸　弘前市　池　森子
一人暮らしの首に吊り革温かし　富田林市　古久保和子
足の指依怙地な癖が治せない　和歌山市　松本　文子
シルエットだけは意の儘にならぬ　島根県　福井　桂香
踏まれたら悲鳴を上げよ新聞紙　和歌山市　政岡日枝子
恩人と同じ帽子は被らない　米子市　栗谷　春子
ああうれし　今のはたしか秋風だ　吹田市　小林　妻子
ご破算は出来ぬ身近な罪のあと　岡山県　高田美代子
流されているのであれば流れとく　藤井寺市　小野　克枝
仮面にもきれいな皺をつけておく　倉敷市　西口いわゑ
他人ごとなら笑ってすます事件なり　西宮市　川上　大輪
千手観音とはジャンケンはしない　和歌山市

次男から鍬の楔を抜いてやる　松原市　小池しげお
しんがりを歩き家族を見守ろう　米子市　青戸　田鶴
取り敢えずまん真ん中を空けておく　鳥取県　林　露杖
父の樹を継がぬ意志あり父の死後　鳥取県　土橋　睦子
北斗七星ひしゃくの絵から抜けられぬ　米子市　門脇　晶子
これ以外ない一本の線を引く　今治市　矢野　佳雲
消し壺の蓋にいるのは亡母だろう　羽曳野市　吉川　寿美
デッサンのままで木の実は熟れていく　川崎市　和泉見早子
竹とんぼこのごろ羽が軽そうに　弘前市　斉藤　劦
降りてきた梯子　最後を踏み外す　八尾市　村上　剛治
何をしてあげよう今日も暮れてゆく　米子市　木村富美子
薄暗い恩人の家遠く見る　鳥取県　新家　完司
コンと狐　啼きそうな指の影といる　米子市　林　瑞枝
いつからかウエスト行方不明です　八尾市　村上ミツ子
障子の穴が大きくなってゆく隣　鳥取県　土橋　螢
芥川の河童のさわり憶えてる　唐津市　仁部　四郎
稲光　がんじがらめの糸を切る　西宮市　奥田みつ子
私を叱る稲妻かも知れぬ　吹田市　山本希久子
生かされてまだその上に何の欲　豊中市　田中　正坊
掘りつづけ此の頃水の匂いする　米子市　中井　ゆき
携帯で軽い契りを繰りかえす　松原市　玉置　重人
聞くことも言うこともある屋根の下　米子市　白根　ふみ
大らかな心で球を投げ返す　和歌山市　山田　高夫
繁らせて紡ぎ大きな傘になる　鳥取県　岩崎みさ江
何もかも知り過ぎた耳むず痒い　和歌山市　福本　英子
何故だろう野菊が好きでたまらない　米子市　茂理　高代

もう翔べぬ体で紐を解かれても　和歌山市　桜井　千秀
遠花火少し気後れしたらしい　出雲市　園山多賀子
気がつけばまだまだ女たりし事　岡山県　山本　玉恵
火傷するような日記を見てしまう　砂川市　大橋　政良
霧晴れてもまだうつむいて歩いてる　堺　市　志田　千代
逝くときは野に在る花を道連れに　和歌山市　木本　朱夏
ハーモニカの優しさにふれ二度の婚　弘前市　肥後和香子
ひまわりの一途大きな顔をして　富田林市　藤田　泰子
笹舟よ目指すは西で良かったか　尼崎市　長浜　澄子
生感覚　男の握手わるくない　松江市　川本　畔
精霊となる身なりしをへらず口　箕面市　岩津ようじ
科学証明　大ばあちゃんの知恵袋　大阪市　本間満津子
阿弥陀さんに顔を合わせて飯にする　鳥取県　乾　隆風
こども等を都市へ送った介護法　米子市　鷲見　正子
鳩時計が狂い出したら台風が　尼崎市　春城武庫坊
ポストが錆びて温い便りが届かない　鳥取県　西原　艶子
悪いのはパパラッチかも読者かも　出雲市　竹治ちかし
幽霊もこわごわ出てる顔である　羽曳野市　酒井　一壺
校舎にはガリベンお化け住んでいる　鳥取市　坂田和歌子
米　醤油たしかめてから眠る癖　堺　市　河内　月子
びっくり箱開きっぱなしの世相なり　岡山県　矢内寿恵子
泣いて生まれ泣いて大人になってゆく　唐津市　井上　勝視
酔えばまた大正からの物語　今治市　月原　宵明
対立の線を引くのはどのあたり　貝塚市　池田寿美子
抜け穴の近くで蟬が死んでいる　米子市　野坂　なみ
煮つめるとやがてかなしくなるコント　今治市　村上久美子

人脈水脈いつかどこかで擦れ違う　唐津市　久保　正剣
虹を見たその瞬間をふところに　米子市　澤田　千春
秋風へ疲れた耳を誘い出す　和歌山市　岩本美智子
蟋蟀が我が家を秋にしてくれる　吹田市　西岡　豊
誰も持つ仮面誰もが隠し合う　川西市　松本ただし
眠れない九月の坂に立ちくらむ　八尾市　高橋　夕花
トランクに私をつめて旅に出る　大阪市　桝本　露児
我慢はほどほどに秋の向日葵　枚方市　森本　節子
人間を大切にしてこあきない　富田林市　中井　アキ
本当に未練ないのか道祖神　奈良県　鍛原　千里
反省はせず私って可哀相　八王子市　播本　充子
悪知恵をフイと吹き込む耳の穴　寝屋川市　岸野あやめ
敵方にもひとりふえた賑やかさ　八尾市　宮崎シマ子
舌を出すしか策は無し炎天の犬　米子市　石垣　花子
木漏れ日は森の心にふれたがる　寝屋川市　江口　度
自らに負けると祈り深くなる　鳥取市　冨山　雄幸
酷使する片方の眼に詫びながら　尼崎市　春城　年代
カスガイが抜けてますます仲がいい　横浜市　秋元　和可
ばあちゃんが褒めていたから叱れない　八尾市　高杉　千歩
師を悼む心へ芒揺れている　大阪市　神夏磯典子
オゾンホール　紫外線に抱く不安　和歌山市　山口三千子
秋の薔薇　結論いそぐように散る　弘前市　佐治千加子
水溜まりわがもの顔に水馬　香川県　成重　放任
使わない脳細胞がぐれ出した　横浜市　清水　潮華
窓際もいいよ周りがよく見える　鳥取市　春木圭一郎
ライバルがまだ居て三面鏡の前　寝屋川市　平松かすみ

きれいには生きられないよ赤とんぼ　和歌山市　山根めぐみ
瞬間を大事にせよと亡兄の声　米子市　光井　玲子
栗キントン昔と変わらない夫　和歌山市　堀畑　靖子
夕日カンカン明日の予定がわいてくる　寝屋川市　籠島　恵子
デッサンのままで終った夏帽子　羽曳野市　田中　透太
黄昏につけた足跡振り返る　倉敷市　田辺　炎六
愛あれば隙間の風も受けとめる　倉吉市　淡路ゆり子
消費地に着くころ赤くなるトマト　黒石市　相馬　一花
さて寝るとするか巨人がまた負けた　愛媛県　中居　善信
夕顔と一番星のお早うさん　枚方市　海老池　洋
或る日には我を励ます日記帳　寝屋川市　堀江　光子
この家がいいと嫁いだ娘が朝寝　横浜市　上野　天々
仏飯の二個目は亡父の分の箸　弘前市　相馬　銀波
人間をむき出しにした処分品　和歌山市　吉村さち子
花時計心変わりを見てしまう　倉吉市　野口　節子
漁業規制　舟は母港で眠りこけ　香川県　木村あきら
インパクト強い分だけ欠けるもの　和歌山市　宮口　克子
生き方がまだ物足らぬ世紀末　岡山県　福原　悦子
受け止める湾があるから沖を漕ぐ　鳥取県　西川　和子
野の仏こころの花をみな上げる　鳥取市　森　明美
黒着れば沈んでしまう女の秋　出雲市　石倉芙佐子
ダイエット頼むたのむと腰が言う　唐津市　浜本　ちよ
鉄人の妻　献立に悩んでる　堺　市　上野　楽生
低い樹を好む男に陽は差さぬ　和歌山市　青枝　鉄治
引き出しをのぞくと妻に叱られる　美浦市　安平次弘道
申し訳ないが頑固になる独居　大阪市　津守　柳伸

近道を探し転んでばかりいる　横浜市　近藤　道子
秋風が空巣狙いのように吹く　寝屋川市　太田とし子
人並みというハードルが難しい　和歌山県　中後　清史
老いの身を薬袋がなぐさめる　鳥取市　岩原　喬水
病室で軽い話をして帰る　枚方市　前　たもつ
病母に逢う先ずマニキュアを落とさねば　鳥取県　石谷美恵子
地下道で人にぶつからない特技　守口市　森川まさお
意志強く今日もタバコを吸ってはる　寝屋川市　井上すみれ
言うことをきかぬ自分に腹を立て　八尾市　吉村　一風
長崎の鳩と約束した平和　札幌市　三浦　強一
縁側という空間で息を抜き　今治市　越智　一水
鰯雲　秋の便りを走らせる　京都市　都倉　求芽
家土地は夫婦共用死ねません　横浜市　宮村ちよ路
あるがまま生きよと楽なお説教　唐津市　宗　弘
再会を約し健康論で幕　富田林市　片岡智恵子

谷口次男さんの巻頭は「談笑す」という座語の重みでした。格別の情景を言っているわけではなく、袋の扱いかたも普通ですが、たった一つの絞りきるような言葉から秋の底に届くような寂しさを共有させてしまうのです。**森茜**さんのこぼれ萩から幾度となくお詣りした秋篠寺の萩の小径が現われました。伎芸天の在す御堂へ続く径は、そのまま天平に遡れるほどに想われて、不思議に伝わるメッセージの使者です。**鈴木公弘**さんの脚本はなかなかの用心深さです。自分が過去に転んだ実感とも、道化役に徹しきるという心配りも充分窺えます。そして脚本はそうですが、本舞台ではとの自負も隠されていて、面白い展開がありそうです。

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこころ (82)

橘高薫風

一年ほど前に発足した「川柳二十日会」は路郎先生を中心に不朽洞（キング喫茶店）で催されるトークの会で次はその雰囲気である。

「コーヒ、コーヒ」と心の中でくりかえしてキングに飛び込む。灯のともるに早い五時すぎ、いま史呂（青木）さんが帰られたとの事。奥さん（葭乃先生）が百合の花束をかかえて帰られた。花を見ながら奥さんとコーヒをすする。何時の間にか灯がついていた。

まず結婚されたばかりの與三郎（平井）さんと節子さんのスイートホームを想像する。お次は夕鐘（姫田）さん、あの方は食事の時はマダムが三味線でサービスされるそうだからまだまだ見える筈がない。水車（吉田）さんは名古屋、山雨楼（福田）さんは東京で、お顔の揃わぬのが歯の抜けたさみしさだ。

緑雨（橋本）さんは非番でないのかしらと考えている中に見えたのは汀柳（増位）さん。見れば水薬を持っておられる。こう申し上げては失礼だが、これは私の好きなタイプ、体つきが私の長兄そっくりなのもなつかしい。

奈那（路郎先生の次女）ちゃんが私の前に来て、啄木の「東海の小島の磯の白砂に…」が好きだと句箋に乙女の感傷を追うている。

艸楽（西田）さんが足をいたわりながら御入来。今日は皆少しずつ工合が悪い日らしい。

少しして禿山（奥野）さんが出席、どうやら頭数も揃うて来たようだが皆ひどく真面目なのはアルコール不足のせいか。（機見女）

足を痛め少々歩行困難あるを押して出かける。汀柳、機見女（竹内）、葭乃夫人鼎座して私の噂の中へ飛び込んだと見える。早速、相撲吟の籤を引くと「少年」とある。冷コーヒを一杯よばれ、清々しい初夏の夕べ、喋りたい事を喋り、好きなフルーツを食べ、社内の話から世間話をとりとめもなく聞いていると、いつか何の憂苦もない至極平和な雰囲気に包まれた幸福感に浸れる。これが二十日会だ。そこへ笑いの国の使者のように禿山君が入ってくる。直ぐに籤を引かされている。君ナニヤ？口笛やエヘヘ、「禿山は何時も酔うてる顔を出し」今夜は至って神妙だ。そこへヤアと主幹のお戻り。一寸どこかで一献きこしめした顔付き。昼間には史呂君が来たそうである。キングの楽書帳に二十日会皆勤者と大きく幅をとっている男だ。その相棒の與三郎君がシンガリを承ってのっこり顔を出す。

今日の二十日会は、史呂、與三郎の棒組が後先を担いだ形だ。みんな句が出来たら出してや。（艸楽）

路郎選

口笛　禿山

口笛に答えありそな朧月

○口笛を吹けど口笛までふるえ　汀柳

夏の宵

○夕顔へ話しかければ露がおち　機見女

打水の宵へ硝子の皿が出る　艸楽

少年

少年の域を脱せずバット喫う　葭乃

○用事だけ伝え少年どこへ行た　艸楽

悪運

悪運が尽きた所で幕になり　史呂

○悪運と言われてもよい懐手　汀柳

◆翌六月にも光耀会（女性の会）と合同開催

鐘ちょっと撞いて帰ったハイキング　史呂

いたずらの石凡鐘は小さく鳴り　久流美

お茶の日の菓子が重たい絽の袂　葭乃

六月の単衣が寒い天主閣　禿山

女性コーナー

黄香の花

宮西弥生選

結び目の中に答があるだろう
眼が動く心が寒いせいだろう
一歩引くことも覚えた古い靴
足跡のゆがんだ所で得た知識

勝てそうもないから握手してしまう　倉敷市　小野　克枝
花束の底に鎮めている嫉妬　米子市　政岡日枝子
肩書きがずらり個性のない名刺　大阪市　三浦千津子
強そうに見せねば弱さ覗かれる　熊本市　永田　俊子
片袖を濡らした訳は話さない　横浜市　丹下智洋子
ストレスの溜まる袋へ穴を開け　和歌山市　福井　桂香
かたくなな自分をほぐす秋の本　和歌山市　福本　英子
片目つむってようやく読めた愛という字　奈良県　鍛原　千里
ほどほどの幸せ計る匙がない　今治市　塩路よしみ
不機嫌な周期だ触らないように　大阪市　神夏磯典子
糸とんぼ命は軽きものならず　吹田市　山本希久子
知恵の輪に翻弄された落とし穴　尼崎市　春城　年代
ざりがにが仁王立ちする自己主張　和歌山市　吉村さち子
太陽は納得してから沈む　和歌山市　川上　富湖
虹渡る向こうはきつい下り坂　西宮市　奥田みつ子
花も嵐も越えて確かな陽をすくう　松江市　安食　友子
　寝屋川市　森　茜
　松江市　川本　畔
　横浜市　宮村ちよ路
　岡山県　矢内寿恵子

古すだれ余生の行方みさだめる　米子市　白根　ふみ
策の無いままころがって行くボール　米子市　石垣　花子
嫁の掌のひとつの駒になって秋　富田林市　中井　アキ
短足の抜け殻だけが吊ってある　倉敷市　井上　富子
沈黙が奥の深さを思わせる　横浜市　明渡トヨ子
コーヒ飲む酸欠の重たい椅子で　富田林市　片岡智恵子
ハイド氏を胸の谷間に飼い馴らす　和歌山市　木本　朱夏
未来図へ明るい絵の具惜しむまい　岡山県　大石あすなろ
透明な涙別れの日を飾る　愛媛県　黒田　茂代
ひたむきな女演じている尻尾　和歌山市　山根めぐみ
これからが私の季節朱を纏う　富田林市　藤田　泰子
炎天に働く蟻に負けている　大阪市　稲本　凡子
幸せは私が女であったこと　池田市　栗田　久子
良妻を演ずるお面がずれて来る　羽曳野市　吉川　寿美
家族の茶碗全部並んだ晩ご飯　大阪市　本間満津子
意識する訳ではないが隅がすき　鳥取県　土橋　睦子
ほんとうの怒りは脈が知っている　鳥取県　岩崎みさ江
それからは弱い女のふりをする　鳥取県　植田　一京
かぶと虫の足が取れたとセメダイン　和歌山市　古久保和子
時たまは過去を拾いに古里へ　寝屋川市　井上すみれ
調子いい鏡で皺はうつさない　八尾市　村上ミツ子
めめしさよ今や女のものでなし　尼崎市　長浜　澄子
自分なりにつかむ範囲の青い鳥　貝塚市　池田寿美子
子ばなれをした手をどこへ置きましょう　和歌山市　堀畑　靖子
三叉路に来て矢印がもめている　羽曳野市　芦田　絢子
相性は吉です私合わせます　横浜市　清水　潮華

秋の天蟻いっぴきがゆるり這う
煩悩にまだ花が咲く生きている
命なり神の時計にゆだねてる
責められて貝になるのも難しい
お隣の塀が高くて付き合えぬ
逆立ちをすれば逆転出来そうだ
桃色のブランコ気分だクラス会
たくさんのこころをもろた今日の宴
ごめんねをいっぱい言うて生きている
妻の乱墓は実家と決めている
藍染める世界で一枚きりの物
シナリオは女に見せぬことにする
一寸先の靄が晴れたら歩き出す
防犯カメラが撮ったものなら絵にならぬ
凡人と言われた父の広い胸
感動の余韻を抱いて画廊出る
花先に葉先にちぎれ絵の魅力
いずれ散る花も自分の色で咲き
咲き終えた花にたっぷり水あげる
待つうちは花かも華やぐ女坂
よう見えるようになったと長電話
さしすせそ母の確かな目分量
何もかも聞いてもらった思いやり
原爆忌に五百羅漢の吐息聞く
爪丸く切ってそれから米を磨ぐ
駄句良い句どれも私の生んだ子だ

藤井寺市　高田美代子
八尾市　大内　朝子
西宮市　西口いわゑ
横浜市　保田　絹子
堺　市　河内　月子
和歌山市　桜井　千秀
弘前市　肥後和香子
米子市　青戸　田鶴
鳥取県　西原　艶子
米子市　鷲見　正子
寝屋川市　平松かすみ
鳥取市　坂田和歌子
横浜市　近藤　道子
米子市　林　瑞枝
岡山県　山本　玉恵
和歌山市　岩本美智子
愛媛県　宮本　末子
横浜市　秋元　和可
八尾市　高橋　夕花
和歌山市　山口三千子
八尾市　高杉　千歩
今治市　村上久美子
芦屋市　黒田　能子
大阪市　坂東　倫子
鳥取県　田村きみ子
寝屋川市　岸野あやめ

生き方を変えて見たくて回り道
十円を一枚拾う程のツキ
続けよとせまる帽子と万歩計
病む夫と笑顔を明日へつなげたい
幸せに慣れて夫婦のパンが焦げ
殊更に湧かす闘志のむかい風
三分のスピーチ拍手止まらない
先生がやさしい顔の参観日
本心を見せずに終わる昼花火

八尾市　生嶋ますみ
八王寺市　播本　充子
大阪府　大森　年子
米子市　木村富美子
岡山県　福原　悦子
大阪市　津守　柳伸
横浜市　川島　良子
鳥取市　岸本　孝子
和歌山市　玉置　当代

克枝さんの句―肉身の絆、友情の絆、他人の絆、生きてゆくには神様から与えられた約束事があります。人間は弱いもので、その絆を引き裂くのです。それが罪というのでしょう。幾つかの岐路に立ち、迷い、悩み、そして苦しむ。それを乗り越えるところに英智が解決してくれるでしょう。**日枝子さんの句**―火柱に立つ不動明王のお姿が浮び上がります。何事も恐れない信念と、大地におろした二本の肢。足の裏には、人間の躍動する血が湧くところと言います。しっかりと明日を見つめましょう。**千津子さんの句**―すべて前向きばかりが良しとは言えません。馬鹿になってみるのも健康上よいのです。長い間苦楽を共にした大切な靴。時には破れたり、ゆがんだり、分身としたいとおしさ。この世の善と悪、明と暗、靴は知っているのです。ときには、他人に大きく大きくゆずりたいものです。**俊子さんの句**―自分では気付かずにいても、ふと我にかえる時があります。あくまで自分に自信をもって生きているのですが、第三者の眼には狂いのない事だってあります。そこでまた考え直し改めてゆくのです。人という字の如くお互いに支え合って生きている事に気づかせてもらいました。こんなにうまくゆくといいですね。

味

田中みね選

飽食の猫はネズミの味知らず　久美子
おふくろの味で人気のあるめし屋　剛治
味自慢されて残せね羽目にあう　まさと
美味しくて明日に回すダイエット　登美
どんな物食べても同じ味音痴　義男
嫁の味褒めて日帰り丸くいき　雅子
目分量母の味にはかなわない　美子
酸いも甘いも知った男の人間味　高夫
半分の味は知らない一人っ子　進
ホームベース守って母の味加減　美羽
大阪に帰って美味いうどん食べ　たもつ
もう幾年松茸の味忘れそう　シマ子
味付けを誉めて度々食わされる　弘
紅りんごどこやら母の味がする　劦
味のあるスピーチだった国訛り　強一
放映の週は混みます味処　勝巳
優勝の味はやっぱりビール掛け　雅城
味覚の秋正直ですぞ血糖値　良知
百年の歴史つぎたすタレの味　重人
どっちともとれる返事で味気ない　章久
不覚にもインスタントの味を褒め　度
見場よりも味みて欲しい磯さざえ　めぐみ
フルコースフォークの数へ味も逃げ　鉄治
好物の味しか知らぬ喉仏　ミツ子
喜怒哀楽越えた二人の調味料　さち子
冷凍の味だと舌が知っている　佳雲
珍味だと言われ出す手を躊躇する　(緇)洋
三代目苦労の味は知らぬまま　甚一
かみさんの味にポチまで慣らされる　正子
ふんふんと苦労の味を知った耳　みつこ
単純な味で続いているドラマ　京子
漬物でご飯の味を締めくくる　よしえ
新米に松茸というエッセンス　螢
松茸の味をしっかり覚えとこ　典子
洗脳されて一番美味い妻の味　たず子
板前の小指で決まる味加減　愛論
祭りには帰れと母の味が呼ぶ　正雄
方言で味付けされている民話　佳
七転び世間の味を舐め尽くす　保州
賞味期限切れたが匂い嗅いでみる　良
クロワッサン少女のままでいたい味　大輪
コーヒーの味が変ってすこし秋　よしみ
人　美代子
シェフの目が素材の味を読む市場　智洋子
地
妻らしき味から遠くいて女流　日枝子
天
五十年味を聞かなくなった妻　小池しげお
軸
味な事なさるお方の重い口

かなう

岸　桂子選

ライバルにかなう力をためている　楽生
かなうなら故郷の地で眠りたい　克枝
かなうよりかなわぬ夢が多かった　奴夫
大抵のものは拝んでみた奇跡　芳郎
提灯に釣り鐘かなう筈がない　隆風
無口だが期待にかなう棒グラフ　黎之助
希望持てば必ずかなうとは持論　典子
本当の愛ならかなう自閉の子　よしみ
病床へかなわぬ嘘を吐き通す　正剣
若夫婦祈りかなった岩田帯　剛治
想い一つかなえてほしい途中下車　玉恵
先ず母の眼鏡にかなった太い指　あらた
プライドを捨ててかのうた願い事　不二
母を呼ぶ夢がかなった設計図　潮華
一＋一を二と言うから叶わない　善信
いつか叶うういつか叶うと生きている　千代
家庭ではかなわぬ振りをしておこう　保州
努力して望みのかなう日を待とう　武史
かなうなら逆立ちぐらいして見せる　重人
かなうなら会いたい征ったきりの人　達子
柳歴にかなわぬ一目措いている　多賀子
念願がかなった奇跡かも知れぬ　捷也

いつの日か姑の眼鏡にかなう味　弘
叶わないまでも背伸びをくり返す　寿恵子
夢かない若い門出の帆が上がる　とよ子
願い事かなう鳥居の数くぐる　愛諭
叶わない夢を子にかけ孫にかけ　久美子
笹竹に心をこめて夢を吊る　あき
願いごとかなって姉ちゃんルンルンだ　幸夫
かなうとは思うていない太郎冠者　美代子
茄子の花君の願いは尚かなう　正子
やっと嫁願いかなったトラクター　良
肉身の念願かなう千羽鶴　清美
叶うなら生き恥さらし打ち明ける　(糀)洋
五パーセントにかなう福祉が見えてこぬ　あずま
青雲の夢が六十路の庭に咲く　源一
校庭に一際光る掲示板　ツネ

佳

夢かない鉛筆の芯尖らせる　良知
ウインドの中にかなわぬ夢がある　ますみ
友達にかなう力がまだ出せぬ　螢
夢一つかなうと違う風に会い　ちかし
希望がかなうように身体の刺をぬく　日枝子

人

散骨を叶えて母の喪があける　さち子

地

理にかなうから反論を噛み殺す　政良

天

叶うまで丈夫な縄を綯うている　小池しげお

軸

祈りかなって千羽の鶴をとき放す

気付く

井上喜酔選

人情の深さに気付く過疎の旅　俊路
気付かない夫で服が買い易い　たず子
髪型を変えて来たのに気付かない　あずま
古傷が痛む噂に小突かれて　花匠
気付くのが遅れて婚期逃げて行く　雅城
天変地異先に気付いた自然たち　典子
気付くまで待ってやってる孫の鬼　つね一
気付くのが遅かったのか君の愛　柳弘
褒められて器用貧乏だと気付き　伊津志
ご近所はとうに気付いていた汚職　鉄治
サイン出す子に気付くのが遅かった　倫子
子供には気付かぬ母の思いやり　武史
向こう脛を打って足元に気付く　隆風
さからった母の涙に今気付く　照子
一線を退いて気付いた蒼い空　時弘
打ち解けぬ席だと気付き貝になる　良知
気付かれぬようにと明るく看護する　俊子
気付いたらひとりで旗を振っていた　保州
口車乗って気付いた悪だくみ　勝美
気付かれぬように口笛吹いている　重人
やさしさに気付いた孫の夏休み　たもつ
虫の音に気付いてからの酒の味　勇太

気付くのが少しおくれた子のいじめ　狸村
騙された方が悪いと気付いてる　豊
雑談の一言妙にひっかかり　みつこ
いい躾見合いで気付くヒザ小僧　子龍
とげのある言葉に気付き悔い残る　雅子
気が付けば女房の背中丸くなり　輝夫
ふと気付く靴下の穴むきかえる　智加恵
気付かれぬ内に結婚式を挙げ　まさと
あの時に気付けば浅い傷ですむ　富美子
気付くのが早くて済んだ線香の火　虹汀
不公平気付く鏡を睨んでる　勝視
悔しさはいじめの気付き遅かった　隆盛
いい人じゃないのと母が気付いてた　和重
手にとれば重い絆とふと気付く　美羽
気付かない癌は家族が抱いてやる　忠男

佳

いじめにも気付いて欲しい子の涙　旋風
追伸で気付いてくれる母がいる　京子
ご先祖に近くなったと気付く老い　(糀)洋
石垣の苦労に気付く天守閣　好恵
親不孝ようやく気付く一周忌　仁緑

人

人間の弱さに気付く老眼鏡　洛酔

地

大仏の足のしびれに気付かない　大輪

天

名水を汲んで気付いた山の愛　福田登美

軸

開発に気付く悲しいカラスの子

初歩教室

題―作る

吐田公一

私は初歩教室の添削原稿ができ上った時、必ず妻に読んでもらって、その批判を受けることにしている。それはつまり、自分の評や添削がひとりよがりに陥っていないかどうかということと、この文章や添削で読んでいただく相手に、果して自分のいわんとするところが伝わるだろうかという考えからである。

初心の際は特に投句の前には二、三度自分で読み返し、句の内容が相手に判るかどうかを吟味し、かつ第三者（家族など）に句を見てもらい、その意図するところが十分に理解されるかどうかをたずねる必要がある。これは川柳上達への第一歩ではないかと思う。

添削句

○愛情を込めて作れば花答え　登美

変化に乏しい。多少創作めいても何か一味入れるといいのでは

▽娘も嫁ってすることもなし花作り

○つつましい至芸の作の披露の弁　信幸

中七以降の言葉がやや堅い。

▽作品を語る言葉もつつましく

○手作りの碗が尋ねる服加減　泰雄

表現がぎこちない。特に下五

▽手作りの茶碗で冴えるお茶の味

○手作りと言う甘味ある豆を食べ　静子

○作物をいつも姉にと届けられ　静子

二作を活用してみると、中八になるが

▽妹の手作り嬉しい秋を食べ

○火の加減かえて成功つぼ作り　忠男

中七が拙い。ここに作家の苦悩を詠めば

▽火加減に心血そそぐ壺作り

○採算のあわぬ農家の米作り　政子

同じ内容だが汗を入れると人間が浮んでくる。川柳はできるだけ人間を詠むこと

▽米作り採算合わぬ汗が垂る

○大物は作り笑いも堂に入り　専平

下五が安易

▽作り笑いこれも選挙の顔と知る

○厚化粧して作り出す美女の顔　義男

単に「厚化粧して美女になる」だけでは、至極当然のことであって、説明句の見本のような句。どうして厚化粧するのかを考えてみれば

▽三面鏡稼ぐ元手の顔作る

○ブラウンの背広をつくり秋に溶け　公一朗

上五がこの句を駄目にしている。

▽新調の背広が秋に溶けてゆく

○腹いっぱい食べよと母の散らしずし　てる代

原句もあっさりしていいのだが

▽うまかった思い出亡母の散らしずし

○作り話と知りつつ今日も乗りました　円女

原句もいいが、今一つインパクトがない。

▽作り話うまい女に乗せられる

○種一つ落ちて大地は山作る　雄幸

明らかに緑の山を連想して居られるのでしょうが、大地とあるからには森の方が適切では――。着想は実にいい。

▽種一つ落ちて大地は森作る

○自然作実りの秋と玉の汗　とよ子

「自然作」「実りの秋」「玉の汗」と並べただけでは、お粗末な表現としか言いようがない。

▽手作りの汗が染み込む穂の実り

○宿題の工作親の技を見せ　雅子

美子さんの佳句をご参考に。下五に難

○土も買い肥料も買った家庭菜園　弘一

下七が気になる。この場合菜園だけで十分に意図が伝わるのでは。また買いが重複されているのも難

▽菜園へ意欲を見せる定退後

○作文が丸ごと家族暴露する　幸子
原句の趣旨はよく分かるが、「家族」「暴露」と言葉が固い。
▽作文が丸ごと家を暴き出し
○家庭内離婚料理を作ってる　楽生
家庭内離婚＝別居中で済むのでは。別居中では確かに離婚ではないが、冗長な句にするより、幅を持たせた句にすれば、句が生きるのでは
▽それぞれが料理を作る別居中
○嫁作る夕餉のぜんの賑わしや　智加恵
賑やかな内容を考えて
▽手作りが並び嬉しい祝い膳
○どうしてもプロの味には作れない　路子
まさしく説明句
▽本通り作るが違うプロの味
○作る手間よりもそうめん早くたべ　啓子
この程度の添削では申し訳ないが
▽おいしいの一言嬉し作り甲斐
○定退に作る名刺の無表情　茂代
無表情では余り意味をなさない。
▽定退で作る肩書ない名刺
○手を掛けて作った野菜すてきれず　よし子
下五にもう一工夫が欲しかった。虫とすれば娘に虫がつくが連想されると思う。
▽手間かけて作った野菜に虫がつき
○初舞台作る笑顔はひきつって　哲平
下五の表現の相違
▽初舞台作る笑顔のぎこちなさ
○手作りのカードを貰う誕生日　俊二
できれば手作りした人を
▽誕生日孫手作りのカードくれ
○ロボットの手が作り出す新兵器　サト子
下五がなおざり。原句に今やかましいリストラを組合せてみると
▽リストラをロボットの手が作り出し
○肩寄せて思い出づくりの旅プラン　つよし
原句はインパクト不足
▽定退に思い出作るフルムーン
○おでんを作り与作の帰り待っている　明美
「与作」が演歌そのもので、川柳はできる限り自分の言葉で表現して欲しい。
▽おでん煮て夫の帰り待っている
○田植歌作る仕草の娘達　崇
作るに拘わりすぎて意味が判り難い。
▽苗植える仕草もうまい田植歌
○定退へ彼は農作われは食む　ふみ
下五がまずい。一度に多くを詠まない。
▽定年を待っていたよに畑仕事
○新婚の嫁の手料理ほめ帰り　美也子
ほめて帰るは冗長
▽初めての嫁の手料理ほめてやり

佳句

抜ける歯の如く作句も数が減り　美恵子
手作りが一番うまい老いの舌　隆
手作りの雛を持たせて嫁がせる　純子
作られた笑顔にかげる孤独感　ミツオ
餅作り亡母とひととき話し合う　みやこ
人中で自と科を作ってる　省子
（佳句にこぎつけられよかった）
嘘言えず作り笑顔ではぐらかす　久子
（上達が目に見える）
一言が敵を作る破目になる　一典
（佳句が増えて来ましたね）
爺ちゃんの手作りだよと竹とんぼ　日出子
（孫とのスキンシップ）
工作が親子を結ぶ夏休み　美子
（宿題を通しての親子関係）
露地ものと老姑はみやげにさげてくる　つね一
（姑の温みが伝わってくる）
作られた数字税務署知っている　美寿子
（着眼点がよい）
ライバルを作り明日の夢を見る　睦子
（知らぬ間にライバルにされる怖さ）
一瞬のために作られ花火消ゆ　富江
（花火が持つ宿命をうまく）

私の句

財産を作る手立てを小池から

第三回 川柳塔まつり

同人総会

第三回川柳塔まつりは、好天の10月3日、大阪市天王寺区のアウィーナ大阪（なにわ会館）で開催された。

はじめに午前10時20分から平成九年度の同人総会を同人67名が出席して板尾岳人副理事長の司会で開会、西口いわお常任理事が開会の辞を述べた後、橘高薫風主幹を議長に選出して議事に入った。

まず、田中正坊常任理事が別項のとおり平成8年度の事業経過報告を行ったが、その中で前年度と比べて同人の句集刊行が少なく、また、新同人数もかなり下回ったことを指摘するとともに、前年度の総会で要望があった地方からの常任理事会への参加について、業務運営規定を改定、「相談役・参与は、必要に応じて常任理事会に出席し、意見を述べることができる」としてその道が開かれたことを説明した。次いで岩佐ダン吉会計部長が平成8年度の決算報告、榎本吐来会計監査が同監査報告を行った。

続いて質疑・討論をはさんで河内月子句会部長から平成九年度の事業計画について提案した。川柳塔碑への合祀法要、路郎忌句会、川柳塔まつり等の定例行事を行うほか、①同人名簿を新郵便番号が実施される来年2月までに刊行する②同人・誌友の年間増加目標を設定し、各地方の協力を得て対処したい③個人句集・合同句集の発刊を奨励し、必要な援助を行う④勉強会が震災以来、中止されているので復活に努力したい⑤賛同者があれば、かつての中国旅行のようなツアーを実施したい⑥平成11年は、川柳塔の前身である川柳雑誌社の創立75周年にあたるので、来年度中に準備を整え、記念事業を行いたいなどの内容であった。

この後、岩佐ダン吉会計部長から平成九年度の予算案を提案、宮崎シマ子常任理事から別項のような役員人事の提案を行った。

これらの報告・提案をめぐって西原艶子・春城武庫坊・川端一歩・阿萬萬的・榎本吐来・仁部四郎の各氏から質疑・意見発表があり、関係常任理事が答弁を行った。今回は初の試みとして会計報告を文書で行い、好評であったが、事業計画ほかの報告・提案についても文書を用意してほしい、同人推薦の基準・方法を明らかにしてほしい、川柳塔基金の会計上の取扱いを再検討すべきだ、同人費と誌代との関係を具体的に教えてほしいなどが主な内容であった。終りに全議案を満場の拍手で採択し、山本希久子常任理事が閉会の辞を述べた。

なお、鵜かご川柳社佐藤一粒氏と汐風川柳社月原宵明氏から祝電が寄せられた。

■事業経過報告

〈事　業〉

8年10月19日　第2回川柳塔まつり（同人総会・各賞表彰記念句会・懇親会）をアウィーナ大阪で開催

同　11月14日　川柳塔碑合祀法要（高野山）

9年2月27日　京都塔の会25周年・会報300号記念句会（京都府立総合社会福祉会館）

同　4月6日　大原川柳会会報400号記念大会（大原町総合センター）

同　6月28日　麻生路郎33回忌・麻生茴乃17回忌・中島生々庵13回忌・西尾栞3回忌追悼川柳大会（たかつガーデン）

同　8月2日　川柳塔みちのく10周年記念句会（さくら亭）

〈受賞・表彰〉

舟渡　杏花　平成8年度路郎賞
桑原　道夫　同　準優秀作第1席
金山　夕子　同　準優秀作第2席
倉垣　恵美　平成8年度川柳塔賞
一本　勇太　同　準優秀作第1席
早川　盛夫　同　準優秀作第2席
斉藤　劦　平成8年度渺湖賞

同人総会における報告

牧渕富喜子　平成8年度尚香の花賞
山根めぐみ　同　一路賞
新家　完司　同　各地柳壇賞
平松かすみ　同　本社句会月間賞杯永久保持
小林由多香　地域文化功労者文部大臣表彰
黒川　紫香　兵庫県高齢者特別賞知事表彰
工藤　吟笑　白鳥町長賞

〈句集刊行〉（7）

故江原とみお遺句集『居酒屋』
二宗　吟平　『満九十二歳』
藤井　明朗　『明　朗』
合同句集『集い』三幸川柳教室200回記念
同　『ほたる』ほたる川柳同好会5周年
同　『川柳塔まつえ』復刊30周年記念
故大矢一郎　『続・みかん船』

〈物故者〉（13名）

金山　夕子　平成8年11月2日
川崎　秋女　同　11月18日
久家代仕男　同　11月30日
丸山よし津　同　12月18日
太田　藍子　平成9年2月21日
中田　純次　同　2月21日
山下美津留　同　2月22日
野村　静雄　同　3月19日
大野　武太　同　5月3日
坂本仙吉郎　同　5月15日
稲葉　眞郎　同　5月28日
寺澤みど里　同　6月8日
小出　智子　同　6月22日

■新同人（38名）

藤井計光（池田市）川内叭笑（大阪市）森松まつお（羽曳野市）清水潮華（横浜市）古久保和子（和歌山市）黒崎恭子（大阪市）栗田久子（池田市）北村正安・藤原桂子・前田昭子（豊中市）太田とし子・酒井勇太朗・坂上高栄・森茜（寝屋川市）森茂美（島根県）橋本多哥由（鳥取県）福岡雅楓・田中節子・松永会美・小林周信・三品征子（大阪市）志田千代（堺市）鴨谷瑠美子（藤井寺市）中山キヨ子（西宮市）黒台伊佐武（宝塚市）山本玲子（倉吉市）増田紗弓（富山県）宮本かりん・高田星子・以倉菜々（堺市）森川抜智（広島県）森本節子（枚方市）福田満州（羽曳野市）長浜澄子（尼崎市）田辺正三郎・富永敞子・板山まみ子（豊中市）奥村しずえ（池田市）

■新役員

理事長　河内天笑
副主幹　宮口笛生
副理事長　西出楓楽
常任理事　神夏磯典子・前たもつ
参与　田中正坊・牛尾緑良・小島蘭幸・土橋螢・仁部四郎・林荒介
理事　井上直次・上田佳秋・大内朝子・川上大輪・高田美代子・西村哲夫・平松かすみ・山本義子

各賞表彰・記念句会

平成九年度各賞の表彰式は、昼食休けいの後、午後1時半から同会場で行われた。板尾岳人副理事長の司会で各地柳壇賞を皮切りに一路賞・茴香の花賞・渺湖賞に続いて川柳塔賞と同準賞、路郎賞と同準賞の受賞者10名に対し、橘高薫風主幹からそれぞれ賞状と記念品（盾）が授与され、関係句会から花束が贈呈された。また同席上、新同人が紹介され、記念品が贈られた。

つづいて本社十月句会を兼ねた記念句会が一六七名の出席で開かれ、本社2名・地方4名の選者が各題50句を選句し、午後2時半から西口いわゑさんをトップに入選作品の発表が行われた。月間賞は遠来の仁部四郎氏（唐津市）に輝いた。

（司会―隆盛）（記名―月子・弥生）

兼題「手さぐり」　西口　いわゑ　選

手さぐりでおぼえた花の一行詩　夕　花
手さぐりで探してるのは明日です　大　輪
手さぐりでパソコン叩く老いの指　ますみ
手さぐりの人生だから夢もある　颯云児
手さぐりで一瞬だった傘寿まで　幸　夫
手さぐりで女ごころはつかめるか　洞　庵
手さぐりで生き人生を摑み取り　一二三
手さぐりに探しつづける赤い糸　昭　子
手さぐりの恋で火傷をしてしまう　蕗　児
手さぐりでやっと摑んだ縄の端　武
手さぐりでも茄子艶やかに実を結ぶ　花　子
手さぐりで二十一世紀の森へ　完　司
手さぐりで鳥獣戯画の中あるく　桂　香
母を知っている手さぐりの小さな手　螢
七十年手さぐりで来てつぎこぼし　千　楮
手さぐりで毎日人間やってます　哲　夫
手さぐりでふたりが抜けた深い森　とし子
手さぐりのように揺れてるコマの芯　萬　的
どう見ても手さぐりらしい医者の顔　幸　生
手さぐりで石の丸さにあったまる　章　子
手さぐりへたまには棘もつきささる　典　子
手さぐりを見守るほかはない巣立ち　恵　子
手さぐりの趣味も小さな実をむすび　未佐子
はじめての乳房もみじの手がさぐる　艶　子
手さぐりで育児している青い母　石　舟

表彰される受賞者

手さぐりでやっと見つけた明日の地図　あすなろ
底辺に居て手さぐりで探す虹　朝　代
手さぐりの勘が鋭い左利き　吐　来
手さぐりで摑んだ藁にすがりつき　倫　子
手さぐりの闇に聴こえた鈴の音よ　半　銭
手さぐりのままですこうしだけ休む　月　子
手さぐりの夫の料理褒めながら　雅　楓
手さぐりの想いを綴る雪月花　朱　夏
手さぐりで心もろとも摑まれた　瑠美子
手さぐりのワープロ横で子が笑う　いつふみ
手さぐりで来たがここらで行止まり　正　坊
手さぐりで見えぬ心の窓を拭く　炎　六
手さぐりで第六感を研いでます　満　州
手さぐりで見えないものが見えてくる　久　子
手さぐりの乳房誤診のまま元気　さち子
人生模索甘い誘いもかけてみる　千　秀
手さぐりですけど勇気はほんまもん　天　笑
手さぐりは震災の朝思い出す　蕉　子
手さぐりで判る貴方の顔形　みね
佳
毎日が手さぐり命光らせる　みつ子
手さぐりで鍵を摑んでホッとする　東　雲
手さぐりにスローカーブを先ず投げる　周　信
人
手さぐりの明日へ月よ丸うなれ　希久子
地
手さぐりの壺から鬼をつまみ出す　潮　華
天
生と書き死と書く手さぐりのいのち　雅　文

軸

手さぐりで二人三脚して生きる　いわゑ

兼題「ゆっくり」　三宅保州選

惚れ込んだ趣味とゆっくり歩いてる　満州
ゆっくりと地球が溶ける温暖化　鹿太
ゆっくりのリズム忘れて病むヒト科　ダン吉
百までは生きる意欲の亀でいる　公一
百を過ぎたらお迎えに来ておくれ　文秋
ゆっくりと呼吸してます定年後　讃云児
母ちゃんがゆっくりしてる風呂上がり　月子
夫逝ったあとゆっくりと楽しもう　倫子
ゆっくりと堂々めぐりする思案　あやめ
ネクタイをゆっくり締める祝い事　二南
ゆっくりとゆすってごらん金なる木　喜美子
寝たきりの母へゆっくり粥の匙　ルイ子
車椅子ゆっくりと押す菊花展　笙子
生きのびる飯をゆっくり噛んでいる　艶子
ゆっくりと歩いてくれる古い靴　能子
吉四六のはなしゆっくり聴く民家　桂香
ゆっくりと眠るあしたも忙しい　公子
ブランコをゆっくりこいで明日を見る　信子
くちびるがゆっくり動いたら判る　諷人
ゆっくりと放すゆっくり泳ぐ稚魚　笑風
シェークスピアの余韻ゆっくり溶けてゆく　雅文
同情が愛へゆっくり羽化しかけ　(沢)和子
沈む夕陽を船はゆっくり追っかける　洋敏
ナマケモノが動いたらしい少し風　美代子
絵の具皿ゆっくり溶けてゆく野心　勇太
ゆっくりと歩けば拾うものがある　満津子
貴婦人を演じゆっくりティータイム　菜々
ゆっくりと見たら妻にも艶ぼくろ　典子
先を争うことはなかった父の靴　恵子
カクテルをゆっくり含み考える　照子
ひらがなでゆっくり遺書を書くつもり　瑠美子
鍋囲み根雪ゆっくり溶けてゆく　睦子
殿様はゆっくり餅を焼きすぎる　朱夏
ゆっくりと渡してほしい川の幅　荒介
幼き日に戻りゆっくり鶴を折る　義子
手話の子とゆっくりだけど意が通じ　三男
ゆっくりとさせてはくれぬてのひらよ　蘭幸
腕時計はずした旅をしてみたい　章子
ゆっくりと眠りたいから墓を買う　大輪
清張を手にゆっくりと風の駅　澄子
ゆっくりと喋るゆっくり生きる人　完司
おひとつどうぞゆっくり骨を抜く気だな　富湖
一期一会海がゆっくり満ちてくる　佳
いつ来てもゆっくりなさるお姑さま　さち子
ゆっくりとしたらどうかと肩たたき　みね
ゆっくりとして来たはずの旅づかれ　義
ゆっくりと寝ていて欲しい母の風邪　笛生
良い話だったゆっくり受話器置く　人　度
ゆっくりに見えるが母に無駄がない　地　玉恵
てのひらにゆっくり落ちてきたむかし　天　一風
ゆっくりと歩けばどこまでも行ける　保州
軸

兼題「バイパス」　新家完司選

バイパスの話故郷がきなくさい　恵子
バイパスの噂へ土地が化けはじめ　求芽
ご先祖さまバイパスに土地売りました　三男
バイパス開通村長さんの髭も撥ね　(古)和子
おらが村バイパス出来て長者でき　(志)千代
バイパスがひと役買った村おこし　讃云児
芋掘りに行くバイパスの花畠　諷人
バイパスが出来てさびれた城下町　射月芳
バイパスで秋の味覚がよく売れる　公子
白バイが速度を合わすバイパスで　紫香
バイパスは張っているから気をつける　妻子
旧道でバイパスよりも先に着き　幸夫
悪童がバイパスにするうちの庭　柳宏子
バイパスより通してほしいモノレール　良知
血の巡りにもバイパスがいるようだ　蘭幸
バイパスが山を二つに割って抜け　宣司
バイパスに分断されて水荒れる　金太
バイパスが出来ても車減りません　炎六
バイパスで一休みして夕焼ける　半銭
バイパスで月が見えたり隠れたり　愛論
息抜きのバイパス欲しい嫁姑　狸村
逃げ道というバイパスをつけておく　螢
古傷を庇ってバイパスを抜ける　美代子
バイパスが出来て友達一人増え　真知子
バイパス反対蛙も拳あげている　富湖

主幹と受賞者のみなさん

バイパスが通り隣を遠くする　鹿太
バイパスに待っていたのは料金所　いわゑ
バイパスの一つに父の丸木橋　たもつ
喉から腸へバイパス欲しいダイエット　章子
出世コースのバイパスにある落し穴　萬的
バイパスを通せんぼする古墳塚　菜々
バイパスが飛鳥文化を跨いでる　一歩
バイパスの予測に給油所が動く　小路
排気ガス慣れしたバイパスの銀杏　千秀
パチンコというバイパスにはまり込む　蕗児
バイパスとファッションホテル里へくる　隆盛

誰にも内緒の僕だけのバイパス　森子
バイパスに取り残された一部落　荒介
バイパスで微笑んでいた月見草　ダン吉
雨のバイパス仙人らしき人に逢う　千春
バイパス手術神さまの血が通う　かりん
バイパスに何ときれいな陽が昇る　笑風

佳

コスモスの咲くバイパスを回ろうか　汲香
血のいろが戻ったバイパスよ有難う　天笑
バイパスにバイパスしたたかな臓器　(八)千代
バイパスがついて屋号を横文字に　周信
バイパスが出来るメビウスの輪のように　哲夫

人

カーナビがバイパス行けと言っている　度

地

バイパスがつこうと過疎は過疎のまま　寿恵子

天

バイパスの下で地蔵はよく眠る　岳人

輔

荒れ果てたこころにバイパスを通す　完司

兼題「曲がる」　小林妻子選

へそ曲がり修正ペンをとらず逝く　美津子
思惑が外れて曲がる釘へ愚痴　愛論
辻曲がるまで遠来の客送る　正坊
直角に曲がってばかりいた軍歌　富湖
紆余曲折あってどうにか元の鞘　寿美
赤いシャツ着ると背中が曲げられぬ　武
七曲りやっと峠が見えてきた　いわゑ

ブーメラン根性曲がりと言わないで　桂香
曲がり角越えておんなに艶がでる　良子
螺旋階段男は偽証考える　千秀
鬼が笑った　洗面器が曲がる　(古)和子
何時からか母に似てきた背の曲がり　いつふみ
曲ったら走るパートのお母さん　かすみ
曲がったことといやで出世に遠くいる　良知
プライドを捨てるとすぐに曲げられる　房子
蠢いた策士の鼻は曲ってる　周信
あの角を曲がれば亡母に出会えそう　けい子
リーダーが曲がるとみんな従いてくる　重人
曲がり角脳内革命起してる　睦子
へそ曲がり噂は僕のことらしい　ダン吉
神様が転び曲った鼻柱　公子
待たせては曲がり曲がって逮捕状　四郎
夕焼けがきれいで道を曲がれない　隆盛
曲がります鬼が手招きしてるから　蕗児
恋果てて曲がったままの風景画　みつ子
わたくしを根性曲がりにしたあなた　昭子
豊作に案山子の背は曲がらない　炎六
急カーブ突っかえ棒が折れている　潮華
働いたあかしのように曲がる腰　宣司
ひまわりの首が曲がって夏終る　朱夏
式場へ喪服がまがるので曲る　保子
松丸太曲って家を支えあう　荒介
深い秋ふぐ提灯へ曲がり込み　美房
葬式の列は角からまだ曲がり　一風
曲げられても頑張っているお家流　満津子
実直な男にカーブ投げてみる　颯云児

盆栽は父の好みに曲がらない　洞庵
腰曲がるほどに何かと腹が立ち　一二三
見逃してくださいここは曲がり角　螢
神様が曲がる　ぞろぞろついて行く　日枝子
曲がった枝の心を聞いてやることだ　日枝子
終章の辻を曲ってからひとり　美代子
九条を曲げてしまったのは誰だ　保州
佳
鉛筆の芯は曲がったことがない　保州
あの辻を曲がれば重荷下ろせそう　(安)寿美子
左遷から父の軌道が蛇行する　さち子
自分史を少し脚色して曲げる　正雄
一徹をすこし曲げると楽になる　朝子
人
右へ曲がり左へ曲がり火葬場へ　完司
地
曲がらずに生きて楷書を演じきる　(沢)和子
天
曲がりそこねた昔が疼く秋の底　森子
軸
人間も釘も曲がると手に負えぬ　妻子

兼題「海岸」　菱田満秋選

恋はうたかた浜に花火の跡がある　たず子
ふる里の海辺遠い日を招く　吐来
故郷の海岸が知るぼくの過去　佳秋
海岸で亀を助けてからの運　富湖
思い出はテトラポットのない海だ　保子
すばらしい出会いをくれた夏の浜　隆盛
海岸で聞く　流木の物語　千春
海岸で拾う疑問符のいろいろ　大輪
海岸に大きな朝日見に行こう　日枝子
渚に立てば亡父の波亡母の波　恭昌
海岸線波に未完の日がつづく　可住
見たいヌード見せたいヌードがいる浜辺　一二三
落日の海辺人生思いやる　武
落日の海岸神の手の中に　いわゑ
アオウミガメ巣立つ海岸振り向かず　たもつ
貝になりたい時は海岸へいく　(志)千代
海亀の涙知ってる浜の砂　千秀
イカを焼く匂い海岸見えはじめ　紫香
いつまでも平和でいたい海岸美　重人
海岸で平常心を取り戻す　泰子
海岸で拾った恋は蜃気楼　倫子
満月の蟹海岸を埋めつくす　天笑
海岸に地球の裏の声を聞く　羊子
ちっぽけな悩み海辺の砂に埋め　由多香
波の音聞けば江差の唄が出る　一歩
海岸で浮き沈みするお月さま　笑風
海岸へたって小さなこと忘れ　艶子
それからの事は黙秘の浜の砂　玉恵
返らない谺　渚に待ちつづけ　寿恵子
恋の予感海岸線を突っ走る　菜々
海の怒りにじっと堪えてる海岸だ　かりん
海岸でひとり芝居が派手になり　月子
海岸にまで交通標識ある平和　小路
黒船の来た海岸で茶髪の子　(古)和子
海岸を列車も我も傾いて　瑠美子
海岸で小さな自分を恥じている　弥生
椰子の実も期待海岸散歩する　潮華
海岸に陽落つ壮大なドラマ　千歩
海岸で沈む夕陽に抱かれたい　度
海岸で沈む夕陽に呼びかける　(池)寿美子
砂文字の悲しみ渚消しにくる　洞庵
海岸で俺は小さいなと思う　完司
佳
海岸でひと息いれる万歩計　一風
たそがれの海岸鍵っ子だけとなる　諷云児
海岸に立つと大きな声が出る　能子
海岸で海の青さを確かめる　良子
そしてもうだあれもいない波の音　美代子
人
海岸に立って小さくなる私　ダン吉
地
ふるさとへ海岸線が続いてる　洋敏
天
海岸で母は誤報と言いつづけ　頂留子
軸
台風をまず海岸が写される　満秋

兼題「行　方」　橘高薫風選

乾杯をしたら行方をくらまそう　蘭幸
二次会のあとの行方は知りません　義子
風船の種しあわせな村に着く　シマ子
団交の行方は暗い午前二時　正雄
知る権利先ず税金の行方から　公子
私の税の行方がわからない　保州

ビッグバンの行方見つめるお金持ち　靖巳
科学の行方有難いとも怖いとも　満津子
列島の行方に靄がかかってる　射月芳
憲法を行方不明にする安保　美房
激戦地還らぬ形見石ひとつ　千歩
尋ね人ラジオは歴史くり返し　啓子
辻政信の行方いまだに気にかかる　完司
プルトニュームの行方に人が住んでいる　雅文
スカーレットの行方を探す風の彩　(池)寿美子
ゼンマイを巻きすぎ猿は何処へ行く　千春
行方不明の猫が子供をつれ帰る　蕗児
行方不明になるのもいいな母の胸　富湖
姑と母　我の行方をみる如く　蕉子
寅さんの行方を思うことがある　典子
かなしくて風の行方を見ています　(安)寿美子
雲の行方大きな風をつれてくる　利武
結局は写楽の行方謎でよし　菁風
お賽銭の行方は問わぬ仏さま　喜美子
行方不明と音信不通とは違う　義
拳銃の行方ほどには思われず　可住
松茸の行方は部長宅らしい　未佐子
小遣いをやれば行方がわからない　トメ子
聞かずとも父の行方は縄のれん　諷云児
不確かな夫に持たす迷子札　鬼遊
なんとなく夫の行方なら分かる　洋
離婚してから行方不明のままである　螢
老いという行方にドンとぶつかろう　保子
定まらぬ行方を大器だとされて　満秋
亡母送る精霊舟はゆらゆらと　(志)千代

蜉蝣の行方にひらく蓮の花　鹿太
出で立ちは行方を聞いてからにする　二南
行方などままよ翔んでる女です　朝代
捜しに出た兄も行方不明となる　(八)千代
絵はがきが忘れた頃にカナダから　泰子
行方まで金木犀にまどわされ　瑠美子
有頂天の行方ご案じ申し上げ　みね

タンポポの行方は花が咲いて知り　とし子
真っ直ぐに歩けば行方見えてくる　武庫坊
それからの行方訃報で知りました　房子
群衆の一人一人にある行方　千秀
業平と小町の行方存ぜぬか　岳人

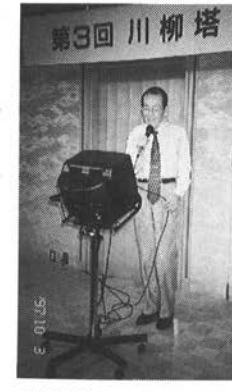
あてのない旅の行方は海に出る　信子
核を抱き行方は定まらぬヒト科　ダン吉

この国の行方と父の遺書にあり　四郎

その行方塔天辺の鶴(こうのとり)　薫風
（清記―希久子）

懇親会

川柳塔まつりの最後を飾る懇親会は、午後5時半から河内天笑新理事長の司会で開会、橘高薫風主幹のあいさつの後、仁部四郎氏の発声で乾杯した。今回は同人・誌友の交流を深めるため、入口での抽選でテーブル番号を決めたので、見知らぬ者どうしがあいさつを交わして交歓する風景も見られ、本社・地方の同人がカラオケで美声を競い、会のふんい気を盛り上げた。



懇親会でのカラオケ

お祝い金

第3回川柳塔まつりに対し、次の方々からお祝い金が寄せられた。

吉田笑女・結城明玄・堀江正朗・月原宵明
内海幸生・酒井輝・中原諷人・林荒介・瑞枝
・井上照子・新家完司・竹原川柳会・川柳塔
鹿野みか月・川柳塔きゃらばく・美研アート

お礼

今回の川柳塔まつりにあたりましては多数ご参加くださり、厚くお礼申し上げます。句会・懇親会等におきまして、主催者の不手際により、ご迷惑をおかけしましたことを深くお詫びいたします。

川柳塔社

第三回 川柳塔まつりに 参加して

なかなかの一日

仁部四郎

平成九年十月三日は、第三回川柳塔まつりの日でしたが、私にとってもなかなかの一日でした。

唐津の〝川柳塔〟は総勢で二十名あまりですが、おかげさまで今年で十五年になります。故西尾主幹はじめ川柳塔のお仲間には唐津へよく来てもらって盛大に句会を開いてきました。ほんとうに、唐津の者は有り難く思っております。

第一回の川柳塔まつりの際の同人総会と今年第三回の同人総会に出席したわけですが、印象を一口で言えば〝転換期〟ということです。きわどく飛躍した表現で申せば戦後民主主義のプラスの面を、例えば、積極果敢にモノを言うメリットを試す段階にあると見えるのです。

先達のこれまでの御苦心は筆舌につくしがたいものがあると思うのですが、率直なお話に耳を傾けつつ、挺身の気持ちで、現執行部の方々が幅の広いリーダーシップを発揮されることを大いに期待するところです。

夜行寝台の寝不足は、参与として名前を呼ばれて醒めました。月間賞は全くの予定外。消化不良のスピーチに乾盃の音頭と、十月三日はなかなかのメモリアルデーになりました。

教員生活は非常勤まで含めれば四十年、川柳生活は二十年、頭の中はまだまだ混乱中ですが、「お前にできそうだから」と仰言ってもらえれば、「乾盃や心に詩の盈ちるべし」の心境になった十月三日でした。

生の川柳に触れて

清水潮華

「第三回川柳塔まつり〟が盛大裡に終わりました事を、心からお祝い申し上げます。

私は新同人として横浜あおば会から初めての参加ですが、会場の和やかな、そしてまた飾り気のない皆様に接し、関東、関西の違いを痛感致しました。

各賞表彰では、一年を通算しての成果ということで、長くて短い一年間のたゆまない研鑽が実ったものですが、素晴らしいの一語につきました。

毎月、皆様の句を拝読し、一人でクスッと笑ったり、そうだそうだ私も同じです、と思わず口にしたり、私にとって川柳は日々の生活におけるかけがえのないスパイスです。

これからも、川柳塔の皆様にお目にかかるのは、年に一、二度と思うのですが、誌上では常にお会いしている訳です。誌上で想像していたお人柄と一致した何人かの方々にも、お目にかかることが出来ました。

私の想像力も未だ捨てたものでないと、自画自賛致して居ります。

川柳塔まつりへの参加は、誌上では味わえない生の川柳に触れた一日でした。

今から来年の川柳塔まつりが楽しみです。勿論、賞を念頭に置くような大それた考えはありませんが、目標は無いよりあった方が良いのは確かです。

また、第四回川柳塔まつりでお会いしましょう。

新任ごあいさつ

まめに動いて

理事長　河内天笑

このたび川柳塔社理事長に就任することになりました。平成二年十月の同人総会で新規約を採択し、それまで主幹が理事長を兼任していたのを改め、主幹・理事長・副主幹・副理事長・常任理事の役員を置くことに決まりました。

西尾栞主幹の体制下では現主幹の橘高薫風氏が、平成六年十月から現主幹の元では西田柳宏子氏がそれぞれ理事長の重責を遂行されて参りました。

平成八年十月から西田柳宏子氏が相談役になられ、同時に小出智子氏が理事長に就任されましたが、体調に恵まれぬまま遂に本年六月二十二日に帰らぬ人となられました。ご家族様はもとより、わが川柳塔社にとりましても一大痛恨事でありました。

こうして橘高薫風主幹の体制下では私が三人目の理事長に就任することになりました。諸先輩の理事長の豊富な知識や経験に及ぶべくもありませんが、任務に専心して参る所存であります。昨年十月副主幹就任の際の抱負として「確実なる一歩を」の一文を掲載しましたが今も同じです。つけ加えるとすれば各地の小句会に出来得る限り数多く出席し、川柳塔を支えてくださっている皆様方と直にお喋り出来る機会をたくさん持てるようにしたいと考えていることです。御支援のほど、よろしくお願いいたします。

僕に火を点ける一押しして貰い　天笑

川柳塔のために

副主幹　宮口笛生

十月一日に臨時三役会議を天王寺ふれあいで開催し小出智子理事長の急逝による後任の人選に入りまして河内天笑副主幹を理事長に（この件は九月二十六日の常任理事会の席上で決定ずみ）次いで空席となった副主幹に宮口笛生ということに決まり、十月三日の川柳塔社同人総会の席上、満場一致でご承認をいただいたところでございます。

麻生路郎師のもとで勉強させていただき、柳歴は今年でまる五十年と、古狸もいいところでございますが、下手の横好きで未だ上達の域に達して居りません。

国鉄を定年退職をいたしまして十七年。農家でございますので、退職以後農業に従事しながら、好きな川柳と暮らして参りました。私ごときにとてもこの大役は務まるはずがないとお断り申し上げましたが、今となった以上、非常な重責に駆られているところでございます。果してどれだけのお役に立てるかと思えば身の怯む思いでございます。主幹始め川柳塔社の皆々様にも、色々とご迷惑をおかけする事も多々あろうかと思いますが、いつまでもおんぶにだっこは参りません。微力ではございますが、川柳塔社のためならヨーイヤコラで、全力投球で参る覚悟でございます。川柳塔社皆々様のご理解あるご支援ご協力を心よりお願いいたすところでございます。

川柳塔の益々の発展に向かって、皆々様と共に頑張って参りたいと思います。

秀句鑑賞

―水煙抄

―10月号から

永田俊子

なん人が分かって見てる美術展

傍島克治

美術展で抽象画など見ても分からない私はこの句を読んでほっとさせられたと同時に、画を見ている何人かの神妙な顔の裏側を突いているようで痛快な気持になりました。

ほどほどと言うむつかしい塩加減

大西文次

ほどほどと言う何とも言えぬ形容詞を生かした句であらゆる意味を持つ塩加減に作用させ、過ぎたるは及ばずの意を持たせた微妙な心の動きを詠まれたことに感心しています。

ゆっくりと本をお読みと雨が降る

藤田泰子

雨が降ることをこぼす人が居るが作者はそれを善意に受け入れて居られる。それで表現もおおらかで神様への感謝があり、雨の日に本を読んで居られるお姿が見えるようです。

羽伸ばすところを広くとっておく

村上ミツ子

老後の設計のお手本とも言うべき句でこれは大切なことですね。ゆっくり手足を伸ばせる所を確保するという自己主張があり、明日への希望が感じられます。

疲れたなあ善人の振りもうやめた

石川勝

一読してお疲れさまとの感を深くしました。善人の振りして浮き世の風に堪えきれなくなられたお気持が結句の「もうやめた」に出ていて、働いてきた人の本音を聞いているようで、哀感がにじんでいるようです。

傍目には気楽に見える老いひとり

澤田和重

一人住まいは気楽そうに見えるが、その淋しさや心細さは本人にしか分からないものである。まして「老いひとり」だから尚更のこと、同じ境遇の私にはよく分かります。

悧巧者ばかりでこの世息苦し

杉澤汀

特に戦後生まれの大人から子供に至るまで利口者ばかりで驚かされるが、智に走り利を得るためへのぎすぎすした世を息苦しいと表現された所に、情愛をなくした都市砂漠への嘆きが聞えてきます。

言い訳がすらすら言えるから恐い

中居善信

受け身になる筈の言い訳をあまりすらすら言われるとその舌鋒に恐れをなし、また嘘を言っているのではないかと思ってその行く末を恐ろしく思ったり私もそんな気がします。

女ひとり生きてくための肩パッド

角野仁清

現代世相を詠んだ句で、いかつい肩パッドに代表される女の強さや意気込みで、女ひとり生きてゆく決意と哀しさが感じられます。

良く笑う愚直な妻が居て安堵

加藤権悟

何もかも心得て、にこにことして居られる奥様を愚直な妻と言い、また結句の「安堵」に奥様への愛情が感じられ、明るい御家庭が想像されていいですね。

次に好きな句沢山の中から

真っ直ぐな道を歩いて歪む靴

杉本とも子

素直さが取り柄で主婦に甘んじる

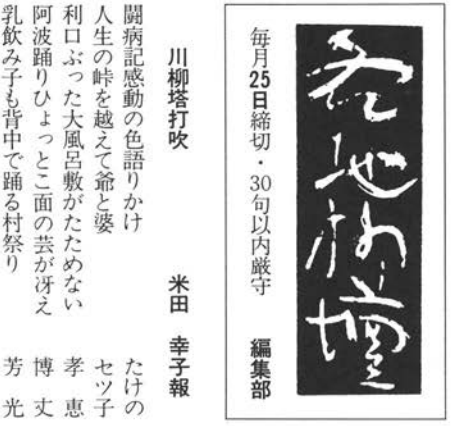
森口美羽

教育論太い根っ子が枯れている

原みさを

気短でエスカレーターでも歩く

越智青園



川柳塔打吹　米田　幸子報

闘病記感動の色語りかけ　たけの
人生の峠を越えて爺と婆　セツ子
利口ぶった大風呂敷がたためない　孝恵
阿波踊りひょっとこ面の芸が冴え　博丈
乳飲み子も背中で踊る村祭り　芳光
美しい感動貰う種を蒔く　睦子
背なの子がもぞもぞしだす立話　みほの
少年法罪にもぞもぞ賛否問い　小生
札束に踊らせられた事がある　かつみ
盆踊り螢が二匹ずつ消える　石花菜
もぞもぞと愚痴飲みこんだのど仏　よしえ
気持よい汗で酷暑を追い払う　玲泉
感動の余韻か妻が美しい　一京
もぞもぞとうぶなお方の恥じらいか　しろう
墓掃除女の汗か蚊に好かれ　京子
玉の汗男の顔になって来る　明美
急ブレーキひや汗かいて反則キップ　禎元
男なら涙は見せず汗をかき　弘朗
もぞもぞと残り火を抱く夏の海　季芳
もぞもぞと踏絵の前でひと思案　雄々
Vサイン煽てに乗った合図です　玲子
思い出はあなた背負った峠道　節子
無礼講の百足一匹とり逃がす　螢
感動もなく何本もの管で生き　獏沓
感動が薄れぬうちにインプット　幸子

川柳塔まつえ吟社　恒松　叮紅報

何となく納得してる群れの中　知恵子
納得のゆくまで酒を酌みかわす　登志子
短冊に書いて納得したらしい　螢
納得が行かぬ女のもつれ糸　房子
太陽は納得してから沈む　畔
納得をさせるいい知恵借りにゆく　早苗
納得がつかないままに暮れてくる　ひふみ
太陽が影呑み込んだ真昼時　久枝
影が消え空家が増える過疎の村　淳
影の位置変えて秋風吹いてくる　邦代
病院の廊下に消えた父の影　奏子
叱咤する喝采もする私の影　多賀子
わたくしの影を時どき振りかえる　きみ子
大晦日時計のネジをしかと巻く　可女
腕時計はずして海を見ています　博子
古時計亡母のやさしさ呼び戻す　登美子
手を合わせ主治医がちらと見る時計　茂美
うるさいがいつも一緒にいる時計　米子
今の命を無造作に消す砂時計　桂子
一番風呂で一番星を見い付けた　友子
鼻唄がつい口に出る風呂の湯気　みえ
仕舞風呂虫のコーラス聞きながら　明子
フルムーン心ゆくまで露天風呂　太泡
旅の朝弾むこころを湯に沈め　義良
バラの花浮かべた風呂にゆったりと　静恵
すんなりと勝ったつもりの天の邪鬼　日出子
すんなりと行かず投げ出す性急や　静江
表面はすんなり通った均等法　芳枝
すんなりと和解どちらもいける口　与根一
すんなりと酒でまとめた処世術　叮紅

堺川柳会　河内　月子報

伝言板昨日の夢がそのまんま　春蘭
救急車が伝える夜の寒い風　金三郎
周り皆本人よりも先に知り　柳宏子
人間のつもりで生きるこれからも　勇太
伝達書　判こ二十五まわります　哲平
一番星に伝えたいこと山とあり　文
これからと言えば堪忍してくれる　二南
両方に思惑のある仲直り　半銭
伝えねば八月の雲泣きやまぬ　アキ
両方の顔立て僕はまるつぶれ　冬虹
暇と金両方出来てから惚ける　健吾
これからの心構えがよく変わり　梓
両隣さらりとかわすお付き合い　紀美女
戦争の愚かさしかと伝えとく　八千代
弁当に母さんからのメッセージ　深雪
この先の話は酒をのんでから　洞庵
もう秋を伝えに来たの赤とんぼ　泰子
これからはおいしいものを少しだけ　みつこ

娘のカレー妻のカレーもほめておく　扶美代
言伝は白が汚れていく怖さ　りつえ
伝えたいことあり鍵穴を覗く　美代子
まあまあとなだめて両方とも叱り　頂留子
両方の好みへ歩み寄ってゆく　かりん
漬け物で伝えています妻の愛　菜々
父はははの大きな手柄伝えとこ　東雲
双方に理があり迷うヤジロベー　寿恵子
ツーカーで伝わる夫婦と言う絆　寿美
片方の脳をしばらく休ませる　月子

高槻川柳サークル卯の花　川島諷云児報

肩の凝る話だ舌を二度噛む　柳宏子
よく動く舌に騙され易くなる　重人
かかわりのない毒舌は楽しめる　克治
酒タバコ断って達者な舌の先　しげお
迷信にこだわり回り道をする　庸佑
迷信であろうと今は縋るのみ　かおり
土壇場に来ると神様仏様　あきら
かび臭い迷信がまだ憑きまとう　英一
老いふたり三途の川は信じてる　一笛
悪い癖でそわそわすると爪を噛む　比ろ志
そわそわと夫の帰りを待つ不倫　とし子
夫好みの色に染まって老いて行く　波留吉
祭だまつりスカイブルーの髪がゆく　静江
溜め息をほんのり染めたロゼワイン　泰雄
何色に染まれば好いてくれますか　節子
すきなよう染めておくれとつのかくし　満寿蔵
頬染めたはたちの頃に帰りたい　よ志子
頬染めて酔うていたからプロポーズ　白渓子
再婚の話へ髪を染め直す　紫香
退院を早めた嘘をつき通す　マツエ
趣味一つ続けてボケを防止する　東雲
散り際はどうあろうとも子に見せる　ルイ子
産声を聞いてにっこり母になる　狽沓
失楽園女の業の凄さ知る　吉太郎
A型の弱さを隠すサングラス　澄子
極楽に夫の椅子が空いていた　スミ子
むしゃくしゃするので殺人をする怖さ　石舟
きな臭いわが左眼のものもらい　薫
単身の悲哀が回るランドリー　稲子
エリートのラベル背中にして空虚　秀夫

京都塔の会　松川杜的報

橋渡るとき人間は脆くなる　豊次
巻線香ひとりになった愚痴こぼす　栄
踏切の地蔵に線香ゆれている　紫香
一筋の線香父は星になる　〆女
線香の煙がなぜかもつれあう　礫
法話聞く座敷線香の匂いする　白渓子
一家言くずれて父の七回忌　京子
バランスを崩すともろい老いの坂　正坊
酸欠の都会故郷の滝恋し　吉之助
滝壺の民話も添える湯の便り　百合子
色即是空ひたすら滝と対話する　杜的
ひぐらしが秋を告げている女滝　求芽
丈余の滝で洗い流した深い罪　波留吉
滝の音貴方の私語を聞き洩らす　芳子
六根清浄滝に心も洗われる　飛鳥
滝に身を打たせ五欲の念流す　巨詩
氷柱になって時間を止めた滝　ただし
スポットが当り友情脆くなる　英一
情けには脆い男が肩を張り　とし子
人間は強さ脆さを併せ持つ　庸佑
線香のように勤めた公務員　福子
線香花火一瞬母子浮き上がる　高栄
気がつけばこの道母の通った道　てる
日本列島暴れ狂った梅雨の雨　笑女
雷が近づき庭の暗さかな　春蘭
猿沢の池訪う緑の風の中　達子
新刊ラッシュ図書券持って迷いがち　武庫坊
言い訳をいつもするから誘わない　年代
花泥棒花の心は盗めない　美穂

佳句地十選（10月号から）

前　たもつ

核を持つやはり使ってみたくなる　ダン吉
幸せだった頃の写真がかけてある　文子
貧乏性椅子にはいつも浅く掛け　一歩
恋を知る時限爆弾抱くように　富湖
あの人の電話だ椅子を持ってくる　幸子
スマイルの消えた少女に教師の目　庸佑
巡礼の鈴に消された罪一つ　さち子
走っても走っても後輪追いつけぬ　聖子
鍵をかけた部屋で火薬を混ぜている　荒介
右へならえのポーズわたしに影がない　恵子

寂聴のげんじを読んでねるとする　水客

サークル檸檬　小林一夫報

歳月や女の羽も軽くなり　いわゑ
傷心をやさしく拭う羽箒　みつ子
赤い羽根人工弁の打つ胸に　喜美子
乗り換え駅にうどん匂えり夜の秋　薫
山下りる途中の景色見ずしまい　智恵子
あげくの果て旅に出たらと医者は言う　雅子
お月様いくつ　わたしの方が老いました　あずき
地球儀をくるりと回し無策なり　希久子
一杯の水の旨さを知っている　房子
香煙縷々浮かんで消える面影よ　正坊
まだ夜はつづくぼくらの濡れた石　一夫

とっとり川柳会　武田帆雀報

リストラだそろそろ肩を叩かれる　かつみ
そろそろと長い旅路も見えて来る　一枝
中締めを幹事と幹事眼で知らせ　舎人
そろそろとスープの距離が遠くなる　輪多朗
本番にそろそろしよう日が暮れる　一京
一歩二歩そろそろ試歩の汗うれし　静生
酒ぐせがそろそろ出るか目が座る　銀嶺
生き過ぎてそろそろ来るか神の使者　大漁
意地を張る頑固そろそろ止めにする　季芳
いい人が出来たそろそろ身を固め　粗粒
実家にはまだあるかしら宝物　一夫
泣きごとを実家の畳聞いている　喬水
兄嫁のやさしさ待っている実家　典子

清貧の苦労鎮めている実家　螢
実家から古着が届く子沢山　正和
因習に堪えた実家の床柱　美恵子
実家から米を一年分もらう　はるお
真実と秘密を里に封じ込む　和歌子
盆済んで実家の嫁はふて寝する　石花菜
実家には漬物石になった嫁　睦子
せり出した腹に過ちは隠せない　圭一郎
過ちをするなと言った影法師　多哥由
過って押したじゃ済まぬ核釦　和枝
過ちのもとは僅かな蜜の味　よしえ
過ちの数だけ骨が太くなる　帆雀
ライバルがミスをするまで寝て待とう　鬼桜
過ちを振り返る日も五十回　孝男
過ちを流せる川がみつからぬ　忠良
過ちで壊したコップ継いでみる　崇
過ちが大発見を生んでいる　悦子

川柳高知　川竹松風報

添い寝する母の団扇が誘う夢　和子
団扇から平和の風が吹いてくる　京子
草角力行司が裁くしぶ団扇　朱坊
踊り子の熱気そのまま八ミリへ　有佳
ほろ苦い味に私は今日も生き　幸泉
コンビニで飼い馴らされて夏終る　子龍
恐ろしい血筋短足だんご鼻　菊野
コマーシャル孫が洗脳されている　千恵子
モノクロとカラー比べて顔と顔　竹萌
蠅一匹へ妻の殺意が追い回す　千鳥

ご馳走へ招かぬ蠅が手をつける　快風
炎天に眼ばかり出している農婦　幸
炎天がうすい頭に嫌われる　佳風
炎天下地蔵が流す油汗　功
炎天下でもアベックは離れない　孝雄
炎天下役所は冷房効いてます　松風

川柳塔鹿野みか月　土橋螢報

師匠の手魔法のような技を見せ　幸枝
田舎の猿が警察の世話になる　隆風
猿山のボスも女性の世代来る　弘子
観世音と踊り疲れてひと眠り　喜与志
ともしびにもう帰ってと頼んだ夜　武子
ともしびの見える範囲で羽のばす　実満
ともしびに照らされる母の顔写真　汲香
ともしびがつかぬ隣の道を掃く　野草
ともしびを一気に燃やしては脆い　諷人
曖昧なともしび誰も振り向かぬ　盛桜
中程で肩の広さを競い合う　和子
競売は腹巻きにある胸算用　睦子
コンテスト競り合う女対おんな　くに子
容赦なく競り落とされたおれの汗　孔美子
競り合って食べた麦飯うまかった　きみ子
無駄口は心の鞘にかくしとく　八重子
寡婦の鞘破り私は蝶になる　房子
自然薯を鞘に作ったおじいさん　はるお
鞘をみて中身を決める癖がある　よしえ
表札を掛けて我が舎を意識する　節子
古寺に誰がともすか夜が明かい　保子

子ども等と校舎を囲む花づくり　公子
仏舎利塔懺悔の祈り深くする　和枝
花を活け静かに心薫りだす　久枝
抱き寄せて母の薫りと温もりと　みさ子
蕎麦の花薫る故郷へ骨埋める　孝子
木犀の薫り仲人やってきた　智恵子
木犀の薫り分け合う両隣　かつ乃
人間らしく自然に薫ることにする　螢

はびきの市民川柳会　芦田　絢子報

ある日ふとひとりになった私の絵　みつこ
入タイマー切タイマーに身を任せ　美喜
茶髪ミニ時の流れが街を行く　さとみ
ストレス詰め笑顔で飛ばすゴム風船　りつえ
熟球に暑さ忘れる甲子園　昇
程々に年金つかい夢を追う　敦子
美しい椅子はシャネルの匂いする　利武
侘びしさもちょっぴり知った回り椅子　吐来
孫生まれ小さい椅子が一つ増え　はるよ
椅子いっぱいあるのに僕の椅子がない　重人
盆休み待ってくれてた母も亡く　昭平
八月の涙なかなか乾かない　敏
八月忌　噫鴻毛のいのち生く　たけし
核いらん八月六日の石を蹴り　専平
八月の夢よ真上に天の川　金太
九条を声大に読む敗戦忌　ダン吉
英霊の墓ていねいに洗い置く　一壺
フルムーンでもわくわくの家族風呂　俊男
わくわくとさせた日もあり共自髪　泰子
わくわくが詰って少し鳩胸に　扶美代
旅の朝一オクターブ高い声　桂子
わくわくと胸に抱いてる玉手箱　絢子
わくわくと男の嘘に会いにゆく　聡
如才なく息を合わせるパートナー　晋
相方に見せ場をつくるボケの役　かつみ
パートナー次第人生泣き笑い　志洋
母病んで家庭のリズム狂い出す　庸佑
孫が来て老いの家庭に花が咲き　四三郎
雑魚寝した頃は家庭に和があった　辰子
三世代家庭のぬくさ干してある　猿沓

南大阪川柳会　寺井　東雲報

薬の城をはみだすぼくの酒　白洋
蛇の話をする草餅食べながら　度
水つかる区域教えぬ周旋屋　柳伸
口下手の耳朶すぐに赤くなる　萬的
くつろいで空を見上げる終戦忌　章久
病院へくつろぎに行く妻がいる　東雲
口下手が予想とちがう小金貯め　憲太郎
大鷲の生きる区域の木を伐られ　文秋
口下手が弁解余計ややこしい　柳宏子
このへんを歩くと肩で風を切る　重人
草餅が昔話を語りそう　哲郎
草餅が届く故郷の夏祭り　久峰
母おもう草餅見るたび作るたび　頂留子
駅前のあたりの呑み屋顔が利く　たもつ
傷付いた空虚な心癒す旅　庸佑
口下手な大工確かな腕を持ち　直子
口下手の母が黙々ミシン踏む　秋子
口下手な男の汗を信じよう　ダン吉
突然の失職空虚まだ続く　清水
万病に効く湯に母をくつろがせ　志華子
不揃いの草餅にある温い味　凡子
草餅がとっても好きで母達者　智久
草餅という貼り紙に歩を止める　シメ子
空虚な日花に心を奪われず　恒明
手作りの草餅知らぬ人が増え　日出子
言い勝ってみても空虚さだけ残り　千楯
被害者も容疑者も居る同じ村　ハル子
ドライブインになれど草餅売る峠　三男
空虚から抜けて妻に今がある　久子

川柳ささやま　酒井　靖子報

満たされぬ女ごころへ昆布煮る　恵美
広告の服がわたしに似合わない　とよ子
ひと声がこんなに温い老いの背な　純子
ポッカリと孤独感じる千切れ雲　芳乃
勲章が語る戦の目がうるむ　美智子
夢追って雲の流れについて行く　多美子
勲章も倉庫で眠る記念品　すず子
色紙の勲章くれた保育園　末野
勲章はないが愛する妻がある　一粲
勲章の陰には内助の功がある　八重子
天国へ逝くのはふんわり白い雲　素水
子は宝立派な勲章とも思い　とみ子
子育ての釘は深目にさしておく　つや子
雲行きが悪そう世辞を並べとく　ヒサ子

終章に打つ釘一本光らせる　和子
勲章もなくこの村の土になる　可住
夢描く花火に命の重さ知る　靖子

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

浮気する暇なんぞない夫婦ゴマ　一風
やんわりと浮気をついた母の針　ますみ
出張のカバンの底にある浮気　夕花
なんにでもまめな男の浮気ぐせ　剛治
消しゴムで消せぬ浮気になって来る　治也
良妻が賢母になってから浮気　まさと
精いっぱい生きて煩悩糧にする　美幸
煩悩を捨て捨て捨てという木魚　洋
煩悩の旅に菩提の杖一つ　八寿子
坐禅組む脳裏煩悩の渦がまく　恭昌
ひとつ消しひとつ生れる煩悩よ　白洋
入歯になっても煩悩つきまとう　冬葉
煩悩を抱いて人科を抜けられず　美代子
煩悩を炎やす活力共白髪　柳伸
夫婦別姓煩悩少しきしみがち　東雲
のど仏あなたの愛を待っている　柳弘
どうしても嘘の言えないのど仏　芙美代
ゴミ袋さげた課長ののど仏　弘直
のど仏大きい美女に怖くなる　柳宏子
絶世の美人で惜しいのど仏　昭子
火のもとをたぐると小さな小さな火　春蘭
今にみろあすを夢みている火種　頂留子
どの人もガンの火種は持ってます　昭二
世話やきのタンポポ火種まで運び　とし子
火種ぐらい私も持つわ人並に　民子
凍えながらあなたの火種抱いてます　弘一
この火種消してなるかと男意気　宏
丁寧に消したはずですでも火種　恵子
争いの火種は深くふかく埋め　シマ子
好きだから火種は素手で受けとめる　たもつ

川柳大阪　坊農　柳弘報

ギャル神輿粋なハッピに色香立ち　勝治
ド近眼私あなたがよく見えん　中3 圭
皆はずれチャンス回って来ましたよ　まゆ子
チャンス来ずピンチばかりがなぜ続く　酔照
暑いのか虫もよく鳴き犬も鳴き　信酔
軽やかな帰宅父さん機嫌良し　喜楽
その契り親の不安は限りなく　叭笑
夜明けまえゴミ箱狙うカラスども　多香
軽やかな寝息昼寝の孫を見る　河南子
軽やかな心浮いてる秋の空　青道
夫婦でも角度の違う視野がある　良花
生涯を約した女の秋の顔　川童
人生の最後のチャンス賭けてみる　照月
吉報は足軽やかに駆けてくる　雅巣
老眼が近視の妻に問う活字　鉄心
カタカナの泥濘孫の知恵借りる　しげお
近眼の目にも稲妻なぜ見えぬ　美花
エンゼルも悪魔もチャンス狙ってる　比呂志
軽やかな靴音きっと良い知らせ　柳昌
軽やかな忠告だった痛かった　希久志
まだ続く余生今夜も美酒に酔う　洛酔
チャンスには強いんですよこの私　かよこ
契りなら厚さは広辞苑ほどに　ダン吉
チャンスには弱いお方がするバクチ　司
心まで近視でないと惚れている　一歩
剣ヶ峰目の前に来た老いの明日　三十四
指きりのゆびの先から虹が立つ　金太
逆転のチャンスため息でるプレー　まつお
契るのがとっても好きな花の精　重人
軽やかな女将の筆にある誘い　柳弘

城北川柳会　吐田　公一報

顔色を見てよみとった夫婦仲　久留美
じいちゃんのへそくり狙う夏休み　あき子
一匙の砂糖に群れる総会屋　登美子
鉢植えのぶどう一房家族分け　美代子
五十歩と百歩が同じ訳がない　秀夫
生ゴミに群れる鳥に恐怖感　政子
幕切れの重い台詞にある余韻　史風
忍の字が書かれてありし古扇　春蘭
逝った子を呼んで呼ばれて一心寺　トヨ子
腰痛で踊る阿呆にもなりかねて　あい子
寅さんのペーソス演技超えている　ただし
群れて来た女に負けたビヤホール　扇帆
夾竹桃あれやこれやの終戦日　寿美子
天地有情山が大きく牙をむく　高栄
バーゲンに群れる女の力瘤　昭子
ボランティア尊い汗に世間知る　一枝
夏祭り金魚一匹持ち帰る　睦子
暴走族コンビニ前で群れをなし　義江

燃え上がる風の演技と火の演技　　とし子
句読点ない饒舌がまだ続き　　倫子
恩人の訃を聞く電話蟬しぐれ　　千歩
親になり初めて分かる父母の汗　　典子
汗知らぬ人が鍬振る起工式　　白峰
群れを出る勇気へ自分みーつけた　　朝子
食べて寝ていつもひとりの飯茶碗　　あやめ
お月さま芒の群れに仲間入り　　和歌子
ここ一番妻の演技に助けられ　　月子
したたかな笑顔に通いつづけてる　　天笑
酒肴持って三途の川渡る　　公一

西宮北口川柳会　　亀岡　哲子報

杖をつく友いささかの淋しさが　　春蘭
友達が居るから楽しい旅ができ　　江美
遺言でも書こかと思う宵の雨　　萬的
無人駅今宵の月はまんまるい　　紫香
生かされる限り核廃叫びます　　三男
叫んでも助けは来ない都市砂漠　　英子
八起き目の男の叫び信じよう　　颯云児
森の叫びに聞く耳持たぬチェンソー　　求芽
国民の叫びに英王室も負け　　柳宏子
子の叫び聞こえていないお母さん　　能子
手抜き料理教えるテレビ見ています　　義子
束の間を教えてくれて砂時計　　涼子
教育のすきまを埋める母の愛　　鹿太
手話の子に教える同じ目の高さ　　石舟
母の教えそこここにある箸使い　　澄子
色いろと同居をしおに娘に教え　　ルイ子
カタカナ語孫に教わる事ばかり　　てる
夫には暗証番号教えない　　正坊
父の樹を揺すり教えを乞うている　　透太
出世払いの約束果せぬまま老いる　　美智子
人形の愛を知ってる竹の里　　とみ子
迷うてる間に西瓜買わされる　　曙蝶
不気味だな妻がお皿を数えてる　　礫
笑顔見てからの挨拶長くなる　　二南
追憶をするうちやる気涌いてくる　　文
もう決めていても相談すると言う　　トミヱ
ふるさとの木霊は亡父の声に似る　　いわゑ
よく笑う私に福はまだ来ない　　房子
友達が音痴で音痴になって来る　　晴美
しょうむない事を知ってる酒の友　　しげお

川柳塔唐津支部　　久保　正剣報

どの子にも平等ですと親の愛　　あき
新時代女の肩が広くなる　　公一朗
でき過ぎて息子異国の果てに住み　　弘
夢の味未だに知らぬ不精髭　　虹汀
ジョギングで余生始まる朝の靴　　久仁於
札入れに何時もいれてる亡娘の写真　　高明
言わぬからわかりませんと女拗ね　　勝視
広い歩道混むハンドルのじれったさ　　幸夫
夏休み空しさ置いて皆帰る　　タミ
メニューにも加え薬は食卓へ　　晴翠
勢いに一歩を置いたその効果　　實
揚げ足を妻に取られて貝になる　　輝夫
カルチャーを出て矢印はスーパーへ　　四郎
水割りに俺の鮮度を訊いてみる　　正剣

ほたる川柳同好会　　井上　直次報

いい噂されてる予感くしゃみする　　蛍柳
いい噂運んできそうな南風　　ただし
噂さえ立たぬ男の無味乾燥　　直次
知らぬ間に本人死んだことになり　　善守
買いに行く当る噂のくじ売場　　竹二
口に戸はいらぬメディアが噂まく　　よしろう
下手な恋噂されたる日も昔　　勝
噂聞きながす可愛いイヤリング　　喜美子
この噂私出所知っている　　英子
畳替えすれば娘が嫁く噂　　保子
少し間を置いて素通りさす噂　　キヨ子
焼けぼっくい噂のせいでまた燃える　　久子
風化する震災孤独死噂にも　　セツ子
世話好きは噂も仕入れそつがない　　雪子
八組も男女組んだ人が別居　　博史
結び目が解けそで解けぬ倦怠期　　正三郎
二人三脚紐はゆる目に結んでる　　敞子
真一文字結んだ口をつい信じ　　昭子
結び目が解けそう只今冷戦中　　しずえ
和平条約ひとまず結び晩ご飯　　まみ子
好奇心とことん持ってるチンパンジー　　正安
こだわり症とことん調べるA型君　　祥風
へぼ将棋とことん飛車を可愛がり　　清史
友上阪とことんつき合うはめになり　　たけお
忍の字を百程書いて気を散らす　　明光
散り落葉ダイオキシンで季題消え　　馬洗

ゴミの散る町のカラスにある事情　桂子

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

右下がりの波から今も抜けられぬ　天雀
近所の目泥棒よけになっている　瑞枝
その時は盲導犬の世話になる　時子
目の前の利権に弱い偉い人　正子
よい事は目の底深くしまっとく　八重子
痛い目に合ってわたしは脱皮する　千春
信用をしてもいい目が澄んでいる　玲子
鬼太郎の目が人間をみて飽きず　繭
目を三角に隣の犬が吠え立てる　弘子
人目を避けて小さい種を蒔いている　なみ
目をあげて空に助けを呼んでいる　富美子
鵜の目鷹の目金の卵はみつからぬ　美世
目を閉じたあとも聞こえる子守唄　日枝子
鳩が出る目を眩ましてばかりいる　ふみ
余命いくばく世間の目など気にしない　寿々子
目があけば心配事が絶えませぬ　恵子
目印の最後の星を決めておく　ゆき
おち目にも赤いリンゴを撰っている　てい子
目を合わせた時から戦始まった　春枝
目をそむけずに切り捨てるもの切り捨てる　花子
目の奥に祭りがあって麦たわわ　荒介
うつの日のバラは真っ赤な目をしてる　保子
水面下目はしっかりと開けている　千代

川柳塔みぞくち　小西　雄々報

迎え火を焚けば仏の風が吹く　久子
初盆にたぎる想いの三日間　正光
迎え火に先祖の声を聞きわける　康女
盆踊り若さみなぎるエネルギー　豊枝
客帰りほっと一息つくお盆　智恵子
迎え火も送り火もせず空の旅　弘子
古里の稲も穂を出し盆終る　鈴枝
掃除して仏の座る場所つくる　静江
濁世故地蔵菩薩を祭ってる　信敬
瞑想のバラの真紅が盆に病む　雄々

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

労いの言葉をかけて夕餉の膳　英子
縁あって雨の降る夜に嫁にゆき　はるみ
片づける口で言うほど楽でない　鈴江
亡父母の思い出だから片づかぬ　かつ子
タイミングはずされ話切り出せぬ　聖子
片づけて叱られました子供部屋　好栄
片づけてからは不自由しています　ちよえ
こだわりをこのどしゃぶりで流そうよ　博利
あじさいの色鮮やかに通り雨　清泉
まな娘片づけましたる虚脱感　白汀

三幸川柳教室　三宅　保州報

気骨凝り欠伸ばかりの日の長さ　忍
ストレスを一杯ためた怒り肩　秀男
撫で肩の母にもあったストライキ　貞子
肩章が似合う父への感謝状　孝子
やる気満々肩張って練る一行詩　初子
肩揚げがとれて女が匂い出す　百合子
肩張ってその日その日の味加減　めぐみ
肩で風切っても所詮影法師　三千子
肩寄せて時を待ってる貝割菜　朱夏
言い勝ってなお肩口の寒い夜　和子
児が描く太陽があり生きていく　美智子
母の陽は心の隅もよく照らし　満洲子
苦労など陽気な風が吹き飛ばす　当代
またあした笑って夕陽落ちてゆく　みね
陽気です河内音頭が好きな老母　保州
川一つ越して陽当り違う国　正一
陽炎の向こうは次の一ページ　正甫
太陽のめぐみ地球に味をつけ　美子
落陽よ数多の悔いを焼き尽くせ　千秀
ハンカチをバストに挟み汗を取る　悟
厨房の汗で涼しい夕の膳　起世子
人知れぬ汗が男を磨き上げ　嘉平
ぬいぐるみのアンパンマンは玉の汗　健三郎
汗と涙浪花節だと言われても　町子
無報酬の汗は眩しい程光る　さち子
ジャムセッションわたしも汗をふきとばす　章子
椅子取りゲームうまい男で汗知らず　親蹊
木偶の坊になろうなろうと思う汗　靖子
台本に書いてはいない汗の量　桂香
花火師の汗七色に打ち揚げる　鉄治

竹原川柳会　時広　一路報

カルピスと一緒に思い出す昨日　高3　史子
あの星に願い叶えてもらいたい　高1　千枝
早朝特訓欠伸しているのはいない　蘭幸

背を伸ばし祖先の墓に逢って来る　夏喜
朝の風秋の前ぶれつれてくる　笹舟
体操に朝寝は出来ぬ夏休み　千年枝
午前五時我が人生はすがすがし　孝枝
朝刊の見出しに今日も目を見張る　房子
糠漬がうまい二人の朝の膳　蝸牛
朝のドラマ見計らってパンを焼く　貞子
生まじめな時計が朝を指図する　節夫
アメリカの朝もまあるい陽が昇る　笑子
冷蔵庫スイカ一個の存在感　比呂子
夢開く話は金のいる話　美佐雄
捨て犬に心開いた自閉の子　静佳
おごそかに月下美人は夜開く　菁居
少年の心眼鏡で見てみたい　年子
ときめきが欲しくて眼鏡買いに行く　一枝
老眼鏡買い替え世間丸くみる　栄恵
天眼鏡蟻の対話が聞こえそう　喜美子
何時の間に亡父の眼鏡でよく見える　勲
眼鏡の要る夫婦になってから深し　静風
度の合わぬ眼鏡で不満溜まり出す　一路

川柳クラブわたの花　吉村　一風報

浮気する天衣無縫が憎めない　幸枝
健康っていいなあ笑いまで元気　一風
夏バテにコスモスの風待ち遠し　隆盛
煩悩の海が深うて救い待ち　友甫
里の絵がトンボの羽に透けてくる　朝子
旅支度妻が何だか他人めく　ますみ
再会で灰に残った火種知る　幸子
ふるさとの自然まぶたに恵那の峡　トシエ
美術展風景画だけ見て回る　まさと
今日も又ちょっといい旅いい風景　明子
風景を楽しむ余裕ないデート　けいこ
忘れたい酒に未練が顔を出す　いつふみ
寺内町祭り太鼓を茶髪の子　春江
風景が浮んで顔も思い出す　知佐子
バイバイと振りむきもせず未練たち　美代子
左遷とは知らない妻のはしゃぎぶり　民子
鉄塔のある風景で草野球　明
待つことも楽しいなんて日もあった　八寿子
シャッター切る風景に孫とじこめる　宏
瀬戸内の景に水軍よく似合う　剛治
切株があるからうさぎ待ってみる　ミツ子
聞き流す事も火種を無くす事　道子
終の家を自然豊かなふるさとに　君江
眼裏にある風景を土砂が呑み　春子
富士を背にでっかい顔の男たち　鬼遊

大原川柳社　矢内寿恵子報

字体まで衰え見せるもどかしさ　みづえ
衰えに悟る一字を育てます　やすこ
母の味大きな器にてんこ盛り　あやこ
天を突く庭の老木衰えず　さちこ
母という器に愛が満ちあふれ　玉恵
母の器満たす優しさ温かさ　辰江
衰えを見せず一途に鍬を振る　悦子
衰えを隠す女に歳がない　妻子
真実をうける器は胸におく　巴子
衰えを知らず我慢の汗を拭く　喜美子
衰えを隠せず弱音出てしまい　こふゆ
器にも添えて心に愛を盛る　敏子
栄枯盛衰秘めて語らぬ鬼瓦　朝代
とっぷりと妻の器につかってる　みさえ
不義理して望郷つのる蟬しぐれ　美佐子
衰えは見せない旅のスケジュール　たづ子
パッキンが緩んだ夫婦衰える　ひでの
衰えは見せぬ女の帯の位置　あすなろ
衰えた足りハビリで呼び戻す　和子
その位置につけば光ってくる器　寿恵子

川柳塔ふくべ川柳会　橋本多哥由報

編むよりもほどく切なさ幾度か　寛子
助けてと呼んだ子供の声がする　昭恵
当落を掴む確かな地獄耳　明美
騒ぐ子が静かになると気が揉める　輪多朗
呼んで下さい賞味期限の切れぬまに　美恵子
無人島ときにはいってみたくなる　ひろ子
赤い糸ほどいてほしい時もある　あけみ
核反対地獄を二度も見たくない　信子

川柳東大阪　森下　愛論報

人間の価値宝石で飾っても　文秋
ガラクタの中にも僕の宝物　東雲
友達の数だけ増えてゆく宝　湖風
純白のこころで愛を誓い合う　賢子
スマートな男稼ぎはわるかった　度
スマートなうえに乳房がこぼれそう　治也

スマートな服がわたしを嘲笑う　章久
神の創る色で熱帯魚が泳ぐ　雅文
エプロンはいつも真っ白だった母　シマ子
ゆっくりと野山が秋の色を待つ　太郎
色即是空寡黙なる美学　柳伸
気に入った色にならない空の色　庸佑
子宝へまだたためない破れ傘　朝子
五時からの男へ夏の陽が高い　晋吾
少年法保護色にして隠す罪　一志
失楽園夜明けのコーヒー飲む二人　恭昌
焼いてなお骨ににじんだ色と欲　信博
逆らわぬ色を燃やして地獄絵図　愛論

川柳岩出　児島与呂志報

七人を生んで一人で暮らす母　智恵子
裏切りを知らぬやさしい里の風　保子
気楽さに拍車をかけてまだひとり　アサ
堂々とふかす一服ベランダで　紳一郎
ひとり言の中にヒント伏せてある　愛子
遠い過去哀史を語る里がある　和子
登頂へ一息入れる八合目　千鶴子
古里にすすきの道もあったっけ　ふみえ
里心孫の瞳の奥にある　悦男
一人寝を単身赴任の蚊がおそう　正義
ボーナスはいっぷくせずに駆け抜ける　良一
里帰り老母の小言も丸くなる　哲雄
いつまでも尻を上げないひとり者　重徳
いつか来る孤独の試練覚悟する　正直
ひとり言ありし日のこと夢見てる　たねゑ
いっぷくに世間話が燃えている　綾子
忙しさも一服もある長い旅　英子
老いてなお過去のロマンをひとり抱く　春子
過去の夢見たくてひとり歩く道　昌子
ひとりとは悲しいものと夜は知る　与呂志

岸和田川柳会　長谷川呂万報

お見舞に愉快な話持っていく　路子
パーティーを愉快にさせる娘のお茶目　基
愉快です話せば解る君とぼく　鹿太郎
宿六ともうちの甚六とも呼ばれ　甚一
雨宿りしたのが縁というけれど　美羽
低金利そろそろ上がる予感する　吉三
空蟬に予感が乾く世紀末　蛙城
混浴に何かうれしい予感する　一弥
いい予感お地蔵さんが笑て見え　萬的
合格の予感が走る電話口　狸村
医の進歩命永らえ幸不幸　敏光
国民を落胆させる医療法　さよ子
一軍から外され暮らし乱れ出す　白光子
流行に背を向けゆったり生きてます　盛之
次々とドーム落成世の流れ　信博
流行に鈍い男も風邪をひき　洋
ポケベルで僕はあなたを愛してる　東雲
流行は十年前の母の靴　苑子
気にせずに流行遅れ着る親父　松風
森翔んでファッション作る蝶の柄　辰郎
お犬様にもファッションがある散歩道　洞庵
流行を里帰りする妻に買う　愿
流行の視線を浴びるヘソルック　一齋
かたかたと流行に鳴るギャルの下駄　呂万
流行に縁ない老母の束ね髪　ひで
流行を追うには年が邪魔になる　冨志子
褌を今に女が締めるかも　文時
ルーズソックスまるで個性のないコギャル　金太
流行に縁なく僕のスニーカー　ダン吉
流行語覚えた頃はもう古い　柳宏子

川柳藤井寺　高田美代子報

どうすればよいかが辞書に載ってない　扶美代
どうすれば勝てるの弱いタイガース　修六
どうすればいいか巨人が聞いてくる　悦子
私でも可愛い妻になれますか　アキ
物忘れ名前がとんと出てこない　三郎
折り合いがつかずにむかい合ったまま　美代子
振り上げたこぶしの手はどうすれば　昌子
どうすればいいの夫婦の割れた皿　和樹
プロポーズやがて後悔するせりふ　六点
別姓でやがて呼び合う部屋の中　桂子
星を見るやがて還ってゆくところ　かつみ
やがて親捨てる日が来る子の背丈　婦美枝
やがて着く終着駅の灯が見える　吸江
そっとしてあげようやがて喪があける　花梢
海外へやがてゆく日の地図を買う　利武
どこからがやがてか運命線を見る　美房
わたしの娘でやがて男を泣かすだろ　正一
やがて逝く五百羅漢の輪の中に　政代
ふたあけてびっくりだったこのしまつ　登志夫

意外にも月がきれいで喋れない　敦子
風を切る男が好きな部屋の隅　絹歌
売れたのは一枚　生前のゴッホ　和子
仲直りすれば意外に良い男　志洋
仲良しの近所に鬼が住んでいた　鐘造
ドライフラワーの方が情けを持っている　元紀
近づけばくるり背中を見せる影　恒雄
余生もう趣味を続けるだけでいい　宗一

翠洋会　柴田英壬子報

コスモスの風に話がもつれ出す　蛙
ハイと言えば楽になるよと秋の空　ひろ子
顔じゃなく足の長さに負けました　義
ジーパンをはいて気分を軽くする　千枝子
しとやかな美人にも似て秋桜　正坊
賞状を沢山ならべて京料理　千楠
世渡りの器用羨む短気者　光子
何だっけ秋の七草字引ひく　綾子
百歳元気わたしの秋はまだはるか　さと美
病室の母へ月見の萩すすき　志華子
秋ですねぼくとデートをしませんか　佳秋
夏が逝き虫籠ひとつ忘れられ　恭昌
万歩計つけて秋色老夫婦　照子
夏休みすむ頃財布もそろり秋　絹子
気短な妻にしたのは僕でした　宣司
つらいことばかりじゃないよ風は秋　みつ子
救助した賞状我が家宝物　東雲
辛口の意見は聞かぬトップ達　靖巳
賞状が書けるようにと資格とり　会美

愛することの苦しさ知った鰯雲　澄子
ダイエット味覚の秋という魔物　石舟
カクテルにほろりシャネルの千鳥足　源一
半分を小耳に短気走りだす　周信
逃げ足に何時も負けます油虫　叡子
足だけが写る無気味なサスペンス　喜美子
台風が挨拶に来る小さい家　鬼遊
コスモスも秋には恋の踊りする　蕉子
賞状をいただいてから下り坂　希久子
ポケットに辛い言葉を入れて出る　凡子
キャンプ地のカレー辛くて具がでかい　正雄

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

少しずつ的をずらしている余生　ひかり
ダイオキシン残し煙は去ってゆく　吟笑
雨降って地は固まらず土石流　治延
生姜糖亡母の想い出買ってくる　マツエ
海もまたストレス溜まりウネリ出す　はつ恵
宝石を信じ切ってた二十年　よしみ
長老と祭り上げられ蚊帳の外　あきら
宝クジ同じ望みをもって買い　放任
胎内に置いて来ました計算機　坊太郎
何れ灰プラス思考の四季の花　輝夫
花火見て心の垢も吹き飛ばす　チカエ
線香の煙へみんな掌を合わせ　かおり
目覚しを二ツ並べて旅支度　いさむ
天高く駈け上ってゆく白煙　なみ子
金融の黒い流れに釘を刺す　正雪
真っ直ぐの他は知らない五寸釘　文仙
釘づけの心揺さぶる好奇心　くに子

倉吉川柳会　谷口　次男報

フルコースより素うどんがほどほどだ　明美
ほどほどでよかった嫁の位置高い　喜美子
ほどほどの所で喧嘩止めにする　よしえ
ほどほどの大きさにするにぎりめし　御前
子育ては誉める叱るもほどほどに　天雀
ほどほどを知っているのはお母さん　(山)康子
夕空を塒にかえる鳥の列　ちよ子
列席の上座下座でもめている　和枝
最後列で死に神と仲好しになる　菩句
年功序列こんな長閑な日もあった　節子
年号順に横一列の地蔵さま　螢
年甲斐もなく若者の列に入る　常代
金がないこんな時こそ冷静に　智子
どんじりに連なって来た子の笑顔　ゆり子
連立へ何時もうごめくボスの影　雄々
列島に断層地震起きたがり　小生
震度5が連絡なしに来て困る　次男
フラッシュの中で踊りの連続く　かつみ

川柳ねやがわ　江口　度報

はらはらとさせて脱いでる野球拳　ルイ子
人間の丸干しだ陽をおそれない　三千子
ピエロの衣裳脱ぐと乱れてくる呼吸　英壬子
脱皮する迄は語らぬ黒揚羽　洋
白樺の森ムーミンに会えそうな　茜
イソップの童話に狸出てこない　度

老いふたりメルヘンの野に花を摘む　権　太
お振り袖母のメルヘン総仕上げ　かすみ
メルヘンの世界求めてする手品　勇太朗
どの客も逸らさず妻の小商売　光　子
店員に恵まれ暖簾守ってる　頂留子
眼鏡屋の店員みんな眼鏡かけ　たもつ
店員の勇気が泥棒とり押え　亜也子
老店員の煎茶が美味い骨董屋　あやめ
店員の方言ほっと和ませる　一　風
言い勝って心に穴がぽっかりと　一　途
忘れたい記憶を埋める穴を掘る　亜　成
欲のない時の大穴から狂い　文　秋
雑巾の穴は勲章かもしれぬ　冬　葉
耳の穴ほじくり小言聞いてない　小　路
油断して歩けば人生穴ばかり　黎之助
仲良しにもうなり切れぬ針の穴　博　泉
穴埋める打つ手が傷を深くする　庸　佑
いいこっちゃ嫁の仕草が妻に似る　波留吉
台風も雨にもめげず百日紅　三　郎
介護法長生きをしてすんまへん　良　知
涼しげに氷の中の鱧料理　時　弘
山ゆりが昔の場所で咲く故郷　恵　子
火種だけくれる男がいて困る　礫
朝のお茶明るい記事を先に読む　吉之助

岬川柳会　八十田洞庵報

前向きに生きて根性溢れてる　勇
演歌には根性ものがよく似合い　龍　弘
七転び根性杖に起き上がり　朋　子
お言葉を返す根性見直され　浪速子
良心が小さな嘘も責めてくる　年　子
根性が見事にでてる特売場　狸　村
生きてゆく根性かえた師の言葉　令　子
ちっぽけな嘘にも良心責めてくる　俶　子
甘い言葉良心迷う酒の席　庄　六
親譲り根性までも生写し　正　美
根性は虫引く蟻の群で知る　幸　子
根性で灰色の青春つき抜ける　信　博
良心より悪魔があばれた十四歳　ヤ　エ
自惚れに良心までも逃げて行き　ユミ子
容疑者に良心見えず無表情　里　子
リーダーの苦労良心燃えている　みつ子
穏やかな顔に秘めてるど根性　鉄　男
良心を捜し求めて神頼み　洞　庵
良心に恥じよ投書のペンをとる

川柳塔おおとり　上田　俊路報

孫をだき老いてもわらべ歌はずむ　清　子
老いたとは思わぬけれど気がせける　伝　住
長生きが福祉予算ににらまれる　みさを
着飾ってみても老化が外に出る　艶　子
老いてなお心ときめく句に励む　せつ子
大山は春夏秋冬化粧する　小　生
化粧する老いを嗜む紅で生き　登　美
化粧せぬあなたがモナリザに見える　千　秋
寝化粧を知らぬ農婦の健康美　舎　人
満天の星が夜空に化粧する　孝　子
生きるのが辛い日紅をぬってみる　佳　子
死と生の狭間に生きて紅をさす　道　子
半世紀戦後泳いだつけが来る　風　花
ゆったりと泳ぐ鯉にも悩みあり　崇
当分は泳がせ様子見てみよう　敬之介
金づちで世間の波に乗りきれぬ　宏　章
節操が政界泳ぐ邪魔になる　幸次郎
犬掻きで生命を賭ける詩の海　黙　光
鯉のぼり泳ぎ疲れて陽が沈む　由多香
妻子負い男は意地で泳ぎ切る　銀　嶺
清水で泳いで雑魚は仲がいい　野　草
自己流で気まま泳いでいる余生　俊　路
世渡りへ上手に泳ぐ水すまし　雄々

横浜あおば川柳会　菱田　満秋報

タイムスの表紙を飾り時の人　早　智
重い辞典表紙の汚れ亡父偲ぶ　トヨ子
パラパラとめくって読んだことにする　亜希子
慰めの言葉に傷が深くなり　絹　子
深いしわ酸いも甘いも詰ってる　笑　子
陰干しが風にゆれてる衣替え　純　子
思い出をより深くしたハプニング　充　子
友情の深さのれんの奥で知り　徳　三
脳の中干したいような秋の空　和　可
割り当ての頁で足りぬ追悼記　達　也
絵草紙の頁に江戸の香が残り　広　和
表紙絵に押し花添えた日記帳　芳　江
罪深い愛が喪明けを待っている　見早子
ライバルに傷の深さは見せられぬ　道　子
新刊書まず立ち読みの一ページ　ちよ路

アルバムの頁ページに笑い声　明　玄
故郷に深傷負わせた人がいる　天　々
残り火の深手に脳は凍りつき　羊　子
なつかしい頁がこころ丸くする　サト子
貴方には心の襞も見てほしい　省　子
おねしょした布団はいつも裏に干す　政　勝
胃カメラの覚悟を決めた深呼吸　雅　子
ローカル線表紙の取れた時刻表　歌　子
物干しが私のサイズ教えてる　街　湖
干し草に身を投げ出せば風も鳴る　八重子
梅雨晴れ間湿気た脳も干しておく　良　子
自分史の最後はグッドバイで締め　潮　華
根の深さ見せない石に蹴躓く　満　秋

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

妖艶は昔楊貴妃今アグリ　順　三
結論は急ぐなワイン注ぎにゆく　北　歩
永遠のアイドル楊貴妃かも知れず　銀　波
偉人伝ズルワル知っている地元　凡凡子
こめかみにどっと淋しい秋の風　千加子
楊貴妃に会える気がする万華鏡　雅　城
私がわたしになれるワインタイム　和香子
送り絵が行くと津軽は虫の音　あかり
りんご熟れてサイギサイギの木霊する　ツ　ネ
食欲の秋ダイエットままならぬ　隼　人
ななかまど秋の戸口を開けてゆく　柳　々
鬼やんま立入禁止ヒョイと越え　哲　郎
一人旅ワイングラスも一つ買う　ふさゑ
赤ワイン二合は母のかくし味　花　匠

澄みきった空に真心あずけます　ヒサ子
いつの世もずるさを知らぬ蟻である　劦
栗落ちる音も知ってる不眠症　井　蛙
楊貴妃を探し酸ヶ湯に来たけれど　一　花
握手する笑顔に隠す手の汚れ　花　峯
踊り子の脚から小さい秋が立つ　黙　人
天高く馬肥える秋病んでます　しげる
拒食症秋の匂いに涙ぐむ　五楽庵

尼崎いくしま川柳会　春城　年代報

残暑厳しく一雨欲しい痩せ蛙　向　西
坂道を残暑きびしいペダル踏む　日出男
交番の手配書並ぶまだ残暑　義　芳
残暑見舞い寄越すはみんな古い友　渉
残暑厳しく豊作知ったむら雀　昭　三
逢いに行く化粧崩しにくる残暑　歌　子
昨日の夢は残暑のなかの笑い草　とみ子
荒波に向かい稼いだ父の首　十四郎
名園の鯉を見ているさらし首　紫　香
貧乏神に好かれて首が回らない　冨　世
寝違うた首が午後まで拗ねている　年　代
終電車誰かの首に蹴つまずく　光　穂
大正生れいろんな別れ胸に秘め　正　子
歯を磨く別れを軽く言うために　一
炎暑の電車でやって来た別れ　芳　子
歯切れ悪い話に汽車が走らない　夢之助
すこうしは遠慮しないか蟬しぐれ　愛
胸に棲む母を追い越すのはいつか　澄　子
蟬時雨あしたに続く日が動く　武庫坊

魂は売るなと朝顔がひらく　美　子
先人を棚に並べて古本屋の西日　比ろ志
地下街を流れ睡蓮は無口　薫
盆三日普段みかけぬ人にあう　昌　子
六畳ひと間にも夢をみせてくれる月　千　恵
うたかたの恋が咲いてる水中花　一　笛
傷つけば果実と同じ過熱する　久　子
足跡を褒めいつわりのない祝辞　白渓子
夕暮れの河原月見草の賑わい　すみ
同じ笛吹くのに子等が妻につく　弘　治
いつの日も呼べば少年駈けてくる　水　聲

尼崎尾浜川柳会　前田いわお報

古里の地蔵に傘寿の顔で会う　いわお
霊園ローン喉につかえて死ねません　冨　世
尋ねられ教えた道が筋違い　六　浦
年と共に動かなくなる専業主婦　鈴
台風の度に動かす植木鉢　すみ
人事異動心がいたむ新社長　向　西
リセットキー押して心の動き見る　正　治
ときどきは油を差せという動き　石　舟
癒えるまで動くな医者の目が笑う　弘　治
警策で背筋を伸ばす坐禅堂　満寿蔵
筋書きの通り溜まらぬ預金帳　勇次郎
黙もくと生く筋書のないドラマ　澄　子
老いさせて駄目と張り切る万歩計　十四郎
雲のショーあかず眺める窓にいる　昌　子
飾らない素顔で逢える好きな人　江　美
嫁姑素顔になって仲がいい　夢之助

ふる里に素顔で逢えるひとが居る　鹿　太

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

喝采の渦舞い上がり墓穴掘る　吉太郎
地車で舞うため生きている男　博　史
事故死した通夜は遠くで車降り　登代子
おだやかに一歩も引かぬ事故係　重　人
ダイアナの微笑を消したパパラッチ　石　舟
勝った日はチームメートとよく喋る　紫　香
チームワークよくて捗る棒グラフ　慶　子
ひしひしとマザーテレサの白い帽子　しげお
完封に九回裏がひしひしと　蕗　児
娘と嫁に元気と病気使い分け　正三郎
笑っても泣いても皺と年が増え　一　笛
医者よりも屋台の灯よい薬　悟　郎
観光地ここも都会が延びただけ　ただし
母さんの骨太　父さんつるし上げ　明　光
差し向いパック献立持て余す　知香子
鉛筆の芯丸っこいお人好し　きく子
親と子が一つのりんごかじる幸　英　子
四面楚歌じんわり白い目で見られ　柳宏子
夫婦茶碗　妻が大きい方をとる　正　坊

ローズ川柳会　山崎　君子報

傾いた神戸の空も甦る　てる
大空に落書きしたいチューリップ　ミサヲ
うたかたの夢と消えにし花の宴　キク子
かなしみは忘れなさいと空は青　みつ子
道しるべ学校にあった良き時代　藍

そっと押す枝折戸小さい秋からむ　哲　子
陶器展空の色あり登り窯　トミヱ
流れ星行方は告げず遠い空　まさお
落ち葉敷く道想い出がほろ苦い　澄　子
照る日くもる日道は果てなく続くなり　いわゑ
妻と娘の会話にいつも乗りおくれ　武庫坊
秋の空見上げていると少女になる　年　代
遠い日の記憶の空は青かった　雅　子
地図にない森の小道にある期待　はつ絵
ストレスを風にくるんで投げる空　民　平
台風一過だんご供える十六夜　君　子
大空へとどくブランコ漕いでいる　義　子
満天の星空虫の大合奏　笑　女

川柳塔碑 合祀法要の御案内

高野山大霊園内の川柳塔碑への本年度物故者の合祀慰霊法要は11月14日（金）に行われます。

今回の合祀者は小出智子氏ほか13名で遺族ならびに墓参参加者の参加費は交通費・昼食費とも7000円。

当日、午前8時40分に南海なんば駅高野線改札口集合。特急券を用意しますので、参加者は川柳塔社事務所までお申し込みください。

京都塔の会 秋の吟行句会

とき　11月8日（土）
ところ　午前10時30分JR花園駅集合
行先　妙心寺塔頭・桂春院拝観
塔頭・如是院（句会場）
兼題　都・着る・健康（各題3句）
会費　4000円（昼食とも）
投句料　80円切手3枚同封
申込締切　10月末日
〒600京都市下京区諏訪町通松原下る
都倉求芽まで

第16回鳥取県没句川柳供養大会

とき　12月14日（日）午前10時開場
ところ　鳥取共済5階大ホール
参加費　4500円（軽食・懇親会など）
兼題（各題二句・席題なし・締切11時半）
「敗者復活吟」　河内天笑選
「また明日」　尾崎泰山選
「ドッキリ」　野沢大漁選
「無記名」　和井観洋選
「天の声」　野口節子選
「どこへ行く」　岸本宏章選
「中　立」　土橋睦子選
「それぞれ」　田中一眸選
「しっかり」　小谷孝美選
詳細は680鳥取市二階町3―102植田一京宛

エッセー

辞書いろいろ

岩津ようじ

川柳をやっていると、辞書を引くことが多い。しかし老眼鏡をかけ、指に唾をつけて、辞書の薄い頁を繰るのは結構くたびれる。

それやこれやで数年前、「電子ブックプレーヤー」というものを買った。これに小さな円盤（電子ブック）を挿入すると、円盤が記憶している字や絵を読み取ってくれる。円盤一枚には広辞苑、大辞林ぐらいはもちろん、全二十六巻の百科辞典まで覚え込ませることが出来る。各種辞書や「七年分の天声人語と社説」とか、「日本の歌三千」など沢山の電子ブックが販売されている。

私は『大辞林』の電子ブックを買った。プレーヤーにかけると、単語を頭からも引けるしお尻からも引ける。「ねこ」と入力すると「猫」「猫足」「猫いらず」などの他、「寝込み」「根瘤」「寝転がし」なども出る。ここまでは紙の辞書と同じであるが、お尻から「ねこ」を引くと「泥棒猫」「恋猫」「招き猫」その他「しんねこ」「ねんねこ」や「中里恒子」まで「ねこ」で終わる単語は全部出てくる。

「ねこ」を「猫」という漢字に代えて引くと、大辞林の二十二万の見出し語のどこかに「猫」の付いている見出しを全部捜し出してくれる。「猫」の付く見出しは八十一件、「犬」は百四十五件もある。「目」や「手」になると、千件を越す。

電子ブックプレーヤーの欠点は反応が遅いことである。該当する見出しが多ければ多いほど表示が出るのが遅くなる。「目」や「手」の付く言葉を検索すると三十秒近く待たされる。もっとも人間が大辞林の中の「目」の付く見出しを全部拾ったら、何日かかるか分からない。そのことを思えば三十秒ぐらい何でもないが、それでも結構いらいらする。

電子ブックプレーヤーのもう一つの欠点は持ち運びが不便なことである。コードでも電池でも使えるが、電池で使用すると、使い方にもよるがすぐ消耗する。

そのころ「電子広辞苑」が発売された。これは電子ブックプレーヤーとは原理が違う。広辞苑専用で、それも頭から引くだけである。しかし反応は早く、入力するとすぐに該当語が出てくる。重さも三百グラムで電子ブックプレーヤーより軽い。私は大いに興をそそられたが、電子ブックプレーヤーも買ったことだし、我慢することにした。

息子から電話があった。孫が小学校を卒業する。卒業式にはみんなブレザーを着る。手許不如意なので、じいちゃん、ばあちゃんでブレザー買ってくれや、という。仕方がない。家内がデパートからブレザーを送った。ズボンと一緒で四、五万円かかった。このブレザーは卒業式に一度着るだけとか。

私は電子広辞苑を我慢している自分が可哀想になり、早速電気屋へ行って我慢していた製品を購入した。使ってみると電子ブックの大辞林より便利である。「猫」や「犬」をお尻から引いたり、関連語を全部調べるなんてことはそうそうあるものではない。頭から引くだけで十分である。それにこちらは一度電池を入れると三、四年は保つ。

ちなみに広辞苑や大辞林の電子ブックは一万円ほど、電子ブックプレーヤーは三、四万円。電子広辞苑も三、四万である。いずれも数年前の製品の価格だから、現在ではもっといい製品がもっと安く出ていると思われる。

興味をお持ちの向きは、一度電気屋を冷やかされんことをお勧め申し上げる。

柳界展望

★尼崎市文芸祭の入選者が決定、本社同人の川上大輪氏が2席、奥山美智子さんが5席に入賞した。

胃の底に消化不良の嘘がある　川上　大輪

言い残す事などはない茶をすする　奥山美智子

なお、山田高夫・小島蘭幸・古久保和子・林荒介・春城年代・三宅保州の6氏が佳作に選ばれた。

★第49回西日本川柳大会は**9月7日**、久米南町中央公民館で225名が参加して開かれたが、本社同人の河内天笑氏が総合5位、土橋はるお氏が7位、林荒介氏が11位、八木千代さんが13位に入賞した。

★第5回和歌山県川柳大会は**9月14日**、JA会館で187名が参加して開かれ、本社同人の岩佐ダン吉氏が市議会議長賞、田中みねさんが県教育委員会賞を受賞した。

小さいなあ海に抱かれている私　岩佐ダン吉

誤字脱字　敵から届く果たし状　田中　みね

★第21回鳥取県川柳大会は**9月28日**、気高町営国民宿舎で173名が出席して開かれた。本社同人の各賞受賞者つぎのとおり。

〈気高町長賞〉

健やかな余生へ畳替えをする　西川　和子

〈同町議会議長賞〉

海軍の歌をうたうと咳が出る　原　章峰

〈鳥取県川柳作家協会会長賞〉

心のひだを揺れる君の静脈　林　荒介

また同日、授賞された第18回鳥取川柳作家協会作品賞には、同人の黒田くに子さんが準入賞、鹿島繭・雑賀美代・中原みさ子の3氏が佳作に選ばれた。

★第20回神戸川柳大会は、**11月23日**午前10時から神戸市立総合福祉センター5Fで開かれる。お話は園田学園女子大学教授吉村稠氏、課題と講師は、策＝春城武庫坊▽配る＝卜部晴美▽巣＝藤本静港子▽狂う＝橋本衛門七▽壁＝小松原爽介▽刻む＝去来川巨城▽卑怯＝平山繁夫、各題2句、締切午後零時四〇分、会費1000円。神戸川柳協会主催

★第1回大東市秋の川柳まつりは**11月23日**午後零時半から同市立総合文化センターで開かれる。題と選者はドラマ＝中尾飛鳥▽影＝田中新一▽真面目＝住田英比古▽岐路＝中田たつお▽指紋＝森中恵美子▽閃き＝山本翠公、各題3句、午後1時締切、参加費1000円

主催はだいとう番傘川柳会

★NHK学園生涯学習フェスティバル第6回根上川柳大会は7月13日根上町総合文化会館で開かれ、本社同人門谷たず子さんの「花開く地熱を母も抱いている」が根上町議会議長賞、同吉川寿美さんが特選を受賞。

★第33回川柳塔きやらぼく忘年句会は**12月7日**午前10時半からてんまやホールで開く。兼題は、塀・破る・卵・楽器・ピンセット・刻む・枠・貰う、各題2句、午後零時半締切、会費4000円（昼食・懇親宴共）

▽出　版△

■同人合同句集『**川柳塔まつえ**』（復刊30周年記念・A5判100頁）同人23名と元同人・物故者の作品を収録、川柳塔まつえ吟社刊

▼おことわり▲

■**9月号**＝P61下段（水煙抄）今関貞人氏の4句目・「幾山河越えて日の丸美しい」を本人の申し出により削除します。

▼訂　正▲

■**10月号**＝P82・一路賞受賞作品（海老池洋）「縄文の蕾で咲く日待った種」→「縄文の**壺**で咲く日**を**待った種」。謹んで訂正します

▽ご芳志△

小出智子追悼句会に際し伊藤定子さん、石倉美佐子さんから金一封を拝受。

米田恭昌氏から四先生追悼川柳大会の録画ビデオを寄贈いただきました。

▼訃　報▲

■時末一灯氏（同人・本名聰・岡山市）、9月30日、急性心不全のため死去、69歳

■山海五月氏（同人山海友熙さんの夫）、10月3日、喉頭がんのため死去、71歳

11月各地句会案内

句会名	日時と題	会場と投句先
富柳会	2日(日)午後零時半から **富田林市民川柳大会**	富田林市立中央公民館　10月号P115参照 〒584 富田林市南大伴町4丁目1－10　池　森子
八尾市民川柳会	3日(月・祝)正午から **八尾市文化祭川柳大会**	八尾市文化会館4F　10月号P114参照 〒581 八尾市上之島北1－15
川柳ねやがわ	3日(月・祝)正午から **寝屋川市民川柳大会**	寝屋川市立総合センター4F　10月号P114参照 〒572 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
堺川柳会	6日(木)午後1時から 呼ぶ・行方・批判・癖	堺市総合福祉会館　南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2－16－3　河内天笑
尼崎いくしま	7日(金)午後1時から 骨・泣く・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F　阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5－25－17　春城年代
京都塔の会	8日(土)午前10時半集合 都・着る・健康	**秋の吟行句会**　本文P110参照 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル弁財天町　都倉求芽
川柳塔まつえ	8日(土)午後1時から コーヒー・散る・箱	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
川柳塔わかやま	9日(日)午後1時から 箱・相談・残す	近鉄カルチャーセンター　JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111－2　牛尾緑良
西宮北口川柳会	10日(月)午後1時から 信号・追う・落ちる・自由吟	西宮市立中央公民館　阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662 西宮市両度町2－19－515　山本義子
ほたる川柳同好会	11日(火)午後1時から 駅・柔らかい・いつも	豊中市立蛍池公民館　阪急宝塚線蛍池駅西へ150米 〒560 豊中市蛍池中町3－10－28　井上直次
岸和田川柳会	15日(土)午後1時半から 譲る・予告・落伍・料金	市立福祉総合センター2F　南海線岸和田駅東歩3分 〒596 岸和田市上松町610－85　芳地狸村
もくせい川柳会	17日(月)午後1時から 世渡り・たくさん・割る・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801　田中正坊
高槻川柳サークル卯の花	20日(木)　正午から 好意・これから・恨む・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3－8－8　川島諷云児
南大阪川柳会	21日(金)午後6時から 才覚・細工・採算・刺さる	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15－18　寺井東雲
東大阪市川柳同好会	22日(土)午後6時から 守る・損・深い・モデル	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3－21　片岡湖風
はびきの市民川柳会	23日(日・祝)午後1時から 良心・いろいろ・リボン・「脅す」	羽曳野市立陵南の森公民館　近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満　敏

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

♡今年一月号から曲りなりにも、やっと十冊の川柳塔誌を皆さんにお届けすることができた。一応レールは敷かれてはいるものの、毎月、定期に同人誌を出すのは、大変なことである。

♡川柳塔も水煙抄も毎月投句者数が違い、また他の記事の関係からもページ数が変ってくる。偶数ページにするためには、エッセーなどの原稿を予備として常に用意しておかねばならない。

♡川柳に関することでも、身辺雑記でも、一四〇〇字にまとめて、編集部宛に送っていただけたら有難い。その他、三〇〇字の「ひとこと」、「この一句」には句と作者名に一八〇字程度の文章をつけて、お送りください。

♡昭和五十二年度の路郎賞受賞作に、森井菁居さんの「生き方の違いを敵のように言う」がある。二人寄れば、二つの生き方、考え方があるわけで、一つの結社には、その人数分の生き方考え方がある。それを互いに認め合い、理解し合ってこそ円滑に和が保たれる。いろいろな違った色の糸で美しい布を織るように、それぞれの色を損わず、引き立て合う調和のとれた結社でありたいと思う。「人類は悲しからずや左派と右派（路郎）」の句もある。

♡先日来、住んでいるマンションの外壁改修工事が行われている。電気ドリルなどの騒音、また、塗料の匂い、住民には一時的なものであるが、工事の人達の職業病のことも改めて考えさせられる。生きてゆくことは本当に大変！　（み）

選者の心得

作者が一生懸命作った句が、選者によって天位にもなり没にもなる選の重みは言うまでもありませんが、数学のように正解がないだけに選者は心しなければと思います。おこがましいのですが、私なりに選者の心得十か条を次のとおり心掛けています。大方のご批評を賜われば幸甚です。

一　言い訳をしない
二　独断や偏見で選ばない
三　好きな句よりも良い句を選ぶ
四　選は自分だけでする
五　作者や句におもねらない
六　欠陥句（差別用語、語呂合せ、暗合句等）は採らない
七　分からない言葉等は調べる
八　選句後、丹念に見直す
九　わかりやすい披講に努める
十　良い選者を見習う

三宅　保州

▼旅（旅行ではない）に出て、その土地の酒を嗜む場合、酒肴（アテ）にもこだわりたい。

▼最近は栽培技術や流通機構、あるいは保存法の革新により、年がら年中何でも手に入るけれど、地酒はその地元で飲むのが一番旨いように、アテの方も凝った料理ではなく、素材の持ち味を活かした、素材でその土地ならではのものを味わいたい。

▼もちろん酒も料理も、体調や天候等によって微妙に変化するものではあるが、大きな要因は作ったり獲れたりした場所の空気と、飲んだり食べたりするときの空気が同じだということが、旨さをより引きだしているのだと思う。

▼渓谷の宿で海老フライが出てきたり、海辺の宿で山菜そばが膳に並んだりすれば、全くもって興醒めである。

▼私の記憶に残るアテは、熊本の馬刺しと辛子蓮根、奥別府の豊後牛と大分地鶏、三陸は宮古の海鞘（ほや）がある。もとより海鞘の強烈な磯くささは、人により評価の分かれるところだろうが、私にはこの上ない美味だった。そこで拙吟〝磯の香や妻の分まで食べた海鞘〟お粗末さま。　（金）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（**一月号**）　地名　　雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人 ・ **誌友**　マルで囲んでください。

作品募集

1月号発表（11月15日締切）

川柳塔（8句）　橘高薫風選
水煙抄（8句）　西田柳宏子選
渺湖抄（3句）　八木千代選
茴香の花（3句）　宮西弥生選
課題吟（3句）
「初」　蒔苗果林選
「光」　松尾柳右子選
「なじむ」　槇田英詩選
初歩教室「動く」（3句）　吐田公一担当

2月号
課題吟「財　布」「パ　ン」「いたわる」
初歩教室「たたく」

本社11月句会

とき　11月7日（金）午後5時半
ところ　メンズファッションセンター
中央区内本町1－1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（3番出口）交差点南西角
兼題「早　い」　福井桂香選
「ばらばら」　江口　度選
「吠える」　山本希久子選
「柔らかい」　宮園射月芳選
「紅　葉」　橘高薫風選
席題　1題　当日発表（各題2句以内）
会費　500円　投句料　400円

本社12月句会　8日（月）予定
兼題　「ゆるやか」「活　気」「失　礼」「ジンクス」「豆　腐」

夜市川柳募集

第6回「ごはん」　大西泰世選
ハガキに3句　11月末締切
投句先　〒593 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

NHK川柳作品募集

課　題「住　所」　森中恵美子選
ハガキに3句　11月10日締切
投句先　〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発　表　11月22日（土）午前11時5分からラジオ第1放送（予定）

「川柳塔」への投句について

①川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限ります。
②渺湖抄・茴香の花欄および一路集（課題吟）への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花欄は女性だけ。
③各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

定価　六百円（送料76円）
半年分　四千円（送料共）
一年分　七千九百円（同）
平成九年十一月一日発行
編集兼発行人　橘高薫
印刷所　美研アート
〒545
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話　（06）六九一―六九一四番
振替　〇〇九八〇―五―三三三六八番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成九年十一月一日発行（毎月一日発行）

全日本柳人写真名鑑

日川協では昭和55年・同60年の二回にわたって、『日本川柳人名鑑』を刊行、さらに社団法人設立を記念して平成5年、書名・体裁・内容を新たにし、全日本の柳人を網羅した『全日本柳人写真名鑑』を発刊、好評を博しました。今回はあれから5年目にあたり、さらに一段と充実した平成10年版を刊行したいと存じます。みなさま方には一人残らず、この名鑑に名をつらねられるよう、お勧めいたします。

資　格　参加は柳人であればどなたでも結構です。
内　容　各人ごとに、①氏名（柳号）②生年月日③職業④所属柳社⑤住所⑥電話番号⑦顔写真⑧自薦作品3句（所定用紙があります）を掲載
体　裁　A5判・本文アート紙500頁・美装本
刊　行　平成10年3月予定（参加者に1冊送付）
参加費　4000円（申込時にご納入ください）
締　切　平成9年11月15日（土）厳守
申込先　〒530　大阪市北区天神橋2丁目北1―11―702
社団法人　全日本川柳協会
電話（06）352―2210

自費出版
川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします

美研アート

〒530 大阪市北区浪花町9番4号
TEL・FAX(06)372―1178

雑誌　05703―11